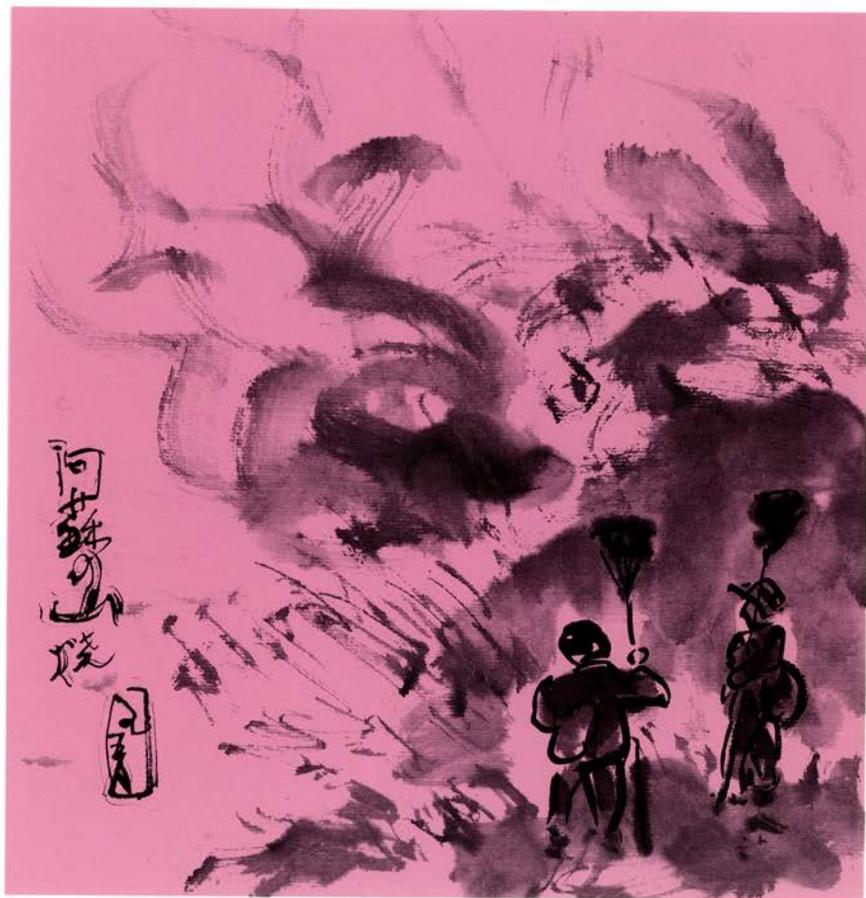


# 川柳塔

創刊大正十三年  
通卷八一三號



白川協加盟

No. 813

同人特集・酒 百句

二月号

## 原稿募集

テーマ「戦後五十年と私」

今年には戦後五十年になります。この記念すべき年にあたり同人のみなさんからエッセーを募集し、選考のうえ、誌上に掲載いたします。分量は1000字程度、内容は自由ですが、必ず川柳とのかかわりについて触れてください。掲載分については薄謝を呈上します。

▼締切 2月24日(金)

(封筒に応募原稿と朱書き、本社事務所へ)

川柳塔社

句集

## 甲吉川柳

工藤 甲吉 著

西尾 葉・東野大八・橘高薫風序文

B6判・240頁・クロス装製本

定価3000円(〒380円)

柳歴六十余年 甲吉川柳の集大成

発行 川柳塔社

## 第19回 全日本川柳長野大会

とき 6月11日(日) 午前9時半開場

ところ 長野県松本文化会館(松本市水波)

宿題 第一部(事前投句・5月10日締切)

「群」 西山 金悦選

「刻む」 矢島 破醉選

「順番」 吉岡 茂緒選

各題2句・無記名、封筒に住所・氏名を明記し、出句料1000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記へ

出句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11

ステップイン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第二部(当日出句・午前11時半締切)

「政治」 田中正坊選

「掌(てのひら)」 木野 由紀子選

「歩く」 須田 尚美選

「充電」 今川 乱魚選

会費 3500円(昼食・記念品代共)

観光 6月10日(土) 3500円

前夜祭 同 午後6時 5000円

宿泊 浅間温泉ウエストンホテル

申込先 〒384 小諸市小諸郵便局私書箱26号

全日本川柳長野大会事務局

# ふぐ仲間

## 西尾 葉

雪が降る、寒が降る。二月は極寒だ。生活の知恵として、腹から暖まることを考える。されば口に旨くてぬくもるものとしては河豚である。しかし、ふぐには毒がある。

おそろしきもの食ひたき雪の空  
ふく汁を食はぬたわけに食ふたわけ  
という川柳がある。

芭蕉の俳句にも、  
あら何ともなきのふ過ぎてふくと

汁

また、蕪村にも

ふく汁の我活きて居る寢覚哉

一茶もまた

ふく食はぬ奴には見せな不二の山

などと詠んでいる。川柳に

ふく汁を一つ蓮としゃれて食ひ

ふぐで死んだら、あの世では一つの蓮

のうてなに並ぼうというところ。

雪の晩ふくだんべいと藪医起き

「ちよつと診てやつて欲しい」と寒い  
晩に起きた。藪医がぼやいているところ。

よく人口に膾炙された句に

片棒をかつぐ昨夜のふく仲間

というのがある。焼場へ行く棺桶の中も、  
前後をかつぐ二人も、昨夜ふぐを食った  
仲間である。

寒い雪空に、鰻以外のぬくもる食べ物  
がある。即ち薬食いという鍋物である。

日本人は奈良時代から肉食はしなかつた。それは熱心な仏教信者だった天武天皇が、天武四年に肉食禁止令を出したからである。

俳人几董の句に

薬食ひおぼつかなきに人誘ふ

下って、江戸時代になると、寒のうちに、猪や鹿の肉を食べて身体をあたためたことを薬食いと言った。しかし明三・

智という句に

女房はきせるも貸さぬ薬食ひ

というのがある。

ももんぢい和尚も化けて食ひにくる

柳 79

ももんぢいなぞも食ひますこわい嫁

柳 72

獸肉販売店をけだもの屋、ももんぢい屋と称した。猪の肉を牡丹鍋、鹿の肉を紅葉鍋というて、けだもの屋は看板に書いた。

「牡丹に唐獅子、竹に虎」の文句から猪の肉、また鹿の肉は、古今集の「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき」という古歌から紅葉と呼んだ。そこで

けだものや やまと言葉に書いてお  
き (安五・礼)

という句がある。

また猪の肉を山くじらと呼んでいる。

これは昔、一般に獸肉を忌んで、わざと山鯨と呼んだのである。

山鯨スキー宿へ売りにくる

などの川柳がある。

酷寒の折柄、ふぐと汁でも、薬食いで  
も食べて、くれぐれもお風邪を召さぬよ  
う、折ってペンを擱く。



# 川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ふう仲間……………	西尾 葉……………(1)
追憶……………	黒川 紫香……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	橘高薫風選……………(4)
自選集……………	東野 大八……………(44)
川柳の群像 後藤蝶五郎……………	
■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十四～二十五丁)……………	橘高薫風……………(53)
■同人特集 「酒 百句」……………	高杉鬼遊選……………(54)
大空のころろ(50)……………	新家完司……………(48)
水煙抄……………	越智 一水……………(76)
秀句鑑賞 「同人吟」……………	
水煙抄……………	

## 追憶

堂島川のほとり

黒川 紫香



暖かい陽ざしを受け、なんとなく北浜へ来たついでに中之島公園に寄ってみた。昼過ぎなので、近くのサラリーマンが川筋を散歩しているのと、カップルが体を合わせるようにベンチで語り合っているぐらいで、閑散な時だった。難波橋を過ぎて先端を曲ると、土佐堀川から堂島川と名も変わり、緩やかに流れていた。思い出したように水上バスが通り過ぎると、向い側に高速道路のコンクリート橋脚が並ぶ。その地が私の本籍地西天満だ。昔は樋上町と言って近くには裁判所などの建物があり、川沿いの方にはポツンと商店があるだけで、他は「しもたや」といわれる静かな家ばかりだった。

私が小三(十歳)の頃、倒産による借金苦から逃れるため、転々と住居を変えた父がやつと大阪に戻り、落ち着いたのに、何を思ったのかここと目と鼻の先にある堂島にあった本籍を移し、それも一年余りしか住まなかったこの地にと不審に思ったが、尋ねる暇もな

路郎賞・川柳塔賞中間発表

渺湖抄

小出智子選

(77)

■川柳こぼれ話「川柳とメルヘン」

田中正坊

(83)

茴香の花

西出楓楽選

(84)

「鈍い」

島崎富士子選

(86)

「てれる」

藤解静風選

(86)

一路集「テープ」

江原とみお選

(87)

初歩教室「喜ぶ」

吉岡美房

(88)

各地柳壇(佳句地十選/江口度)

二月各地句会案内

(90)

柳界展望

編集後記

(102)

二月各地句会案内

座右の句

(106)

私の句

三日前とおんなじことを書く日記

(智子)

一日の化粧おとせば自我が出る

玉置当代

(108)



く終った。それはとも角として、私にも思い出があり、この地に郷愁がある。昔の堤にこの家が建っているから、川側に柱を立て浮き床になっている家の奥の部屋から堂島川を見下ろせた。当時は、川の水は透明とはいかないまでも、泥臭くなくきれいだった。天神祭の時は横のお台場にお迎え船が着いたりしてそれは賑やかだった。

子供心に印象として残るのは堂島川で催されるボートレースである。社会人や実業団のレースもあったが、応援を含めて活気のあったのは旧制高校のレースである。新聞社が主催か後援をしていたので、華やかで熱が籠っていた。ゴール地点とは家が少し離れていたが、窓からレースが良く見え、途中の熱漕が手にとるように写った。ゴールの熱間に上がった花火から、勝者が頭に巻いていた鉢巻の色の旗がフラフラと舞い下りたので勝敗が分かった。

通った西天満小学校は、北へ少し行った所にあり、立派な校舎だった。変わっていたのは、全校庭が赤煉瓦で敷き詰められ、土の句のするのは僅かな砂場と土俵だけだったと思う。毎日の行動を採点する通知表があつて、その日の成績を甲乙につけて家へ持って帰らせた。五月雨の頃の堂島川は特に美しく、銀の糸のように雨が天から垂れて水面を飾っていたのが未だに忘れられない。



橘 高 薫 風 選

出雲市 伊藤 寿美

にこごりの溶ける温みよ亡母の膝

ふと亡父の便りが欲しい硯箱

落葉帰根 孤児にはるかな父母の国

上品な顔が大きなたづら選る

均等法 涙は武器にもうならぬ

菩提寺も無住 椎の樹が残り

横浜市 菱田 満秋

汚れなき世界が水平線にある

背のびをすれば見えそうな三十年

鍵盤をたたくに惜しい力瘤

脚線美わりと大きな靴を履き

仏壇もアルカリ性の水にする

鳥とて不吉を嘲うわけでなし

大阪市 西出 楓 楽

昔ばなしするたび小さくなる母よ

念を押す方も押される方も老い

ふるさとも近頃やはり餅つき機

世が世ならずしずめわたしお家はん

人の世やまむしガラガラ蛇コブラ

主婦業に引退はなし昼の月

竹原市 小島 蘭 幸

幻という酒がありひとりいる

ダイエットなどしなくてもよい 妻よ

僕によく似た電車と今日もすれ違う

四十七歳まだ一本の川を持つ

逆上がり出来なくなってきた仏

完璧という淋しさもあるのなり

五所川原市 斉藤 効

幻想のこけし垂乳根豊かなり

茅葺の軒で生まれた小鳥です

農業が好きで意見申します

人参を一本持って馬に会う

神水を頂く空瓶を購うて

ねぶた絵師逝つてお山も見えませぬ

守口市 森川 まさお

去来今<sup>いま</sup> 掘り下げて思う十二月

鬱になり固いせんべい食いつづけ

深い闇 田舎の奥はつやがあり

片側を日が差し葬列通り過ぎ

老人が影失うて帰りけり

裏もまたあでやかもみじ散るときは

松原市 小池 しげお

内需拡大コートは長く袖ながく

学歴に高小卒と書く自信

靴が鳴る唄をどこかに置いてきた

夢に出た亡父は怒つてなどいない

追伸が本文よりも名文句

万年青の実 思い出だけになりました

島根県 堀江 正朗

見えぬけど時の動きを読みながら

戦盲の祈り妻の手放すまい

戦盲の僕も胸張る自画自賛

足跡を汚したくない老いの道

雪ん子よ見えたあの日が懐かしい

通院も夫婦で縋り合いながら

大阪市 神夏磯 典子

梅ほころぶ友が減らないのが嬉し

病んでみて透明色が見えてくる

有頂天すっぱい味が分からない

ここも今日 晴れであろうか風景画

安定剤 寝なけりや明日が来ないから  
大阪市 本間 満津子

祭笛 幼馴染に会えそうな

黄昏の別れあと振り返りふり返り

電話したいな なんぞ用事はないかないな

そやそやの中で考えいる無口

気散じな一人暮しはボチボチと

神のうた大江光のピアノ曲  
大阪市 板東 倫子

お任せをしたいが医者が若過ぎる

浪速のジョー 不惜身命見せて散り

ほほえみは極致の慈悲か円空仏

家中がトドになつて寝正月

大阪市 渡部 さと美

妻の手へするりと渡るチヨコもらい

盆栽の松がどっかと居てくれる

いさぎよき散りゆく花も葉も互角

泣き顔も笑顔も見事華やかに

あの人も見えるしっぱを笑えない

大阪市 河井庸佑

支えられここまで来たと驕らない  
手の内を読まれたことは知らぬ振り  
スケジュール変えねばならぬ電話ベル  
なまじつか妥協をしたでほぞを噛む  
見通しはあるが横槍にも備え

大阪市 大塚節子

清風満堂 読経済えたり石の庭  
秋の道 顔をかすめて紅葉落つ  
生涯学習 雀を真似て百までも  
虎視眈々 笑顔笑顔で新進党  
汐吹き(神楽面)の顔して食うや酸い蜜柑

堺市 桑原道夫

白鳥が来てしばらくの海の彩  
滑稽な男女だんだん寒くなり  
すこし小さく極月の顔洗う

文楽や男は口説かれやすきもの  
父親の帯がじゆるじゆる伸びている

堺市 山本半銭

象に乗る菩薩に亡母の影を見る  
風邪引いて見舞に行けぬ日が続き  
いも判の失敗続き暮れ迫る

趣味の数引き出しのなか入り混じる  
湯の中に乳房浮くの確かめる

吹田市 山本希久子

何を信じ何を疑う月の暈  
人生薄暮もう待つこともなし恋のバス  
金のある強みと金のない強味  
小さな恩忘れずにいるのはベツト  
ふくよかな女神がダイエツトに励む

松原市 玉置重人

脈ありと見てじっくりと借る話  
寝仏を撫でてでも悪いとこだらけ  
牛井は大盛り屈託ない若さ  
年下の主人大事な若づくり  
妻病んで米とぐことのむつかしさ

箕面市 坪田紅葉

夜も更けて一人で過す雨の音  
激動の一年暮れも近くなり  
惜しまれて死ぬのはよいが後始末  
取りまぎれ悲しむ間もなく一周忌

明日の事わからないから生きられる

箕面市 椎江清芳

喪が明けて甘えておれぬ紅を引き  
気兼ねなく秋刀魚の焼ける里に住み  
ふぐ鍋にまだ一人ではよう行かず  
東尋坊 西と東の波しぶき

荷を解けば国の訛りが転げ出る

箕面市 岩 津 ようじ

その本音 堰切るばかり酔いまわる

鉢植えの石榴 欲求不満の実

三味線とピアノと虫の声が好き

昼の月 昼の灯明 法善寺

デイスカパー定年の味昼の酒

豊中市 安 藤 寿美子

独居老人の心構えを聞かされる

お金無い事をすっかり忘れてた

落葉道 平成六年が暮れる

十二月やっぱりお寒くなりました

カレンダー顔見世の日は二重丸

豊中市 田 中 正 坊

君はどう生きたか戦後五十年

アメリカは遠し不惑の子を想う

不覚にも子の夢を見た冬の月

父と子はかくあらまほし大江父子

来る年にワインレッドの手帳買う

吹田市 古 川 喜美子

人の世をやさしい嘘にかこまれて

荒い波立てる緋鯉の若ければ

抱きしめる仔猫芯までやわらかい

お茶漬の味にも似てる好きな人

鏡に言う私のせいじゃないよねえ

茨木市 藤 井 正 雄

晩酌へ今日の出来事 娘のお酌

正月帰省 祖父の人生聞くいろり

不倫めく歌が流れて飲むワイン

マラソンへ孫と小旗を振りに行く

カットパン怪我していない子にも貼る

寝屋川市 江 口 度

尼寺に多いと思う冬椿

妻の持つ一途の風に気付かない

暖冬へきつちりあがるオリオン座

神様の答え見えだす崖つぶち

子守唄うたつてるのは縫いぐるみ

藤井寺市 吉 岡 美 房

正月が全部休みという不安

新しい仮面で揃う互礼会

飲んで寝ていたなら正月無事に済み

正月の夫婦げんかがなつかしい

不景気は抜けたと偉い人が言う

八尾市 高 杉 千 歩

歳豆を数える背が丸くなり

二ヶ月の鬼と土鍋をつついてる

鬼さんと長生きごっこ外は雪

お洒落してリハビリに行くとは言えず

点景に恋しい人を遊ばせる

岸和田市 高須賀 金 太

尼崎市 春 城 年 代

俺の敵は俺だと自問自答する

夢追えばいつも常識じやまになり

灰汁しぼり出すように聴くベースソロ

石ころの代わりに空き缶蹴っている

明日からの道をきれいに掃いておく

富田林市 片 岡 智恵子

冬ごもり小さく暮して春を待つ

君のこころ試す小石を投げてみる

こぼれ種やさしく土に迎えられ

評論が後追いかけるいじめの死

まだ火曜だるい話を聞かされる

河内長野市 植 村 喜 代

ここに来てここの暮しに山がある

北風も南風もあり人が住む

草も木も枯れると冬が喋り出す

秋の暮れ誰に明かそう胸の内

鱒酒を毎晩飲んでいる無職

尼崎市 田 中 薫

芒野の風でのひらへ来て生臭い

平和は発泡スチロールの角から潰れてゆく

にんげんの正義を抱いて水を濁らせ

裏切りを匂わせ新聞が届く  
身の内に恥の音する初氷

肩の荷をおろして夫婦競わない

頭から足の先へと老い迫る

検査入院あすに控えて冷えきびし

おしゃべりお米のニックネームをご存知ない

是非もないことにきちんと眼をさます

尼崎市 春 城 武庫坊

一輪挿しに見事な秋が残ってる

秋ぬくし一音欠けたハーモニカ

手を叩く目処が決まらず寒の菊

一步前進 二歩後退の老いの日々

次に来る波に乗らねば浮かばれぬ

西宮市 林 はつ 絵

応報という字ちらつき暮れてゆく

敵も老い意気投合の日向ぼこ

柿の種 無事に育って恩返す

湖のように昨日の波紋忘れよう

仏事済み満ち足りて椀拭いている

西宮市 西 口 いわゑ

雨だれは天女のピアノかも知れぬ

孫の絵を年中かけて居て飽きぬ

暇そうな店で結構待たされる

酒樽の底でバツカス様も酔い  
すすきの穂ふわりわたしを消してくれ

西宮市 亀岡 哲子

こちらから掛けた電話の聞くばかり

笑み給う仏に願うことはなし

水たまり越える飛び石一つ欲し

形見なる鉢植え白い椿咲く

一盛り柿熟れたのも固いのも

伊丹市 樫谷 寿馬

リハビリの杖 百歳へ握りしめ

冬の蠅瘦せたわが手で叩かれる

水不足 天はさんまで埋め合す

友を待つ碁盤が影をひく西日

デパートの風呂敷売り場で買う国旗

伊丹市 山崎 君子

花の顔 雨が拭うた初春の顔

親しみは少しいびつな庭の菊

御用聞き粗末な花を賞めている

かけ込みで電車のドアがみんな開く

蓋の艶 亡母の手垢と我が手垢

宝塚市 小倉 藍

珍客を迎えたような雪の朝

毛皮よりタオル一本利用価値

手拭が干からびている風邪三日

踏切りで小さくなった影法師

水分がすっかりぬけて生き仏

宝塚市 中田 純次

歎異抄を杖に三昧探してる

ひと言で皆が納まるいい意見

髭づらの孫は厄介叱れない

老友の乱れがちなる酒悲し

ポックリといきたいなどは寝言です

加古川市 吐田 公一

名も知らぬ花に異国の秋を知る

家々にお化けかぼちゃのハロウィン

七癖の一つを孫に真似られる

無欲など一人も居ない神詣で

特急も普通も同じ車止め

姫路市 大原 葉香

仏様の孤独慰め経を読む

正夢の答え出ぬまま日が暮れる

非理法権 天があるのを知らぬ馬鹿

億単位の金でグルマの目が入る

民謡はハアアで始まる三味太鼓

奈良市 宮口 笛生

除夜の鐘 孫も元気に起きている

高齢化まだまだ古希の青二才

豊作で大きく飾る鏡餅

妻とのむだけの正月はずまない

病院へ皆勤してるお年寄り

奈良市 天正千梢

波うちし稲田見ました風の筋  
母という海にむかいて深呼吸  
飢えていたんだなあ湧き水眺めつつ  
もがり笛 啄木の像に聞こゆるや  
何も彼も御破算にして銀世界

奈良県 田中紀美代

晴れやかに人間である日を重ね  
自己主張終えてもみじの冬ごもり  
手がみと老眼鏡は別に置く  
輝いているといいことついてくる  
いのししに似た人がいた出初式

和歌山市 牛尾緑良

落日よ影よ明日へ残すもの  
人間にもどると酒は苦いもの  
そのうちにきつと私に出会う旅  
ゆっくりと父を離れる逞しさ  
鍋はまだ母の手にあり母の手に

和歌山市 堀端三男

小銭入れが重たくなって来る師走  
その一言で今夜の酒が不味くなる  
淋しかる仲良くしよう冬の蠅  
いらっしやいませ値踏みしてる招き猫  
よく知ってくれてるシュガー二本くれ

和歌山市 福本英子

無縁墓ばかり目につく暮れの寺  
日晒しのベンツ二台僕の街  
鈴つけて鼠怖がるうちの猫  
来年も忘れな草を咲かせよう  
楽天家リストラ候補の中にいる

和歌山市 木本朱夏

ひとり芝居の手紙に雪が降っている  
きしきしと髪きしませて満ち足りず  
いらくさで編んだ冠ならあげる  
気の弱い鬼で帽子が放せない  
マスカレードやがてわたしの顔がない

和歌山市 田中輝子

花の咲く谷底もあり人を恋う  
流れ作業のように握手をした疲れ  
螺旋階段 心変わりがおりてくる  
未来みたくてどしゃぶりの中突っ走る  
繊細な冬だとおもう美辞麗句

和歌山市 垂井千寿子

赤い羽根 師走の街の温い色  
邦楽の聞こえる方が隠居部屋  
あの日あの時 同じ響きの除夜の鐘  
直感の鋭い妻に操られ  
靴音の軽さ重さで春迎え

倉敷市 小野 克枝

ひとり生きるひとりの楽器かき鳴らし  
婆ちゃんが好きと言わせるおまじない

丁寧な手紙の誤字が気にかかる  
抜けぬ棘 女 仏陀へ手を伸ばす

手おくれの孝行 墓へ垂らす酒

笠岡市 松本 忠三

嘗められていますこれも戸主の座に

小銭入れ結構わたしの役にたち

政局がぐらつき与党野党の目

七七歳誰も祝ってくれませんか

さようなら何か忘れたことがある

岡山県 二宗 吟平

ソプラノは母の声かも虎落笛

二三年先も食べとく吊し柿

あごのスト口開けたまま昼寝ぐせ

満開の菊が帰りを迎えとる

有り難さ釣りはいいよとはした銭

岡山県 江口 有一朗

世辞一つ言わぬ鏡を拭いている

曇らない鏡に裏の温かさ

私の悲しみ知ってるような風

出ておいでなどとうっかり言えぬ齡

忘るべし忘るべからずという初心

岡山県 小林 妻子

夜が白む時計のように飯が炊け  
孝行の嘘でも聞いてみたくなる

指切りの小指の罪もあるだろう  
合掌のところどころに欲はさむ

泣き止んでからの女を持て余し

竹原市 森井 菁居

親子ならホットラインを信じよう

積もり積もった話小出しに掘りごたつ

五十路とは佗しかすかな後遺症

孫を抱くポーズ確かな春の景

ライバルが来て休職へ火をつける

竹原市 時 広一路

冬の陽と話してみても矢張り冬

瀬戸の海とても静かでお喋りで

頑張っているにはいるが痩せた足

終着の駅はだあれも知らぬ町

意見みな聞いたら今日の間に合わぬ

竹原市 古谷 節夫

迎春へフアイトを燃やす五十路坂

亡父の血を素直に継いだ義理人情

四季の風まともに受けて匂の味

水不足日輪さまのせいにする

リフォームを覚えた妻のミシン掛け

天狗には自負になやみがついて来る  
竹原市 岡本清水

農家とて先手取らねば滅びる世  
生産もハウス水耕背くらべ

どん底も深さが違う今昔  
鬼の棲む山もよかろう故郷なら

集落があるのか轍残る道  
広島県 田村新造

猫柳の陰でひそんで待つ日暮れ  
北満たそがれ赤い夕陽はまだ落ちぬ

戦友捨てて泣いたお山の星月夜  
孫呉北安逃亡の旅果てしなく

冬木立春を待つてる自然体  
下関市 石川侃流洞

春の音じつと聞いてたこぼれ種  
あれから五十年 風化はしないきのこ雲

傷心へ触れると止まる風車  
平成の猫わがままで骨嫌い

フルムーン汽車と飛行機折り合わず  
鳥取市 西村黙光

痴話喧嘩 記憶装置のひどい錆  
酔っ払い時計が逆に回り出す

介護から帰った妻の高軒  
窓際で錆びてしまったゴマ擦り器

風に逢うたび女になってゆく  
鳥取市 小谷美ツ千

生きざまを隠す大きな壺さがす  
吊り橋を渡ってからが怖くなる

抱擁のベンチに花を敷きつめる  
菜の花なのはな もうあの頃に戻れない

うしろから人の噂が駆け抜けた  
米子市 林荒介

ぎんなんに雌雄があつて立ち通す  
ゆつくりと話が出来ぬ鸚哥たち

おんなには貸しは作らぬようにする  
大きな丸を描いて父を置く

いつかいつかとおんなが狙う網の外  
米子市 林瑞枝

抽象画ルーツ探しの絵となつた  
世を拗ねた子の背にやさしコウノトリ

口を閉じると怖い面だから笑う  
近寄れば薔薇もおんなもごく普通

簡単なことでない胎動がする  
米子市 白根ふみ

月なりに輝く夜道へのつとめ  
垣のむこうもさざ波ぐらいたつたろう

薄あかり土偶ならんでつち一揆  
老母の椅子 観音さまになつていく

米子市 野坂 なみ

やぶれ傘 精一杯の陰つくる

その鈴は今もこころの中で鳴る

父の灯台見つめつづけて漕ぎ抜ける

登らぬと山はなおさら攻めてくる

結び目を切るか解くかで揉めている

米子市 中井 ゆき

蜃気楼見たくて山をまた越える

地吹雪が思慕容赦なくつのらせる

ピエロにもなつて余生の青い空

一人居は内緒がなくてつまらない

土偶今も涙こぼした跡がある

米子市 光井 玲子

水入らず小宴ながら満ち足りる

真夜中に狂う鼓動にも申す

音の出ぬ太鼓でひそと老いてゆく

古い衣が脱げずに右往左往する

ふりつもるもの溢れる傷だらけの椅子

倉吉市 野中 御前

目の底に「一枚の絵」が住みついた

簡単に手の鳴る方へ行つたきり

巢立つ雛かぜの動きを見逃さず

沢山の愚痴 神棚が重くなる

結末はどうあれ花の種をまく

米子市 青戸 田鶴

薄れゆく景色をたぐりよせている

まろやかな心で春を迎えよう

私ではないようにして外に出る

戦後を走りぬけたバッグをまだ残す

うすい暦へあかるい彩をかき足そう

鳥取県 江原 とみお

望郷の真としても雪はふる

身の程をよく知っている竹とんぼ

気づいたらお払い箱のなかにいた

露はらいばかり演じてきたようだ

娘攫いかも知れぬ風かも知れぬ

鳥取県 西川 和子

嫉妬から簡単に出ぬ誉め言葉

ご先祖の杉で簡単には切れぬ

残酷な劇でチャネル切り替える

記念日のリングの色があせて来る

肩寄せて明るい色の絵と生きる

鳥取県 松下 たつみ

霧はれて味方の顔が見えてくる

悟ったか風の便りを気にしない

きつと消える噂だ我慢しておこう

冬の月ぐちをこぼすに冷たすぎ

ジャンケンで決める程度の役もらう

鳥取県 羽津川 公乃

狂わない母の手順で朝が来る  
分身のような短所をいとおしむ  
ハードルの高さに鼻も伸びてくる  
本当の美談は紙面飾らない  
わたしにも翼下さい車椅子

鳥取県 乾 隆 風

消化不良の去年反芻しています  
身代が傾くまんま塾にやる  
隠れ家のように嫁はん鍵を締め  
湯舟から瘦せた翼を撫でてみる  
なまぐさい私も焼けば白骨に

鳥取県 土 橋 螢

生涯にこの正月は二度とない  
百罪を消す元旦の陽が昇る  
風花にときめく恋と知っている  
この沖に鮫も鯛も棲んでいる  
失礼よ 私だって女ですよ

鳥取県 土 橋 はるお

利息では食えない貯金しています  
知らぬが仏 外米のご飯です  
ガタのきた翼にサロンパスを貼る  
会費払った割に料理が出なかった  
踏み切り番の小屋に一升ビンがある

鳥取県 新家 完司

そのあとの茶粥につられ坐禅堂  
体には良くない冬の結跏趺坐  
枯れ木かと思う枯れ野を歩く人  
恩返しするべき金を飲んでいる  
お仕置のカラス吊るしてカラス除け

鳥取県 鈴 木 公 弘

自分史に美談のかけらさえない  
逃げ足は次郎吉さんに教わった  
とむらって絆が少しずつ緩む  
歳末のけじめを急かす鐘が鳴る  
来る年もおそらく妻の後を行く

鳥取県 谷 口 次 男

軸足が揺れているのが総理だろ  
国民を天秤棒に乗せている  
マイペース畳の上のだんご虫  
リストラとダイエットとを考える  
胃袋に本音をためて帰宅する

鳥取県 西 浦 小 鹿

風を友達にして前をみている  
一途に占う蝶にはなれません  
樹の上で一番星が輝いた  
輝きを忘れぬ古きオルゴール  
県立の博物館に雪が降る

鳥取県 田村 きみ子  
お茶飲んでゆっくり寝る語を探す  
雪を掘りながら花言葉を捜す

昼さがり窓に布団を干すおとこ  
口下手な妻が電話のそばにいる  
農をしてみれば優しい息子なり

鳥取県 土橋 睦子

美男子と好青年の選びかた  
外面のいい嫁さんに気をつかう  
回転の速い店からお茶を買う  
七回忌 母の箆筒を空にする  
もめごとを知らぬ椿が赤く咲く

松江市 柳 樂鶴丸

ジャンケンポン夫婦恋愛しています  
余りにもととのい過ぎて絵にならぬ  
八十になっても男は男です  
頑固一徹 味噌汁でパンを食う  
クシャミ三つどうも風邪ではないらしい

出雲市 吉岡 きみえ

初春ふたりほんわかぬくい湯呑み抱く  
七坂を越すに子の杖孫の杖  
わだかまりとけたお酒だ飲みほそう  
悔い少し残して花は散ってゆく  
灰色の空だ明るい唄歌う

出雲市 竹 治 ちかし  
妻のみる夢には女の彩があり  
僕の手は妻の運命線もあり  
実がみんな木守りとなる過疎の秋

ボチボチの言葉で通い合う夫婦  
どっぷりと浸ると見えぬ右左

出雲市 岸 桂子

笑い袋に涙も少しずつたまる  
母見舞う季節はすでに冬になる  
悔しさをバネにと思う皿洗う  
自問自答 明日に生きる薬呑む  
置き去りの過疎に訃報がまだとどく

出雲市 小玉 満江

ややこしい話の好きな女達  
子別れに猫は三日を泣きつづけ  
無造作に赤ちゃんを抱く三人目  
マメだった人がぼっくり居なくなる  
合掌の村はちらちら雪景色

島根県 西村 早苗

春に酌む酒に開いたままの本  
お茶立てて利休のような気にひたり  
温泉に来てまでナミアムダブとなえ  
あなたと唄うと音痴のまま調和  
雪コンコンたいくつさせずよう喋る

島根県 堀江芳子  
さらけ出す暮らしのうたは我が生命  
怠け者にさせてくれない割烹着

うれしいな戦盲屈託なく笑う  
効きそうにないけどチラシ読んでみる

同じ愚痴真顔で聞いている根気

島根県 小砂白汀

子に捧げ夫送られしいぶし銀(祝森山英子さん米寿)  
夕空へルビーのらんぶ裸柿

爪を研ぐ音が聞こえる星月夜  
冬の雨 紙人形に脅される

雪紛々あの日揚げ羽の舞うた園

島根県 石飛水煙

師走とは風まで後から追いかける

国会も師走は鉾をおさめます  
賀状書き一筆添えたい人ばかり

一語一語 亡父の日記に学ぶこと  
手応えはどうか笑って握手する

香川県 池内かおり

山ひとつ越えると風も風いでくる

取っときの顔で迎える里帰り  
天国に一番近い山が好き

潔く降りねばならぬ山があり  
文句言う言わぬで今日も暮れたそな

松山市 宮尾みのり

御しがたい女だ詩集抱いている  
鬼が棲む蛇が棲むほどに横恋慕  
感受性少々にぶく生き上手

はからずも いいえ謀って取った椅子  
子供好きの人へ赤ちゃんいい笑顔

今治市 越智一水

鎌を研ぐその秋空へ鎌を研ぐ  
幸せな日はばあちゃんと妻を呼び

縁先で話す話に嘘がない  
円ひとつ書くに心が定まらず

奥山は雪か知らない鳥が来る

西条市 片上明水

豊作が近所も家も落ち着かせ  
速達で届く歯切れのよい返事

ほろ酔いで鬼も仏も寝てしま  
それとなく孫にいじめのことを聞く  
人間のエゴへ地球は円のまま

唐津市 仁部四郎

産土は少年兵を憶えてる

スピードの時代に辞書を積み残し  
ほめ言葉知らぬ上司でうとまれる

羅漢にはなれるそうです写経する  
勝率は五割 親からもらった名

断水が解けて心の籠もとけ

唐津市 田口虹汀

説教も芯から聴ける歳になり

鮮やかな紅を買い足す古希の春  
筒井筒ああ漆黒の髪いずこ

富山市 舟渡杏花

石に彫る詩は閻魔の序でかく

一部始終知ってる葱を刻む音

傘寿過ぎると牙に丸味が見えてくる  
顔色を見たり歩幅を合わせた

十二月かそけし暗い友といて  
まあるいポスト愛された日と巡り合う

唐津市 久保正剣

保証書にきみの名を書く贈り物

脱皮して風を抱いたる蛇の衣

弘前市 佐治千加子

酒癖の女と区切りをつける酒

人形にならない素足土を踏む

代読も順番がある胸のバラ  
シュレッダー森を蝕む紙の嵩

冬を越す蝶いる雪の華の森  
素手熱く握りしめたる雪つぶて

ドミノの音が背中に迫る年の暮れ

ちぎり絵の雪降る街をゆく男

唐津市 山口高明

ゲイさんも居るよ先進国に成る

臆病であと一ミリが届かない

弘前市 高瀬霜石

戦争はゲームなんです十二歳

気づいたら大人になっていた我が子

あらためて見る残骸の恐ろしさ  
手ぶらではゆけぬお方に誘われる

青春の門で受けとる罪と罰  
縄のれん男も井戸端会議する

寝そびれて夜半の風聴く足の冷え

縄のれん男も井戸端会議する

名古屋 越村枯梢

弘前市 岡本花匠

注射針 僕にも赤い血があった

北風へいつか身につく古甲羅

七転び靴はいつしか脱げていた

声もなく友の瞬く冬銀河

呆けふたり罵り合って陽が沈む

無明長夜 煩惱ぬけぬ自我の数珠

殿を行くのはわたしチビた靴

立春の声は南に北は雪

老いの旅お猿の駕籠に追い越され

生きのびる煩惱揃え懐手

弘前市 蒔苗果林

春雨にはころぶもの幸いよ

衣替え楽しく雲の春めぐり

農家族ほのかな春の言うがまま

さわやかに春呼ぶ音の若い靴

路のとう野良においてと咲いてます

弘前市 中山雅城

屋台やに誇りを持った古のれん

屋台やで月と一緒に飲んでいる

屋台やの親父は何時も聞き上手

さつと来てさつと帰った屋台酒

屋台やの良さも上司に教えられ

黒石市 相馬一花

一枚は営業用の二枚舌

夫には内緒で作る花名刺

肥満した医師が肥満の害を説く

猛吹雪ママとポトルを独り占め

達観をすれば女房も怖くない

青森県 田中叶

時おなじお墓にゆきがふりつもる

進みまた止まるバスから見える街

手をたたくむかしのオモチャ猿のよに

時間までエツチな本を読んで待つ

釣り銭が沈む屋台の鍋の底

高槻市 川島諷云児

背信の鈴は乾いた音で鳴る

毒舌の奢りはいつか裁かれる

脇役の辞書に主役の文字は無い

結び目が弛みはじめた縄電車

西宮市 奥田みつ子

極楽に願書を出してみるとする

広目天の筆敬うている詩人

漆黒の闇にひとりの手を探す

遺されし絵皿 秋陽に淋しそ<sup>う</sup> (悼 高橋千万里さん)

和歌山市 西山幸

眼が澄んでくるまで空を見ていよう

鏡の中の顔もやっぱり笑わない

携帯電話から風が吹いてくる

無気力を転がしながら毛糸編む

海南市 三宅保州

遭難碑 地元の人が掃き清め

ライバルがあちこちにある小京都

商品を思い出せないコマーシャル

米子市 政岡日枝子

デザートは色とりどりの糖衣錠

売られゆく牛にもわかる故郷の紅葉

木挽き唄 根っこは承知いたしかね

根を張れば有象無象がひっかかる  
一級河川越せば隣国風の国

米子市 寺 沢 みど里

沖へ出て岸の起伏に気がついた

上げ潮に乗れない椅子がもどかしい

棧橋に繋ぎわすれて流される

終章はお寺の鐘とひびき合う

米子市 新 正 子

出船待つみんなやさしくなつて来る

一匹の蟻が流れるのを見てる

天狗さまはミニが好きだとおっしゃった

やわらかな握手に恥じぬ私の手

鳥取県 林 露 杖

立春は吾が誕生日起きて寝て

残菊に佇てば幽けし亡母の声

行雲去人 喪中ハガキの掌に重く

年金のくらしで思う地球規模

島根県 松 本 文 子

炎が燃えたり涙が出たりする手帳

ジェット機の通る真下に住んでいる

虹越えていく母さんの車椅子

捨て石で木枯しなんか怖くない

富田林市 池 森 子

方円に流れを囲む花結び

視野は冬わたしを虎落笛にして

ゆっくりと夫婦でのひらから助走

ある日から時計が止まるほど狂う

町田市 竹 内 紫 鏗

そのけそのけ自動車電話疾走中

十年日記 学生編が残せたら

十年日記 税が減ってく哀歎も

婆の店で爺が板チョコ買う万歩

堺市 柿 花 紀 美 女

親の夢 子の夢いつか交錯し

いつ見てもおさげの笑顔亡き妹

棚の隅 捨てる決心まだつかず

猪突猛進出来そうもない老いの春

八尾市 宮 西 弥 生

日めくりの最後のことはありがとう

花言葉どおりに男守らない

子育てのないわたくしの青春譜

踏切りを上手に横切る塾の子

八尾市 山 下 美 津 留

切符買う手も寒ざむと淀帰り

日めくりが淋しくなつて街は混み

寒いから手の鳴る方へ寄つて行く

二日酔い西日の頃に酔いが抜け

八尾市 宮 崎 シ マ 子

もろもろを許して紅白聞いている

うなずいてさてとなつたら誰も来ぬ

妻の方が沢山納める消費税

大根を下げてどうし立話

豊中市 吉田 あずき  
ポインセチア も少し楽に生きようよ

警鐘はまだまだ遠い万華鏡  
除夜の鐘 私を裁く長い刻  
紋切り型これで助かることもある

吹田市 栗谷 春子

人走る車も走る何もかも

朝の路 風景は今清く澄む  
肩の線さわやかに見る雨蛙  
冬の畳 神農さんの虎の影

吹田市 井上 照子

翔ぶことが夢と言いつつ五年経た  
庭に鳥 餌になる木の実ごめんよね  
歯車がくずれ戻れぬ古時計

あの燃えたワイングラスは伏せたまま

吹田市 瀬戸 まさよ

クレーターと思いつつ恋しい兎  
恋人が欲しいの古希も傘寿にも  
人の世も変われば愛も変わります  
ごった煮の駅裏欲しい寒い風

羽曳野市 吉川 寿美

器用には生きてゆけない柿の蒂  
裏切りの雨がしとしと胸底に  
千羽づるの中の一羽が余所見する  
かけがえない病夫との時間帯

岸和田市 岩佐 ダン吉  
志いくどか曲げて生きている

紙風船あれは幸せだった頃  
おっちゃんに通天閣の灯がぬくい  
知りませんでどうも知事さん済むらしい

高石市 浅野 房子

句読点ここから先は冬の章

スケジュールきっちり詰めて不幸  
梵鐘に急かされ歩む冬木立  
ノストラダムス怖い話はせぬように

大阪府 榎山 隆

喪が明ける女の冬がゆるみだす  
エルニーニョ冬山雪が積もらない  
生きてゆく今朝の目覚めを頂きぬ  
長男に嫁ぎお姑 姉のよう

西宮市 門谷 たず子

疑心暗鬼もつれた糸がほどけない  
小さい嘘と同罪になるバラの刺  
いつまでを生きる気 靈芝ほろ苦し  
自負捨てて浅瀬を渡る老いの章

宝塚市 吉田 笑女

粒よりのりんご供える亡き子の季  
それからの事にはふれず米をとぐ  
姉がまた亡母と同じ道歩く  
なつかしい人を見付けた朝の込み

和歌山市 桜井千秀

ひちはちきゆう鉢の山茶花咲き初める  
左ハンドル気付かず乗せてもらつてた  
許される許されないは人次第

ニューヒーロー苦勞は見せず自然体

和歌山市 福井桂香

眠られぬ夜の扉が重すぎて  
土捏ねてこねて歪な壺を灼く

サンルーム薔薇も私もくれないに  
大らかに起ちて迎えん初日の出

鳥取市 西原艶子

銀杏散る街で素敵な絵に出逢う  
絵の中にため息誘うものがあり

笑いじわでできる笑いが欲しくなる  
渴き切るころは転びやすくなる

倉敷市 田辺灸六

苦勞した親から貰う樂の種  
哀樂を酒にもらつている余生

親子三台車を持って車庫がない  
飲む酒の量に差がある主義主張

岡山県 岩道博友

友情の舟が師走の上下動  
目隠しの手の冷たさが意味を溜め

二人だけ判る時間の道を行く  
質問状送つた後で悔いている

廿日市市 林野甦光

夕桜と銘打つ酒は甘口で  
湯の宿でしばし見蕩れる雪月花  
閑人と言われ不器用さが目立ち

独酌に一人芝居がうまくなり

松江市 舟木与根一

回り椅子つきで鼻毛を抜かれてる  
ロボットが木偶の面倒みています  
小春日の老人ホーム喋り出す

新党でまだ纏まらぬ縄のれん

島根県 佐々木鳳笙

政治から相撲談義へ滾る鍋  
放浪の絵画きが残す天女の絵

鳴き砂が鳴き止みそうな海の荒れ  
こんな時 人は名残りの雨という

高知県 小澤幸泉

キリストの不思議探して聖書読む  
思考ゼロここが始めか終るのか

子ねずみのように生きてるビルの街  
結局は親子五人が黙り合い

大阪府 津守柳伸

達筆の亡父に届かぬペン習字  
荒城の月 少年とハーモニカ

ストレスを消す慢性的薬包紙  
合格へ五角の箸と鉛筆と

大阪市 松尾 柳右子

二人居へ若さ呼び出す柿の赤  
ジャンケンが弱くていつも縁の下  
賀状書きコタツ守りする冬の雨  
ほどほどに甘んじ出した五十路坂

大阪市 榎本 落児

カルテには私の過去が赤裸々に  
紙繕りがすつくと立つは父一人  
落語全集 落語の味がしませんね  
キープしたボトルに鬼が棲んでいる

大阪市 井上 白峰

蛍雪のあかりで点す心の灯  
謙遜の影に野心が見え隠れ  
多数決 理解はするが気に入らず  
例えばの話が胸に突き刺さる

大阪市 町田 達子

歴史繰れば石も往時の顔になり  
返り花 地球も温暖化の兆し  
紀伊国屋へひとり静かの本買いに  
半分は煩惱大事に鐘を聴く

大阪市 川端 一步

織田作に会って口縄坂くだる  
宛先の人を思うて年賀状  
初詣 乗せる側にも福よ來い  
新幹線並みに悪法通過する

大阪市 北 勝美

夢抱いて裸足の行司声の張り  
十二月八日忘れてふぐの鍋  
人権平等 弱者に届かぬ陽の光  
脛の傷かばい合ってる役どころ

大阪市 清水 利武

親切な声の向うに何かある  
疑っておこういい寄る男前  
一合で満足出来る年となり  
見ない振りして公職が通り過ぎ

大阪市 清水 絹子

天寿全うすれば仏に会えるかな  
仏花 四季は問わない白い菊  
中国の旅を夢みて南京町  
関空着うろうろとうどん店

大阪市 稲本 凡子

目がものを言うのでサングラスで隠す  
若者と一緒に遊ぶ缶コーヒー  
他人にはポロ亡母の形見のしんげん袋  
目覚し時計久しく掛けたことがない

大阪市 藤田 頂留子

何食わぬ顔も見やぶる妻のかん  
一通の封書で喜劇ザーエンド  
防寒と防弾チョッキいる時代  
粗大ゴミ増やす家電のニューモード

大吉のみくじに惚れる初詣

堺市 楊井 二南

白内障ぐらいと個室恵まれず(白内障手術)

正眼の構えで受けて立つ手術

入院を大袈裟にする道具立て

堺市 黒田 真砂

いざゆかんセルへ財布の紐ゆるめ

六十路にもならず急いで逝き給う(いとこ死去)

複雑な糸がからんだ遺産分け

遠い日の想い出に咲く曼珠沙華

堺市 一瀬 福一

寂しさを隠し笑いの芝居する

ああまでもしてという人金がない

しらふでも言えませす素晴らしい妻と

ステツプもジャンプも残し五十年

堺市 中野 樺子

幸という花のステツチ埋めてゆく

お遊戯会 園児の瞳に星をみる

加速する老いに勝てぬが負けられぬ

潤いと彩 左右に持って老け上手

堺市 近藤 豊子

就職をして納まって無口なり

渴水へ鴨も途方に暮れている

白鳥が滑るように見える距離

台風一過みささぎの松よみがえる

山影の村凍てつきて冬母

豊中市 小林 一夫

雪沓のひとつ吊され山の寺

受話器おく五指そのままに冬の風

活字小さき悲恋小説 冬霞

豊中市 辻川 慶子

新年に祈る言葉が多くなる

コーヒーの香り二階を降りてくる

励ましの言葉にならず手を握る

叱られて祖母に抱かれて寝てしまふ

豊中市 江口 明光

安く買う欲が自慢の市場籠

カンフル剤ほしくて窓を少し開け

他人には見せない母の舞台裏

おてんばと言われた頃が懐かしい

豊中市 井上 直次

輪の外の人の動きが面白い

助手席でそうかそうかとさからわす

敵前で六法全書繰ってみせ

お小言を甘く包んで母の文

豊中市 滝北 博史

細い肩妻が作った雪だるま

大欲と無欲の姉妹仲が良い

五つ教え三つ励まし二つ賞め

人間の服着せられた猿あわれ

豊中市 三宅 つえ子

文脈を辿れば金が欲しいと言う

諦めてなお左手で辞書を繰る

車椅子と言う電車に乗っています

太陽の寒いかがやき年暮れる

池田市 岡本 吉太郎

バブル消えすつかり変った銀行さん

欲捨てたはずの老後も宝くじ

卒業のめどはたつたがフリーター

山門をくぐれば悟つたような気が

岸和田市 芳地 狸村

「ひかり」より座席が広い自強号（花蓮から台北への列車 2句）

美しい服務小姐の赤スツ

人形と間違いました儀杖兵（中正記念堂）

学問の神に祈りの手を合わせ（孔子廟）

岸和田市 福浦 勝晴

ステージに上がると老優しやんと立ち

幕あくど明治の街にちんどん屋

ライバルの闘志へ静かに身構える

尻馬に乗ってぬれぎぬ着せられる

岸和田市 原 さよ子

積み立てに大きな夢を預けてる

身勝手な願へはずむお賽銭

デパートの地下で暖簾の味を買う

老いるとはこんな段差に足とられ

岸和田市 島崎 富志子

又一つ老いを重ねて祝う屠蘇

夫よりも少し長生きたのまれる

孫の靴 聞きわかる耳まだ達者

絵心があればと思う山の彩

岸和田市 寺田 甚一

豊作も不作も困る米のでき

脛かじる子や孫がいて古希迎え

古希なんてひよこと明治かくしやくと

外国で著名 日本で疎外され

岸和田市 三輪 通彦

二人三脚 妻と歩幅の合う余生

経験者だけに説得力がある

凜として裸木冬に立ち向う

木枯しに恋しくなった鍋料理

岸和田市 田中文 時

ローソンのおにぎりにする妻の風邪

味噌汁が濃ゆく感ずる老いたかな

濡れ落葉から病葉になる定め

振りかかる火の粉 隣に払い除け

東大阪市 森下 愛論

宴席の主役を送り飲み直す

肩書も野心も捨てた酒うまい

閑空でコオロギが鳴く立ち止まり

木枯しの死角でみの虫揺れている

東大阪市 崎山美子

破る気はないが約束忘れてた

老いた目に若さまぶしいなつかしい

ある日ふと忘れな草が気にかかる

痴呆かもある日の老母の目がかなし

東大阪市 安永暁子

息びったり恵比寿顔して呑むはなし

食べられぬ節分豆に鬼笑う

赤青黒どれにしようか鬼の面

あの手この手 息を潜めた水面下

東大阪市 指宿千枝子

何のことやら分からずに叱られる

収納した場所が分からず探してる

人恋し町に出かける日曜日

若づくりしてるのに席譲られる

寝屋川市 柴田英壬子

落ち着けば胃が軽くなる冬ごもり

鱈ちりの味なつかしい冬ごもり

葉ぼたんも務め果たしたかのように

早春へすこしきりつと眉を描く

寝屋川市 平松かすみ

火傷してしばらく指切り出来ません

親指が働きすぎている軍手

目を瞑っていても描ける生家の絵

同じ顔みせたことない雲が好き

寝屋川市 堀江光子

戦争の影にいくわす曲がり角

運河沿いことさら秋の沁みる道

逆らわず風を楽しむ赤とんぼ

受賞後の政治批評が見当らず

寝屋川市 岸野あやめ

回れ右などと猪 思わない

七十になつたと胸を張って言う

ケーキなど要らぬ七十の誕生日

漢方でも飲んでみよかと気の迷い

枚方市 海老池洋

聞き上手なぐさめ上手 海は母

ばたばたと生きじりじりと死に追われ

環境を壊し餌づけの鶴の数

イレギュラーバウンドだったと明と暗

八尾市 片上英一

平成のコメ騒動も過去となり

ウラオモテわかりかけたか六十歳

ソーランの挽歌かすかに北の海

ボタ山よ青春の門どのあたり

八尾市 吉村一風

おでんやの湯気に曇った眼鏡ふく

宿坊のほっと息つく栗ご飯

報われぬそれでも心美しく

鍋の日の子らは大きな声になり

羽曳野市 榎本吐来

そのうちを六十路の胸に潜ませて  
負けてやる秘策を練っている炬燵  
三枚目になり切れた夜のコップ酒  
是々非々に是々非々なりのツケがくる

羽曳野市 田中透太

十二月どこを切っても忙しい  
絵の具から淋しい色を抜く余生  
妻の留守やっぱり酒が欲しくなる  
いつまでもおんなでいたい色を選ぶ

羽曳野市 森松まつお

発車してすぐにビールの旅が好き  
恋してる瞳で焼いているクッキ―  
恋すすみ女は涙もろくなり  
明日ゴルフばっちり目覚めた午前二時

藤井寺市 中島志洋

お詫びより言い訳ばかり先に立ち  
いろいろと有って未だに恐妻家  
福娘やっつて三年まだ一人  
美しく描けば似顔画喜ばれ

藤井寺市 福元みのる

肩叩きまでに次の手打っておく  
風向きが悪いと孫もそっぽ向く  
高層ビルの影、路を越え川を越え  
与野党の違い見付けるのに迷う

守口市 結城君子

しぐれこぬうちに みかえり仏だけは  
みかえり如来さだかに見えぬありがたさ  
つきそいの夫が先に音をあげた  
師走でもドラマは見ます小走りに

河内長野市 井上喜醉

峠越え下りも知って置く人生  
本堂を立派に見せる寺の苔  
すき焼の子感びつたり晩ご飯  
飲み込んだ言葉が嫌な喉仏

富田林市 松本今日子

警察が変りないかと聞いていく  
割り勘で小言聞いてる膝小僧  
このまんま座っていたいお堂あり  
病人と間違えられた見舞客

茨木市 堀良江

もう少し派手にしたらと娘の見立て  
大銀杏目ざすお寺はもうそこに  
タオル一本持つて乗らんか北陸路  
情けないことです名前浮かばない

吹田市 茂見よ志子

桜の葉散り急ぐなと掃く日課  
何時が旬 聞かれて詰まるハウス物  
ボレロ鳴る茶房しみじみ恋の昔  
つわぶきの花に慰む冬の庭

和泉市 西岡 洛 醉

改札の表は四面楚歌の街  
肩書を消した無職で冬を越し  
亡き母に言い残した事ひとつ有る  
世渡りが下手で寒さが背を抜ける

和泉市 岡井 やすお

仮想敵と握手を交わす腹の内  
次々と補償要求種尽きず  
節分は甘納豆で尉と姥  
初午の幟忘れた頃に立ち

貝塚市 行 天 千 代

置きごたつ小さい孫が膝に乗る  
次つぎと知ってる人が呆けて来る  
雪のない和泉良いとこ春を待つ  
もうそこへ春が来るのに友が逝く

大阪府 八十田 洞 庵

判決に希望を持たず助言入れ  
枯れたふり土に眠って春を待つ  
合掌にほほえみくれるみろく仏  
家計簿に泣きつかれてる預金帳

交野市 福 崎 しげお

老人会 昭和一桁 ニューフェイス  
忘年会自分の年を忘れたい  
溜飲を下げた啖呵は勇み足  
還らない島へカモメが往き来する

神戸市 山口 美穂

わたしが笑えば老母も笑うて日曜日  
勧められた赤を素直に買うわたし  
その他大勢わたしも大事な役どころ  
みんなわたしの時間よ定年後のプラン

神戸市 木 村 貴代子

秋晴れに洗いたきもの世に満つる  
ハーブの音ゆっくり私洗われる  
愛うすき少年悪魔に棲みつかれ  
定年後少年の日の夢を追う

西宮市 山 本 義 子

父母逝きてふるさとの海遠くなる  
五十年目「いろはには」える級会  
ひとり食 便利なものが出来てくる  
他人さまは一人ぐらしを値ぶみする

西宮市 菊 池 トミエ

大根だき無事息災は食べながら  
絵馬一枚あわれなほどの母心  
乗越した駅はこんなに寒いのか  
裏方に徹し悔いなき感謝状

西宮市 秋 元 て る

桐の実が花札のよう友はいま  
足を洗う歩き通して来た足を  
お隣の年寄り賞める嫁と居る  
切り抜きをまだ続けてる七十五

芦屋市 黒田能子

壁一つ立てて私の城になる

舞い終る日まで女の白い足袋

息つぎが下手で沈んでばかりいる

目の高さ同じにすると見えてくる

川西市 松本 ただし

じゃんけんでパーばかり出す楽天堂

またひとつ駐車場になる休耕田

臍の位置よけて曲がった手術跡

人間も自然も荒れる深い闇

宝塚市 丸山 よし津

大正生れに昭和も徐々に遠くなる

グループにひとりしんどい人が居る

賀状百枚書いて百枚やってくる

家完済そろそろ墓地のローン組む

姫路市 中塚 遊峰

初霜へ亡母が手編みのチャンチャンコ

一年がこんなに早い古希峠

嫁とらぬ息子の背に老母の独り言

病んでこそ人の痛みも見えてくる

姫路市 丁坪 サワ子

掛け違うボタンが揺らす子の命

いじめる子いじめられる子 親があり

一句出来一句忘れる呆け初め  
木枯しが吹くや心の闇の中

和歌山市 宮口 克子

気が重いなあ達筆できた返事

骨のある男と味のあるお酒

斟酌の余地ないけれど耳を貸す

歳月やふたりの恋も冬ごもり

和歌山市 玉井 豊太

北風に防寒帽と乳母車

年金の楽なくらしに他人の目

外出へ妻の構えにじらされる

ステージでたおやかに舞う足袋の白

和歌山市 青枝 鉄治

不況風吹いて訓示を寒く聞く

迷信と言うては居れぬ子の受験

自惚れと気が付くまでのロスタイム

金貯めた男の来ないクラス会

和歌山市 山田 高夫

一代で絶える庭樹に水をやる

名を捨てるほどの名もなく埋もれる

思考ゼロあたり一面白い闇

身を粉にする播鉢を支え合う

和歌山市 細川 稚代

うとうととした間に風呂の湯があふれ

ほんわかとさせてあつまり切る電話

絵空事ならべて愛をたしかめる  
めどついで少し派手めの紅を刷く

和歌山市 堀畑靖子

五十代に身を置き見えてきた景色

にっこりと別れられないのが女

欠点を刺激しないで埋めてやる

夫婦舟トラブルこともなく師走

和歌山市 山口 三千子

裏切らぬペットに心癒される

へそ曲がり反論すれば牙をむく

二人三脚解きに行きたいひとり旅

嫁と孫帰国関空へ出迎える

和歌山市 田中みね

これでいいこれでよかったある訣れ

親友の手術へひと日茶断ち

これくらい私も描ける抽象画

三人の御子息見えぬ通夜の席

和歌山市 玉置当代

覗かれた気配へそくり置き変える

ベイブリッジ愛を語らうかもめたち

今ごろになって好きだと言われても

白状する傷のうす皮剥ぐように

和歌山市 池永正雄

走馬灯も流石に長い五十年

ぐい呑みの一つ一つに友の顔

横顔もうしろ姿もやはり富士

ふる里を普通列車で噛みしめる

和歌山市 岩本美智子

信じてた友の裏切り氷柱鳴る

過去の罪みな埋めたくて穴を掘る

露天風呂湯気で見えない山は冬

冬將軍足ふみ公孫樹黄金色に

和歌山市 榎原公子

胃袋の中は世界の植民地

退くことを憶えて愛を膨らます

保存した愛盛り付けて冬の皿

わたくしの隙間を埋めているピアス

和歌山県 西口忠雄

とても豊かでもとも寂しい靴を履く

身ごもって女を捨てる膝がしら

あんただけ知ってよ私のかくし味

土俵ぎわちよつと傾けた勝ち名乗り

和歌山県 小倉アサ

氣くばりが生きて豊かな風となり

こころ根は寂しい青の自己主張

軸足をたまたに浮かせて風通す

一度では集めた事のない会費

京都市 都倉求芽

小さな空でもあがれば多分広いだろ

乗る抵抗 動く歩道の百メートル

鬼一匹まさかの時に飼っている

副作用抑える薬の副作用

京都市 松川芳子

一日の重みつくづく突然死  
丈詰めて詰めて卒寿のお針箱

母の愚痴 私の愚痴は伏せておく  
医者通い母の生き甲斐かも知れぬ

京都府 稲葉冬葉

走れたら石焼きいもを追いかけて  
三歳と仲良しになる金魚の餌

長生きを考えている養命酒  
蘭草の匂 仏を先に迎え入れ

奈良市 米田恭昌

反戦の人も参加の救世軍  
町工場 屋台で接待する社長

貧乏神が窓から覗く嫌な夢  
叱り役は妻なぐさめ役は僕

大和郡山市 坊農柳弘

リストラの席に義理チョコ大きすぎ  
還暦から幾歳過ぎし豆の数

かしこくは生きられなくてお人好し  
柔らかな筆の運びの京ことば

大和高田市 岸本豊平次

子孫には侵略国では遺すまい  
舟下り写真は皆 口を開け

急がない時には渋滞なく走り  
盛り場は終電なんか宵の口

奈良県 中原比呂志

塔のある町に住みつつ経読まず  
棒グラフ競走馬でもあるまいに

乗りつぎの立ち食いうどん駅の朝  
ただ歩くだけで楽しい戎橋

奈良県 長谷川春蘭

余白てふ齢もありて秋深む  
秋刀魚苦し老いの二人に夜も長し

親しきは郵便ポスト開けるととき  
おでん酒ちよっぴり疲れとりもどし

生駒市 北山悟郎

軍歴を盾に雄々しく義肢が生き  
人生の濃淡ひたすらつき進む

命捨てる時の男は名を捨てる  
散歩道 犬が主を従えて

岡山市 花田たけ志

あぶく銭危ない橋を渡らせる  
荒波の浮き世に負けぬ顔のしわ

物騒な世相に余生身構える  
宣言の域を出られぬ北の島

岡山市 井上柳五郎

無為徒食眠れぬ長い夜続く  
鶏鳴は孤児院あたり夜が明ける

わがことがままならぬ身で人案じ  
平均寿命越えた余生に迎う新春

岡山市 川端 柳子

しあわせをいまモグモグとかみしめる  
ロッキングチェアにポツンと本が置いてある  
手を振って出会い別れの旅日記  
初恋も思い出せずに無味無臭

倉敷市 井上 富子

普請場を粹なジョークが飛んでいる  
一人息子にピンクの虫が忍びよる

年頭に思考回路の大掃除

銘湯の湯波溢れるバスクリン

岡山市 池田 半仙

青空市柿百円の多いこと

秋の幸あけび あざどり 山葡萄

木枯しに錦の山の醜さよ

葉の落ちた梢蓑虫三つ四つ

岡山市 荻野 鮫虎狼

討入りが済めば赤穂に除夜の鐘

枅酒の角から零すのも楽し

癖のある字だ本日の写経済む

どの家も来る年らしい灯がともり

岡山市 矢内 寿恵子

きりとり線の上で迷っている師走

暮れの街ピエロの面がほしくなる

落葉舞うひとひらずつの自己主張

黙祷ではじまる昭和の生き残り

渴水の街で狼煙に似た焚火

水涸れて流れに乗れぬのは落ち葉

絶望と叫びに逢ったムンクの絵

人情の島へ落ち着く渡り鳥

広島市 森田 文

読まず気で日記に皮肉書いてあり

詩一途 山頭火の旅つづく

禁煙の場所ですツツつぶやいて

皇后の真似した帽子似合わない

呉市 横田 英詩

浪花節唸りゆっくり流れ雲

水不足威張って雨が降ってくる

お粥さんの次は薬が待っている

死ぬときは一緒と言えば妻笑う

美禰市 安平次 弘道

二番煎じが受けて落ち目だと思っ

判る日を信じて飲まず苦い水

逝く秋を惜しみ中世の詩にひたる

山頭火にあやかっています酒のこと

宇部市 平田 実男

良い年になりそう妻も娘も亥年

あかぎれた手だが亡母の手温かった

肩書きは仮面の一つかも知れぬ

棒グラフ トップは見ない振りをする

竹原市 岩本笑子  
勇氣だと思ふ一人寝のベッド  
この足を動け動けと母の手よ  
転んだら鬼も笑ってくれるだろ  
ふっと手を見る後悔せぬように

竹原市 石原淑子  
生かされて御縁大事にたまつばき  
よう当る店で買つても宝くじ  
寒気団 悲しいニュースを連れてくる  
口閉じて心眼開こう福寿草

広島県 藤解静風  
病状を問えば声なく友わらう  
単身赴任 錨の欲しい夜もあろう  
きれいごとばかりで仲良しにはなれず  
気負わずに続けるものがありゆたか

鳥取市 武田帆雀  
この人の側は明るい鈴の音  
よく法事しなざる人だまたかいな  
座敷牢からの電話を聴いてやる  
夜の帝王場末のママも肩を持ち

鳥取市 岩原喬水  
逆境にいどみ男の道をゆく  
千鳥足違った靴がわからない  
借金を払い借金して帰る  
薬より医者のお術が良く効いた

鳥取市 倉吉市 最上和枝  
空港に地獄行きとは書いてない  
ふっ切れてプカリ煙草の輪を浮かす  
ふるさとの森で大きな息をする  
虎の威を借りて我が顔見失う

鳥取市 美田旋風  
眞実は怖い挨拶まで変える  
歩き方変えた通院軽くなる  
銃悲劇こんな国際化は困る  
古代史の発掘 住まう土地が減る

鳥取市 野口節子  
猫に鈴つける役割ばかり来る  
終章の花は畳で咲かせたい  
親の涙に特效薬が入れてある  
少年の棲んだあなたが愛おしい

鳥取市 倉吉市 淡路ゆり子  
メニエール寝ることに専念をする  
野良帰りだまって野菜置いてある  
老人手帳ブルーの色が濃いすぎる  
時雨来てまた古傷を思い出す

倉吉市 米田 幸子

みんなまで聞かず答を出したがら  
お色気がたった一つの武器らしい  
年功序列の壁に今また支えられ  
出来心 あとは深みにのめり込む

米子市 石垣 花子

近頃は老母も色見る目が肥えた  
大胆な色も着こなし傘寿とや  
グループにタクト振りたのが二人  
毒づけばおさまる虫が腹にいる

米子市 木村 富美子

山の絵に亡父と亡母との木が茂る  
畳には命あずけて疑わず  
劇薬が時々ほしくなつて来る  
一隅でそつと輝く星でいる

米子市 田中 亜弥

老いてなお笑い上戸の仲間たち  
不協和音が片方の耳から響く  
結び直して五十年目の絆  
心の棘を丁寧にくぐ母がいる

米子市 澤田 千春

雲が動く 私をせかすかのように  
玉結びとけてまたもや振り出しに  
だんだんと余生の棚を低くする  
沖に出て潮の流れに気がついた

米子市 金山 夕子

本当の悪わきまえている悪女  
赤富士へ狙い定めて椅子しずか  
乾杯のグラスだんだん重くなる  
どうしても結びつかないその答

米子市 菅井 とも子

手作りの袋だんだん小さくなり  
僕の椅子 父が大事に使っている  
長い夢みのり肩の荷軽くなり  
漕ぐ事に必死 自分を忘れている

米子市 川上 より子

子が泣けば子がいらないより淋しいよ  
焚火みる想い老人と少年と  
沖は寒くて思い出の暖も要る  
寂然の庭 南天の実が暖かし

米子市 茂理 高代

こんな事よくも書いたと古手帳  
簡単に書けば嫉妬になるおそれ  
いい顔になるから花を愛している  
大切に詩が結んだ縁だから

鳥取県 ささき やえ

大小を問わずよろこぶ人が好き  
千円のズボンで楽な冬にする  
三つめの橋がなかなか渡れない  
半額をたのしみにして店を出る

おつと失礼こは禁煙列車です  
美しい翼 獵師に狙われる  
逃げ足は早いが仕事鈍くさい  
ライバルの短所に釘を刺して置く

鳥取県 幸家 單車

良い目覚めに傘を忘れたこと気づく  
あの道もこの道も導かれている  
炬燵にひとり笹鳴きを待っている  
私には畳が四帖半もある

鳥取県 乾 喜与志

八転びの男が仰ぐ昼の月  
末っ娘が嫁ぐ順位を狂わせる  
金も名もないが心のある仲間  
潔い生きざまだけを子に遺す

鳥取県 上田 俊路

嫌い抜いた血は痛いほど温かった  
写真には燃える心が見せられぬ  
次の頁にきつと輝く亡父がいる  
傾いてゴツンコして夫婦ごま

鳥取県 石谷 美恵子

初鏡 元気な顔をうつしてね  
孫曾孫 家系の繁るありがたさ  
海山の幸に春の香こぼれてる  
幸せだった今日一日の陽も沈む

鳥取県 津村 八重子

まああがれあがれと酒を出して見せ  
ルールない酒で気楽な飲み仲間  
こわい夢だったゆっくりにお茶を飲む  
一輪さしのバラを名優だと思つ

鳥取県 黒田 くに子

愛の巣を隣の猫に覗かれる  
B 29翼の恐怖忘れない  
巣造りの下手な女で不倫する  
罪一つ隠す化粧を厚くする

鳥取県 太田 幸枝

あの猛暑生き抜きました木の叫び  
三畳の城ではち巻き締め直す  
今日の絵に明日を重ねる仕舞風呂  
豆を選ぶ老母の背から冬が来る

鳥取県 石尾 かつ乃

神々の森あらたまに鎮まれり  
昔忘れた銀髪の夢つなぎ  
たとう紙へ春を迎えるひとり言  
風花が降る約束の駅に降る

出雲市 石倉 芙佐子

口裏を合わせる母娘同志です  
別姓のまま記念樹はよく繁る  
黙々と金のなる木に水をやる  
褪せていく愛庇い合う夫婦の絵

出雲市 園山 多賀子

ちびちびと飲んでどさっと酔いが出る  
出雲市 板垣 夢 醉

甘柿に渋みがついてきたおんな  
本線へ出る日待つてる雨の貨車  
ひざ枕欲しいと手枕ねだりだす

出雲市 板垣 草 丘

起きがけに折坂さんに聞く天気  
傘の柄が僕のどこかへひっかかり  
温泉の出る短大を急ピッチ  
猪に息をひそめて暮らす里

出雲市 久谷 まこと

風まかせなどと気ままに鈍行で  
思い出をたどれば茨道に出る  
万歩計老いの限度と覚らない  
子と親の視野が違った背の丈

出雲市 島 祥 庵

承知して騙されもする愛がある  
水洗の音すさまじく生きている  
あれこれと思う幸せかも知れず  
子守唄の背景にある枯すすき

出雲市 小白金 房 子

一人居へ月もまあるく丸く出る  
花から花 過去は語らず蝶と舞う  
妻病めば男わびしい皿の音  
北風へ築地どっしり待つ出番

鬼瓦どっしり私を睨んでる  
年寄りの母を尋ねてまず年始  
花時計いつも幸せきざみ待つ  
はきなれた靴がすたすた里へ向く  
出雲市 富田 蘭 水

秋の風ひとしお身に沁む喪いて  
純粹に生きて魔風のえじきとは  
合掌す神に捧げた愛だから  
走馬灯あの日の夢の懐かしさ  
島根県 藤原 鈴 江

生きろ生きろとやたらに瓜が伸びてくる  
海に出るまでには丸い石になる  
生きすぎて貯金も底をついてくる  
傘寿では死ねぬ米寿へ欲をだす  
香川県 木村 あきら

老骨に鞭を打ったら潰れ込む  
失言をチョットお酒のせいにする  
負け犬の文句も聞いてやるゆとり  
カアさんの命縮める山男  
香川県 工藤 吟 笑

礼装の黒が女を引き立てる  
今年から老いた二人で祝う春  
五線より外れた歌のマイク好き  
切干しの一切れごとにねじれてる  
香川県 成重 放任

香川県 川崎 ひかり

山びこのような夫婦でつつがなし  
見くびつてならぬぞ蟻の底力

そろそろと文句が出だす三年目  
ともかくも出された金だもらつとく

香川県 山地 マツエ

防虫剤きき過ぎ恋が遠ざかる  
雲行きをゆつくり見ているヤジロペー

自画像のしわ四五本を取つてみる  
手放せぬ田畑が老母を過疎に置く

香川県 新川 マサエ

赤い実が熟れて今年も生きのびる  
あの笑顔戻ると信じ刻を待ち

終着駅 峠を幾つ越えてゆく  
花いっぱい道ゆく人に笑顔まき

松山市 白石 春嶺

六法にない雑字の矢を浴びる  
三日月が刃物に見える帰る道

そばに居る妻に与える賞がない  
政治家の本音測定機が欲しい

今治市 矢野 佳雲

デートよと親の心配うわの空  
下がり眉みな善人と言いきれぬ

危ないと五十になった子を案じ  
いい出会い待つときめきの自動ドア

今治市 野村 京子

真ん中に女系家族は父を置く  
沸点がほしい夜道を逢いに行く

深い闇抜ける仏の手を借りる  
雪崩音聞いて冬から来た手紙

高知市 北川 竹萌

南州墓地それぞれにもつ歴史観  
一期一会 噴煙仰ぐ桜島

波静か長崎鼻に立って見る  
開聞岳 小春日を背に撮り合うて

高知県 赤川 菊野

作戦タイム少しベルトを緩めよう  
空想のひととき王女さまでいる

暮れの街 笑い袋を買いにゆく  
本年もお願ひします仏壇へ

北九州市 梅田 宣司

浄め塩撒いて己れの身を案じ  
酒やめた俺に言い訳などはない

まだ理想追つて俺を笑う俺  
勝算があつてためらう振りをする

福岡県 横地 正好

所持禁止 拳銃のドラマ見せられる  
突き当るほどに人居て金借れぬ

酸性雨 太陽浴の地を奪い  
庭園も作れて父が在りしなら

熊本市 永田俊子

恩讐を水に流して共に老い  
ノーと言える男に育ち出世せず

亀は亀なりに走っている一生  
句読点しつかり打って橋渡る

唐津市 浜本ちよ

旅帰り土産はいつも地酒だった

あなたが丹精の菊ご覧あれ

喋り過ぎ心は軽く見られてる

灯を消して戸締りをする独りだな

静岡市 安本晃授

亥年生れ今年主役の嫁がいる

正直が取り柄嘘にも世辞笑い

秒針が逆まわりする以後の酒

生き甲斐の出舟入り舟母の港

富士宮市 渥美弧秀

借景の富士と暮せる老い二人

子等巢立ち二人に戻る富士が庭

妻の留守がウン着て立つ台所

この空は遠い息子の地へ続く

静岡県 蘭田 蓑 沓

錦秋に似合う女が訪れる

北風が鳴いてる帰って嗽しよ

土芋に母の手形が残ってる

夜の道で男に出会うのが怖い

東京都 山口新子

草加せんべいに濃い目のココア片想い  
娘よ 朝刊下げてお帰りか

唇の生ぬるきかな秋の思慕  
無風へと身を置くふりも覚えたり

富山市 酒井輝

今朝も履くもう出直しのきかぬ靴

かけ声で腰の若さを呼び戻す

鈍行の旅路で拾ういい言葉

幸せを知る階段の昇り降り

羽咋市 三宅ろ亭

川柳づく妻のママさに負けられぬ

八十の朝の分担炭おこす

新聞のペダルの音にはね起きる

イチローのポーズを首相真似てみる

弘前市 小寺花峯

吊り皮を頼りにしない定期券

積み直す積み木が風に揺れすぎる

空港のロビーで煙草吸いすぎる

五時過ぎた時計は早くなるばかり

弘前市 村田善保

体外授精 医学は神と覇を競い

悪友と名乗る祝辞の温かさ

北国の雪は戦うほど積もり

ふるさとの艶が弾ける赤林檎

弘前市 一戸ツネ

火葬場から消えたわたしが雲とゆく

津軽路にドカ雪が降り肩が凝る

追い風がまるい背中を吹き抜ける

曼陀羅の海でわたしも過去となる

十和田市 阿部進

かたくなに味にこだわる三代目

子の継がぬ農に精出す老夫婦

定年の幕ゆっくりと降りてくる

なまけてる暇などはない貧乏性

十和田市 小笠原敏人

強い霜 白さが夜明けを助演する

いじめたりいじめられたり人育つ

三七回忌 亡父の面影 孫に見る

この雪は亡父の墓にも積もる雪

仙台市 川村映輝

日本大好き消費税とられても

自分のことで実印使ったことがない

おかげ様で卒業したが職がない

生きている証 テレビ眺めてる

砂川市 大橋政良

自由まで縛ってしまう背番号

蓋のない鍋で終ってほしくない

雑踏で影を踏んだり踏まれたり

百点の演技見ていてくたびれる

和歌山市 北山好笑

一線を引いて揺れてるあなたが好き

振り向けば不安が深くなるばかり

厳しさが足らぬと叱る冬の空

唐津市 筒井朴竜

風倒木活かす山里停留所

余暇活かし川柳人生句三味

無農薬菜っ葉青虫試食済み

札幌市 瀬尾六郎太

景気策ほったらかして新党策

太短 大根すだれあちこちに

無意識に深呼吸する富良野の森

岸和田市 藪野けい子

母の味に夫補足する煮豆

濡衣を態度でかわす熟女

のれんの味をおみやげに京の旅

八戸市 島田昭治

素晴らしい笑顔まさかの二枚舌

涸れるまで泣いた友あり貰い泣き

けっぱれと写真の亡父が叱咤する

大阪市 寺井東雲

貼薬何時もの位置に狂いなし

手伝うと言うて目的外にあり

引越に捨てる物まで運んでる

# 柳緑花紅

橘高薫風

路郎先生の語録に「いのちある句を創れ」というのがあり、川柳雑誌社の句会では終了時にこれを三唱するのが常であった。この語録には各人各様の解釈があつて、後世に残るよふな佳句秀句が「いのちある句」であると言つると、作者その人その時のいのちの燃焼を句にすることだといふ意見に大別される。

『川柳雑誌』昭和三十四年の二月号に「いのちある句へ挑む」とサブタイトルのついた座談会を持ったことがあり、その頃、不朽洞会員になつたばかりの西川晃氏と私は次のよふな発言をしている。

薫風子―私はこの間、京都のファン・ゴッホ展を見に行ったのですが、そこで、星の夜のカフェ」といふ作品を見て以来といふもの、ちよいちよい街の雑踏や満員電車の中でさへその画の中の鮮明な星空が脳裏に浮んでくるのです。七十年以前のフランスの空の色と私の感覚にある空の色と、国境を超越して訴えるものがある。ゴッホの描いた星が時空を

越えて心を打つ。それがいのちだと思ひます。晃―いのちとは何かと言つと、詩とは何かと

いうのと同じでなかなか言い表わせないので、永久に残る作品を創らうなどと言つのは意気込みとしては結構だが、そんな事は今から判ることではなく、我々は、その時のいのちを燃やして行けばよいのだと思ひます。時代が變つて後になつてその句の意味が通じなくなつたとしても、それはそれでいのちを持つたと言えます。いつの世にでも判つて貰おうとするよふな気持ちだと時代性を無視して先人のあとばかりを追う結果になりはしないか。私が言ひたいのは、世上に言ひふらされ

た句が必ずしも名句ではないと言ふ事です。まだ外にも多く発言しているのだが、大まかに言へば、これも不易と流行、客観と主観の作句の処し方に左右されることで、その後路郎先生の身辺にいて、その作句への態度に接した私は、「いのちある句」とは、晃氏の言つ「その時点でいのちを燃やした句」「おのれの真実を披瀝した句」以外の何ものでもないとの確信を持つに至る。とは言へ、路郎先生ほど概念的な句を残した作家も少ない。

## 作品鑑賞

にこりの溶ける温みよ亡母の膝

伊藤 寿美  
これは冷蔵庫で出来た煮凍りではない。あたたかいご飯の上のせたら溶けて染み入る感触、それが母の温もりと思へた。膝が良い。有頂天すっぱい味が分からない。

神夏磯典子

苦勞なくして得意の絶頂に立つと、人への気配りややさしさがなおざりになりがちだ。そこを、すっぱい味に通わたせたのが身の味で、辛酸に通じるのが面白い。

田中 薫

「寒念仏みり、みり、とあるくなり 古句」は氷や霜柱の客観的擬音だが、この句の氷の主観的描写の音声は激しく厳しい。下旬には大水柱ぐらゐ強い措辞でもいい。「平和は発泡スチロールの角から潰れてゆく」の句も、発泡スチロールの崩れ出したら止めどのないひ弱な性質を、脆く潰える平和になぞらえた批判的確だ。リズムは作者の息と句の内容に即して形を成すものだが、平坦に扱つと緊迫感を失し、その兼合い均衡がむずかしい。

手ががみと老眼鏡は別に置く

田中紀美代

女性の羞らしいは幾歳になつても、いや歳を取るほど可憐なのだろう。実感の句だから、何気ないスタイルながら深く頷ける。

# 自選集

本田 恵二朗

一に食欲二に昼寝 達者です  
老人会枯木に花を咲かせ合  
いせいそと空気が動く芽出度い日  
今日の汗 心豊かに湯に流す  
米寿駅で余生列車に乗り換える

黒川 紫香

一吹きで椿を落とす冬の風  
小銭入れ大事な鍵を一つ入れ  
ガラス越し冬を見ている温いコーヒー  
寒そうに影もわたしに従いてくる  
挨拶もライバル ヤアで済ましとく

工藤 甲吉

十二月八日 日本は馬鹿だった  
心配をさせて長湯は今あがり  
「大往生」八十歳も買ってくる  
片足は右派 片足は左派という  
純粹だから気にさわることも言い

遠山 可住

病床の妻に一から十を聞く  
八十五そうかと癌にこだわらず  
標的が一つ老妻小うるさい  
まさかまさかの中で死んだらおもしろかろ  
蛸壺に蛸納まって海が風ぐ

月原 宵明

ユーカリへ緋の僕が佇つ母校  
考える白鷺の川 冬の景  
辻一つ曲がり違えたある思案  
ネクタイを外して人間らしくなる  
ある人待つ瞳があつた檻の猿

小出 智子

仏壇を毎日開けてごあいさつ  
冬の夜をテレビが笑わせてくれる  
閑空が出来たそうだが用もなし  
二十年が来ますとうちのお嫁さん  
来年こそはと思わなくなった

正本水客

行きずりの人の会釈をわすれない  
頂点に立てば自分が見えてくる  
話半分にして首すじが寒い  
風通しが悪いと男立ち上がる  
救急車の通りすぎた音夜寒が深い

八木千代

子離れをすすめてくれる冬の暈  
宴は終わって冷えた暈を拭いている  
暈にはぶざまな私を晒す  
相談ごとの先を見据えている暈  
暈の話さく冬の陽のやわらかな

松川杜的

一合は一合の味 炊飯器  
窓を開ければ表も裏も屋根ばかり  
今日わ ポストが挨拶してくれる  
お見事の一語 口筆の順教尼  
夢の字に夢がある順教尼

小林由多香

おふくろの味正月も膳たのし  
へそくりも数えて年の瀬を締める  
ポーナスのないくらしにもやっとな慣れ  
年金をもらう日 孫が知っている  
負けいくさ誰もしゃべろうともしない

恒松町紅

夕明かり離婚話をつい洩らす  
槌音が響いて村に若い風  
神々が沖からやって来る出雲  
棚にボトル老いを忘れている音痴  
終章の結びに欲しいユーモア

児島与呂志

年齢の差なし不足の脳細胞  
朝鴉びつくりさすよな羽ばたきし  
春近い寒さに凍る根来坂  
冬地蔵 陽だまりにある立ち話  
北風に逆らうことのないあたたかさ

野田素身郎

あの友からこんな弱気な手紙来る  
余命と齒 残り少なくなつて冬  
齒を削る音に待合室おびえ  
草むす屍のはずが今日まで長らえる  
朝刊が来て牛乳が来て起きる

野村太茂津

なごやかに外の冷気が届かない  
友が病む夜半冷気にふと目覚め  
友が病む代わりに虚勢張る寒さ  
姿勢正しく過去を語って自問する  
落ち葉焚く里で安らぐ小半日

小西雄々

気前よくしすぎ近頃落馬する  
情けひとつ古傷ひとつ絵に描こう  
六道の辻で幻見失う  
点滴のスピードが落ち氣遣われ  
顔ふたつうしろと前へ使い分け

大矢十郎

国会で物申したい腹話術  
世の乱れ中二の悲話よ結末よ  
目に入れて痛くないのも中二なの  
高三の手がふてぶてしポチ袋  
癒えて来た病 耳から攻められる

藤井明朗

おごらずあせらず新年へ起つ八十路  
心経を唱え一日の仕事始め  
十代の迷いへ勇氣のないおとな  
春へ息づく花のプランを練っている  
いじめ事件 総点検のいる学校

久家代仕男

佗しさが胸の襖を吹き抜ける  
あれも夢 飛べぬ雀で老いぬるは  
気休めの言葉 継ぎ穂が見つからぬ  
政争に不惜身命求められ  
死刑温存やさしい政治もないもんだ

金井文秋

目に見える壁ならねずみでも破る  
束になつてかかれば力持つお札  
自慢話している時は腰が伸び  
小遣いもくれず息抜きしてこいよ  
一病が機嫌よい日とむずかる日

有働芳仙

稼ぎ主だから言うだけ言わしとき  
人生というキャンパスに足りぬ色  
馬鹿じゃない大人のずるさ覚え出し  
それとなく足速になる十二月  
快調な社運へ社長肥り出し

波多野五楽庵

爪に火が時々ともる俄雨  
雨傘の過去を詮索したくなる  
雑学を詰めると眠くなる男  
地獄絵と対峙している生きている  
義理を欠く事にも慣れて来たカルテ

辻白溪子

ついて来る影が一人だから怖い  
白い息洩れてマスクも冬になる  
子の部屋の灯が夜食待っている  
素颜でも綺麗で化粧しながらず  
欠点はないがしつこいところが嫌

奥谷弘朗

リーダーの遊び上手が合図する  
欲のない奴がスカタンつかまされ  
淋しさの分かる女と秋を酌む  
果せない夢の合図を待ち続け  
俺よりも先に死ぬなど酔っている

藤村 女

追憶のページは白いまま残り  
浅知恵の心貧しい日を恥じる  
山寺の鐘からふるさと暮れてゆく  
大和屋根 昔の風習うずくまる  
格式の本家に座る順があり

高杉 鬼遊

来年の手帳を保険屋にもらう  
銭湯の河童 冬至の柚子に酔い  
ふり向けば鬼うしろ姿は仏なり  
骨壺は信楽にするいや九谷  
長生きを迷惑そうにあつかわれ

西田 柳宏子

無から無へ行く東の間の娑婆の風  
いじめつ子待ってる地獄の一丁目  
紅一点意識 誰もが酔うて来ず  
本人はしっかりしてると言う八十路  
相談欄別れなはれとにべもない

河内天笑

遣伝子がお酒を飲みたがつている  
ビールスに負けないようにめしを食う  
スピード違反も信号無視もやってきた  
閻魔には舌を千枚抜かれそう  
一汁一菜に極楽の風が

橘 高薫風

古希の屠蘇 壺萬里酒羅生門  
双六に七十で知る転び方  
紅の爪 枯山水の枯れること  
椿咲く有為の奥山紅椿  
椿咲く浅き夢見ぬ白椿

### 第18回 鳥取県川柳大会

とき 3月26日(日) 午前9時開場

ところ 鹿野町国民宿舎「山紫苑」

兼題と選者 (各題2句・11時半締切)

「静か」	山本翠公	選選選
「ふところ」	恒弘衛山	選選選
「館」	長谷川博	選選選
「捨てる」	林荒介	選選選
「草」	黒川紫香	選選選
「河」	木本朱夏	選選選
「昼」	江原とみお	選選選
「脳」	両川洋々	選選選

会費 出席者2000円・投句者1000円

締切 3月10日(金)

投句先 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279  
中原颯人方 大会実行委員会

主催 鳥取県川柳作家協会

川柳太平記 (201)

川柳の群像

## 後藤 蝶五郎

東野 大八

黒石市浅瀬石東に、浅瀬石城と命運を共にしたと伝えられる常縁和尚の墓所跡がある。

この北西の浅瀬石川に面した共同墓地の一角に後藤家の墓がある。平成4年1月10日、後藤蝶五郎の三十三回忌にちなんで、新しく建てられたもので、句碑も新しくなった。目を閉じて灰色もよき色のうち

亡くなる前月の柳誌『ねぶた』に発表された代表作の一つに数えられる句である。

この句碑に並んで、故人になった長男柳悦の句碑もある。

柳誌『みちのく』吟社を主宰した小林不浪人の片腕として活躍した蝶五郎が、不浪人亡きあと、柳誌『ねぶた』を創刊するや、彼の声望と作風を慕う柳人達が五十人に達し、

「青森県にねぶたあり、ねぶたあるところ

に蝶五郎あり」

と言われ、柳名は全国の柳壇に高く評価された。内外の柳人が「重厚」「沈痛」などと骨格の太い、正攻法的な蝶五郎の句風をたたえた。大山竹二は、

「東京の川柳が持つ粹、通、あるいは軽妙さというものではありません。逆とも言える重さ、正しい生活の陰影を持った深さ……」とその本質を言いあてている。

蝶五郎のもう一つの句碑は、もみじの名所中野神社の境内にある。

親友の山田よし丸の句「一人に人 二人に人 三に和が足らず」を左に、「退いてみる世の面の面白さ」と肩を並べて彫られている。

以上は『ねぶた』平成4年9月号に載せら

れた佐藤古拙の『蝶五郎句碑』の要約である。本名後藤長五郎。明治32年4月19日、黒石町浅瀬石生れ。二歳の時、左足を患い、生涯、松葉杖を友とする。このためか、稼業は雨傘、提灯、木炭にねぶたの風などを営む。

川柳は黒石町立高小の教師である天内浪史から詩・短歌・俳句と共に薰陶をうけたことに始まる。最も身についたのが川柳で、大正5年、都々逸と川柳の黒石浮雲会に入会したのが縁で、川柳一筋に歩き、東奥日報柳壇などに投句。やがて『川柳みちのく』吟社の小林不浪人を識り、やがてこの吟社の会計、事務所を引き受け、不浪人の片腕として幹事長役に活躍する。

不浪人は明治43年ごろから「蝶三郎」の柳号で川柳に手をそめ、剣花坊主宰の『大正川柳』の常連として名を知られていたため、長五郎が本名の彼は、兄事する不浪人の初号をもじって「蝶五郎」を柳名としたらしい。

昭和8年、黒石町内に転居したが、この地方は青森港の町年寄で、前句付の大家落合九三子の流れをくむ古老が多く、いわば川柳の土壌にふさわしい土地柄でもあった。

それだけに青森県紙東奥日報も、川柳の育成に熱心で、それぞれ俳号をもつ社長、編集長の肩入れて、津軽地方初の柳壇をもち、年

ことに川柳大会を社主催で催すほどである。

不浪人がこの柳壇の選者となるや、新人の発掘、後進の指導に大重で、昭和の初めごろは、青森・黒石両市はじめ県下主要町村は軒並みに川柳ブロックが誕生するという百花繚乱ぶりであった。

この頃が不浪人、蝶五郎のコンビの絶頂期で、昭和4年の第一回海峽親善大会（青森）を皮切りに、三太郎・雀郎・水府・路郎・紋太がぞくぞく選者として津軽地方を訪れているが、どちらかと言えば、このコンビは、剣花坊・三太郎派の柳壇寺系であった。

「小林不浪人君は、現在の青森県を川柳王国の五指の一つに盛り上げたーいや、それより青森県下に川柳の灯をかかげた最初の人であった。（中略）彼のともした『みちのくの柳灯』を爾來、保持した山田よし丸・後藤蝶五郎たちも、彼あつての彼等であつた。（不浪人句集『みちのく』三太郎序文）

しかし、戦後の昭和21年2月、新生の名を付した『みちのく』吟社も、時の流れに抗することができず、民主主義、平等の革新の風が吹いた。『蝶五郎』と言えば、私も川柳をはじめた昭和3年から同23年まで、『みちのく』で同じ釜のメシを食った仲間でしたが、青森県柳界の『変革』により、昭和23年ついにタモ

トを分かち、わたしは不遇の不浪人と行をともしました」（工藤甲吉筆者宛書簡）。

この変革は、不浪人の東奥日報社会部長退職に端を発した、個人的不遇の重なりによることは、本稿(95)の「小林不浪人」の稿で詳述したので割愛する。

さて、蝶五郎は、昭和22年暮「みちのく吟社」の不浪人と袂をわかち、翌23年、山田よし丸・佐藤狂六・成田我州・金枝万作らの強い要請で、青森県川柳社の創立に踏み切り、この年2月に柳誌「ねぶた」を発刊してその代表者となった。

こうした新川柳発刊の背景には、戦前、「火の見台川柳社」「浅瀬石川柳社」を結成した頃からの同志の支持によるもので、昭和11年には、初の句集『壺』を出している。この頃から川上三太郎を師と仰ぎ、ひたすらその詩跡をたどり、昭和22年には第二句集『いずみ』を、昭和31年には『雪の声』を出版している。

この第三句集は、昭和27年、病中の作品集であったが、これを最後に昭和34年1月18日、脳溢血で死去した。享年59歳。出生地浅瀬石の故地は、有名な津軽じょんがら節の発祥地で知られている。前記の「灰色もよき」の句碑の作品は辞世句と言われる。

この蝶五郎の句碑によりそつ句碑は、

したたかに酔う愚かさも見せておく  
という長男で柳人だった柳悦（本名柳充）のもので、柳界でも珍しい親子句碑と言えらる。

「彼の死を惜しんで多くの弔句が寄せられた。川上三太郎は『雪の声 早や聞くすべもなし哀し』、佐藤狂六は『みちのくの雪に折れまじ柳の芽』と感慨を記した。前句は、雪に題した蝶五郎の句が多いこと、厳冬1月18日に急逝したことと重ね、後の句は父の衣鉢を継ぐと目された柳悦を励まし、夢をつないだ当時の柳人の心情をよくあらわしている。」  
（『蝶五郎句碑』佐藤古拙）

現在、『ねぶた』の青森川柳社では、年ごと設定されている「不浪人賞」「蝶五郎賞」を柳誌作品の顕彰にあてているが、筆者と常に風交のあった中林瞭象の名が今の『ねぶた』誌上に見当たらないことがこのほか、さびしい。

雪ふめば雪に声あり雪語る

蝶五郎

▼次号は「川村伊知呂」

川柳塔用箋（一冊二〇〇円）

送料 一冊二五〇円・二〜三冊三六〇円

※数量がまとまれば「ゆうパック」で

# 柳籠裏三篇研究（二十四〜二十五丁）

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博・岩田秀行

紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

320 しやうぶ刀にて諸卿をおどす也 玉章

青木『平家物語』からの句。平忠盛が初めて昇殿した時、公家達がそねんで闇討にしよ  
うと陰謀をめぐらしているとの噂を耳にする  
そこで、忠盛は鞘巻の太刀を殿中で抜いて無  
言の圧力を加えた。この行為は非難されたが  
調べると木刀に銀箔を押しした物であった。

句は、忠盛の銀箔の木太刀の故事を、子供  
の菖蒲刀に見立てたもの。

七久保『贊』

忠盛は竹光を差す元祖也

明元天2

岡田『同』

## 二十五丁

321 しからした物をげんのう割ルやつさ 狐声

佐藤『天竺・唐・日本と三国を股にかけて、  
ついに正体を現した九尾の狐。最後に源翁和  
尚の杖に木っ端微塵となる。「割る」とか「し  
からした」とかいう怪しげな言葉を取り合わ  
せたところが面白いのであろう。玉藻前説話  
の句である。

げんのふでわるとハ美女のおんづまり

七久保『贊』。「げんのう」と「割る」の縁語  
で仕立てただけの句。

源翁でつぶしにされる古野干 八九7

女能で和尚野干をぶつびしぎ 五三14

鈴木『贊』。謡曲では「殺生石」「現在殺生石」

「野干」などに作られている。

岡田『贊』

322 かし座敷違棚から坪を出し 伍遊

佐藤『貸座敷は、專業のものも、料理屋兼業  
のものもあり、「江戸買物独案内」で数えた  
だけでもかなりあった。書画会か発句の会か  
は知らぬが、会が終る時分には賭博がはじま  
るといのであろう。それは、こうした集ま  
りの常套らしく、見世の方では、坪や賽やめ  
くりなど違棚あたりに用意してあるのであ  
る。

神棚にかかるたのつてる屋かた船 二二3

八木『贊』

かし座敷法度よみく／坪をかし 明七桜4

七久保『贊』。「貸座敷は主として寺社門前地

などに出来たが、寛政以前はその数も稀で、

今は（寛政年間）十数倍にもその数がふえた

（梅翁隨筆）とある。

岩田『贊』。「違い棚」というようなところか

末一25

ら、下世話に「坪」の出でくる面白さもあるか。

違イ棚なんぞのせるとげびるなり 玉11

鈴木〓贊 八木氏例句適切。

岡田〓同。

323 馬よりは猿へのこがすぐれたり 如雀

佐藤〓馬は巨大なるもの戯称だが、ここでは源氏物語にてくる好色漢の右馬頭のことか。猿は猿丸太夫のことであろうか。その優劣を論じて、弓削道鏡の生れ替りという猿丸には及び難いというのか。とにかく、馬と猿の大小を論じたところが面白いのであろうが、実際に馬と猿のものに關した何かの俚諺でもあったのか、「馬より鞍」では迂遠であらう。

七久保〓大尾の句であるからバレ的表現をしているが、主題句の「馬」は天文三年甲午五月二十八日生れの織田信長で、「猿」は猿面といわれた秀吉を表現しているのである。

「山椒は小粒でもびりと辛い」の俚諺をふまへながら、「へのこ」の語で信長よりも秀吉の天下人として、また、武将として胆力の大きさを詠んでいるのである。

紀内〓やはりバレ句であらう。

名ハさるで馬のやうなへ勅使たち

一四二三四

大方礎稿贊。ただし、右馬頭まで出す必要はないであろう。「馬は巨根」という定説をふまえて、猿丸太夫の巨根を評した句。

青木〓猿は猿丸太夫（道鏡の化身）。よって主題句の猿は道鏡であらう。

鈴木〓馬へのこよりは猿（猿丸太夫は弓削道鏡の変名なりとの俗説が流布されていた）へのこの方が巨大ですぐれたりというのである。

七久保さんは考え過ぎです。本篇の大尾句は全部バレ句ばかり。紀内氏ご明解です。

岡田〓同。

324 高尾よりまだすさまじいつかみ取り 五葉

佐藤〓高尾の目方だけ金をつんで身請けしたという綱宗の散財よりも、秀吉が聚落第で高杯に小判を盛ってつかみ取りをさせた（一説には、文佐衛門にもこのことがあったという）方が、はるかにすさまじいというのであろうが、高尾が出てくるから、吉原関係句として、文佐衛門のつかみ取りの方が対象としてはよいであらう。紀文のつかみ取りの話は、節分の夜、小粒銀をつかみ取って豆のか

わりにばら撒いたということかも知れない。他につかみ取りの話があつたかどうか。

八木〓本句は「江戸花街風俗」で、阿達氏は三浦屋が濡れ手に粟の掴み取りだという事を詠んだ句だとして居られる。高尾の袖に鉄を入れて体重をこまかしたから益々罪が重い

と。例句として、  
高の身請に三浦屋は掴みとり 六五七

を出し、又高（鷹）をつかむの縁語仕立の句らしい。と言っておられる。

西原〓礎稿に贊。仙台高尾に莫大な金を出した仙台侯と、金をばらまいた紀文のことであらう。

青木〓礎稿の「高尾と紀文」が無難のように思われます。

鈴木〓同。

みかん同前よし原で金をまき 一九五七

岡田〓同。

### 地震御見舞い

このたびの兵庫県南部地震にあたり

神戸・阪神間各市在住の同人・誌友各位  
ならびに柳社関係者に對し、心から御見舞い申し上げます。  
川柳塔社

# 秀句鑑賞

## 同人吟 新家 完 司

1月号から

### 共通の哀しみがあり小鳥飼う

松本文子

いわゆる「川柳味」と「文学性」は、相容れ難く、反発し合う部分がある。  
文学性に傾斜し過ぎると、言葉ばかりが先行して実感に乏しい。「机上作品」になりがちであり、川柳味ばかりに凝り固まった井戸の中では、低俗に陥りやすい。

文学の「香り」と川柳の「味」が、ほど良くブレンドされた、香りが高くまろやかな味の句が一番なのであろうが、これがなかなか困難なことであり、諸先輩の苦闘の歴史も、このブレンドの匙加減に尽きるのではないか。広くて深く、そして困難な世界であるからこそ、ライフワークとして取り組む価値があるのではあるが。

### 松籟や歴史にもしもなどはなし

西出楓楽

吹き抜ける風が再び戻らない如く、歴史にも人生にも「もしも」などはない。明日どのように生きるか、という選択肢は無数にあるが、進むことが出来るのは一つだけである。

とうさんの好きなお昼のサイレンだ  
堀江芳子  
現役の勤め人でなくても、メリハリのある生活を送っていけば「昼のサイレン」は、ひとつとするものである。背景を知らなくても、明るくていい句だが、目のご不自由な主人との生活を背景とすると、この句は一段とやさしさと深さを増す。

### バラ買ってケーキを買ってまださむい

木本朱夏

ところが満たされないと、女は買物をする。やさしい物を両手いっぱい買い込んだがまだ隙間風が吹く。お金で買えるものはいっぱいあるが、買えないものもいっぱいある。

### 秋晴れの十時に並ぶバチンコ屋

氏林洋敏

雲ひとつない快晴。神さまから賜った黄金の朝。いのちが躍動する太陽の下で、男一匹いい台を取るために、並んでいるのである。  
嫌な事みなやめるべし老いぬれば

田中正坊

嫌なこと嫌な人、気が進まないことを総てパスできるなら、この世は天国になるが、社会的な繋がりや濃い間は許されない。そのよくな勝負気ままが許されるのは、やはり「老いぬれば」であろう。寂しい事でもあるが。

### 内宮へミニスカートも居て候

乾 喜与志

男性の半ズボンでさえ、門前で止められる異国の神に比べ、我が日の本の神々は性に寛容であり、伊勢内宮の天照大神も例外ではない。九十歳になられる大先輩、観察するべきところはキツチリと見ておられて頼もしい。

本当の哀しみは、ひっそりと心の奥に隠されて、友達との間に「共通の哀しみ」は見つけ難い。小さな生き物は、哀しみを抱いて生まれて来たようで、その哀しみは、誰にも語る事が出来ない心の奥の哀しみに似ている。

### 亀の子たわし握ると力湧いてくる

亀岡哲子

亀の子たわしには、舶来のスポンジ等にはない力強さがあり、握ると確かに力が湧いてくる。これは、チクチクする感触がてのひらのツボを刺激して、やる気を起こさせているのではないか。元氣な主婦の姿が見える。

氣遣いはしないようにと言い過ぎる

藤 解 静 風

ほんとうに遠慮して言っているのか、それとも「下心」があつて言っているのか。いずれにしても、「どうぞ、お気づかないく」を、何度も言われると、こころの中へ入り込まれたよつで、不愉快になる。

風一号なじみの蕎麦屋店を閉じ

春 城 武庫坊

ひとりふらりと入つても、何の気兼ねもないなじみの店は、親友と同じように貴重な財産である。こがらしの吹き抜ける街に、男だときのように、こころに穴があく。

ややこしい J・A・J・T・J・R

柳 楽 鶴 丸

「日本人の得意技は物真似である」という古めかしい定義を持ち出すわけではないが、貧弱な発想で看板だけを塗り替えても、どんぐりが並んでいるよつで、ややこしい。

長電話で聞いた噂を整理する

三 宅 つえ子

冷静に頭の中で整理しなければならぬほど、いっぱい噂の御馳走を頂いた。ひとりで食べるのは惜しいから、自慢のスパイスを追加して、お次の人に回して上げましょう。

ホームレスのおつちゃん曇り空を見る

岩 佐 ダン吉

ホームレスにとつて雨や雪は凶器である。曇り空を見上げるおつちゃんの心を思いやるとき、やさしい男は自分自身の姿を、ホームレスのおつちゃんの姿に重ねているのである。こんな少年が志願して逝つたのか

森 松 まつお

少年を「志願」まで追いつめた教育の恐ろしさ。祖国のために散つて行つた少年兵たちを想つと、胸がつかまる。破調が慟哭の思いをより強くして、痛切。

子に遺す捨てられそうな物ばかり

菱 田 満 秋

個人にとつて、かけがえない思い出の品も、他の人から見ればガラクタにすぎない。思い出っぱい、ガラクタっぱい。死ねば焼かれて、捨てられる。遺して喜ばれるのはお金、宝石、不動産。思えば寂しい。

それではと無言電話の相手する

田 中 み ね

無言電話をする人は、寂しさに耐えかねて救いを求めているのではないか。無言の相手をするためには、こちらも無言の行に耐え抜かなければならない。「それでは」と聞き直つて対峙してやるのも、勇気と覚悟が要る。

勝ち負けにこだわる人が居て疲れ

梅 田 宣 司

ゲームも人生も同じであるが、ゲームそのもの、人生そのものを楽しむのが達人の境地であつて、勝敗は結果にすぎない。勝てば自慢、負ければ負け惜しみをくどくど聞かされると、楽しかった余韻まで吹き飛んでしまふ。

お誘いを受ける準備はしています

野 口 節 子

こころの艶を失わないためには、これぐらいの余裕が欲しい。ここまで言われてお誘い申し上げないのは、あかんたれだが「準備は」がくせもので、選ぶ権利を保留しておられる。木登りのうまい彼から柿届く

石 尾 かつ乃

もちろん、彼も歳をとつて、今では柿の木にも登れないが、おさげ髪と腕白の友情は今でも続いているのである。純朴で無口で、恥ずかしがり屋の腕白は、おさげが好きだったが、好きと言えずに今でも柿を送っている。

点滴を見つめて帰る見舞客

黒 川 紫 香

ひととおりの話題の後は、とくべつに話をすることもない。点滴を見つめる人を、病人は静かに見ている。この状況は勿論、男対男に限る。女対女ではこのようにはならない。

同人特集

酒百句

平成四年〜平成六年  
同人吟から 編集部

酒とろりとろり大空のころかも

麻生路部

飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ

麻生葭乃

男にはとことん飲める酒がある

小出 智子

それがまた実においしい迎え酒

工藤 甲吉

酒の爛だんだん夜が長くなる

都倉 求芽

たわ言を言うなお酒はぐっと飲め

森下 愛論

冷や酒の方が切り出しよい話

片上 明水

うれしい時乾杯をする友がいる

堀江 光子

冬火花 酔えない酒を飲んで

奥山 美智子

独り酒ひとりの刻を深くする

赤川 菊野

ただ酒に酔うと頭が痛くなる

土橋 螢

ゆつくりとお酒が飲める元夫婦

肥後 和香子

桜散る男独りの缶ビール

鷺見 章

茶碗酒 底で戦火がまだ消えぬ

村田 善保

呑めば狂う酒が仲々止められぬ

森井 菁居

ほろ酔いに魔女の呪文が効いてくる

辻川 慶子

てのひらに桜見てきたうまい酒

堀江 正朗

二日酔い黙って喧嘩しています

小池 しげお

きげんよう酌いで大きな児を寝かす

堀江 芳子

なあ酒よ俺の心は分かるまい

両川 洋々

泥酔のわたし解ってくれますか

舟渡 杏花

冷や酒の安定剤が効いてくる

西原 艶子

玉子酒 亡父の夢を見させてくれ

稲葉 冬葉

酒やめて男の美学遠くなる

板東 倫子

酒の席飲めぬが好きなのが一人  
 酔いたいと女がこわいことを言う  
 盃に散る花びらも酒が好き  
 熱燗で飲みたい愛が見えない日  
 いざ呑まん暫しさくらになりきって  
 終電で呑み屋のつけを整理する  
 酒の出る席なら万障くり合せ  
 ワンカップ一つで弾みついてきた  
 エッセイに麦酒はうまし苦かりし  
 うれしいと酒が飲みたくなつてくる  
 酒とろり浮世ゆつくりバラ色に  
 爛冷まし飲んで孤独に耐えている  
 ワイングラスに女の嘘が浮き沈み  
 浮いた酒 沈んだ酒の繩のれん  
 ただ走る一生ある日は酔いつぶれ  
 孫までが阪神びいき大ジョッキ  
 活き返るビアガーデンに灯がともり  
 ひれ酒に帰りたくない夜が更ける  
 酒豪の名返して知った酒の味  
 人生は旅と酒なり牧水忌

西田 柳宏子  
 榊本 露児  
 奥谷 弘朗  
 川崎 ひかり  
 田中 薫  
 玉井 豊太  
 小野 克枝  
 江原 とみお  
 波多野五楽庵  
 小林 由多香  
 西口 いわゑ  
 川島 諷云児  
 吉川 寿美  
 有働 芳仙  
 加藤 彩人  
 黒田 真砂  
 山本 希久子  
 木本 朱夏  
 内海 幸生  
 田中 正坊

二ヶ月の風に酔いざめして帰り  
 正義感ひとりになって酔いつぶれ  
 梯子酒 月を味方にして帰り  
 酔うてます君が美人に見える夜  
 均等法ああ居酒屋もパチンコ屋も  
 酒呑みは酒が薬と決めている  
 盃を受けて約束縛られる  
 酒も毒 煙草も毒で生きている  
 地酒よし寒さにとろりとけてよし  
 妻に読まれているなと思ふ飲んでいる  
 百薬の長から足下掬われる  
 こおろぎのエレジーを聴くひとり酒  
 ときめいた心に今夜乾杯を  
 自転車で飲酒運転して帰る  
 酔うて寝るひとを見守る寒椿  
 薬ほど飲めてはんなり春の宵  
 ロゼワイン可愛い嘘を聞き飽きる  
 西の年サンズイ偏も要りますな  
 酔いませる姑とときの秘話かたる  
 天下泰平 酒の肴にしあう仲

黒川 紫香  
 吉岡 美房  
 榎本 吐来  
 滝北 博史  
 玉置 重人  
 神夏磯 典子  
 淡路 ゆり子  
 山下 美津留  
 吉岡 きみえ  
 小島 蘭幸  
 松本 忠三  
 片上 英一  
 茂見 よ志子  
 宮口 笛生  
 板尾 岳人  
 本間 満津子  
 奥田 みつ子  
 岸野 あやめ  
 宮崎 シマ子  
 本田 恵二朗

ワンカップ二人でこの世ふり返り	高杉 鬼遊	フアッションで飲んだワインの請求書	西出 楓楽
泣き上戸 三次会まで従いてくる	高杉 千歩	泡消えたままのビールで居る一人	児島 与呂志
ほろほろと酔うて禁酒は考えず	松本 文子	居酒屋で鯛ぐらいの政治論	松本 ただし
熱燗はいいなあ父と子の話	吉村 一風	祝盃は溢れるほどに酌ぐがよい	田中 透太
ビアガーデン女の陣の大ジョッキ	柿花 紀美女	飲むときは何も考えずに飲もう	高須賀 金太
しらふでは言えず飲んだら酔い潰れ	三宅 保州	うちの鬼さんとうとう酒を断つつもり	田中 亜弥
ひとり酒わびしきものよ妻が病む	田村 新造	盃に重ねた恩が渦となる	澤田 千春
断酒した夫に祝杯すすめてる	菅井 とも子	悪口を言い合っていて酒すすむ	野村 静雄
一缶のビールで買える笑顔です	時広 一路	回復へ晩酌がつく生きてるぞ	渥美 弧秀
酔いざめの水おぼろげに悔いのこる	藤井 明朗	狂わせたお酒に知らん顔される	稲本 凡子
眼病み妻 禁酒と言われ春遠し	春城 武庫坊	美しい酒にほんのり雪の宿	石倉 美佐子
ビール乾す互いにはつとめる瞬間	春城 年代	悪口を言い合っていて酒すすむ	野村 静雄
焼酎を飲んでなんにも考えぬ	土橋 はるお	酒ありて倒れず回るわが余生	田中 文時
ほろ酔うてぼろり落した過去の秘話	島崎 富志子	お車で安いビールを買いに行く	松川 杜的
居酒屋へ迎えに行つて帰らない	乾 隆風	雑談にかわりお酒が美味くなる	辻 白溪子
ひとり酒ロタンのようなかつこして	浅田 隆樹	バックスの神にお叱り頂きぬ	榎山 隆
根回しの前にお酒をすこし掛け	相馬 一花	両刀使いの仏に酒と彼岸餅	山崎 君子
晩酌が減つてはじめて気遣われ	宮口 克子	ある時は酒仙となつて膝を借り	小砂 白汀
酒提げて天狗の知恵を借りに行く	新家 完司	酌ぎかわし而立と古希は一瞬ぞ	橘高 薫風

先号に書いた文芸春秋（昭和八年新年特別号）には思い出がある。私は構造社発行の川柳全集「麻生路郎」を担当したときその文芸春秋を探して中之島の府立図書館へ行った。そこには無くて奈良県の天理図書館にあるのを知り、天理まで出掛けて閲覧したことがある。現代の川柳は四句だけで、あとは古川柳ばかり、それも佳句とも思えぬ句が多かったので大いに失望した印象を今に覚えている。

昭和初期の川柳への認識を考えさせられたものだ。それに関連があるようなので、その頃気鋭の若手、松丘町二氏が「心のふるさと」と題して書いておられる一文を紹介する。

（前略）

こころのふるさとがないさみしさです  
かつてこう歌った私は、いまもなおこころ

のふるさとのない淋しさに生きている。柳樽は川柳作家としての私の心のふるさとではない。これは私にとって悲しいことだ。恐らく歌人には萬葉集が心のふるさとであろう。俳人には芭蕉が心のふるさとに住むだろう。そ

れらの人々は自然へ人生へ探求の眼を向けて心を歌い、生活を歌いつつ、歌につかれたとき、そして心の泉の涸渇を覚えたとき、萬葉の名歌が、芭蕉の精神がなつかしく浮かび上ってくるだろう。彼らはこの心のふるさとに帰ることによって、魂を慰め力を得て、再び心の泉にこんこんと詩情の水を湛えるだろう。彼らは正に幸福である。

川柳作家の心に荒涼たる風が吹き、柳樽の古句は徒に言葉の面白味を面白がって、皮肉り、くすぐり、警句を吐いて心の肌には見向きもしてくれない。——少くとも私ひとり、拗ねた魂には——淋しさに堪えつつ、湧き上る情熱のみを唯一の頼みとして、歌いつつ苦しみ、苦しみつつ歌う。これは確かに幸福なことではなからうが、強靱な川柳詩精神はこれを不幸としてのみ悲しんでいてよいだろうか。私は決してそうは思わぬ。思いたくない。心のふるさとのないことは自分で心のふるさとを拓いてゆかねばならぬことを意味するのだ。詩人の本懐ではないか。

町二氏は当時三十二歳、その年の「日本柳壇百人撰」一九三二年の収獲自選三句集には  
月夜の壁に我が魂を展げける  
木の葉ひそかに寝返れり池の底  
明るい皮膚と暗い心に住む私

を提示しておられ、戦後俳句界（「青玄」）で活躍した作家である。当時の革新派と称せられる日車、半文銭、五呂八をはじめ、路郎や三太郎も含め、このような思いでいたのだろうか。若さゆえの激しさだろうか。

それに引きかえ私の場合、川柳の出発早々句集「旅人」に出会いこれがふるさとだと詩魂に大きな支えと拠りどころを得たのだった。

川柳雑誌社十周年祝賀記念大会は一月十五日正午から道頓堀倶楽部で開催、出席者百二十三名、路郎主幹染筆の「君見たまえ渡後草が伸びている」の手拭いが記念品に贈られた。司会は西田艸葉、講演「三笠附による流人」藤里好古、題は初雪・襦袢・女・喜び・松過ぎ、選者は松丘町二、高橋かほる、松盛葵人、関本雅幽、庄萬よし（路郎の代選）の諸氏であった。

大会後は市内の松虫花壇で祝宴、数時間に及ぶ芸達者ぶりは酒間を取り持つ紅裙連を啞然たらしめ午後十時過ぎに散会とあるが路郎主幹の病臥の淋しさは深刻だったに違いない。

# 水煙抄

## 高杉鬼遊選

綾部市 藤田芳郎

河内長野市 大西文次

どうだどうだと聞きに来るから痛くなる  
冷凍の父だと仔牛には言うな  
花東のリボンがしゃしゃり出て困る  
真つ当な暮らしがしたい蠅叩き  
切り捨てた尻尾が怖いことを言う

宝塚市 永田暁風

男やもめを誰も忘れて秋日和  
乱れ打ち太鼓が死者を昂らせ  
亡妻が呼んでる眠くて仕方がない  
一本ずつ指を開いて無を放つ  
スイツチを消す白い手だけが残る

枚方市 前たもつ

自転車をしつと見ている三輪車  
妻と娘の喧嘩の中に入らない  
輪を抜ける男だれかを誘い込む  
霊柩車休む日がない雪月花  
踏切を待つにも個性性いるらしい

ご主人がもてず奥さん気楽です  
日日好日どころではない年の暮れ  
寝たきりと言う老人に無料パス  
友情がおかしくなった金詰り  
しまったと思う約束してしまふ

和泉市 中川楓

ルワンダと貧しさゆえに名を覚え  
定年へ樹海のごとく立つラッシュ  
旅プラン マドモアゼルになった夢  
蟹いっぴき女三人黙らせる  
へたな芝居また逢えるのになっています

堺市 小西小雪

それみろと言わんばかりに押し詰まり  
がらくたを捨てて拾って年の暮れ  
くじ引きの運は後ろの人へあげ  
贈りもの私の好み押しつける  
ダイヤモンドあなたと御縁なさそう

今治市 渡辺南奉

使途不明金とは変な日本語

かにかくに浜民村も過疎進む

叩かれた方はすつきりしたらしい

叱られに行くネクタイは曲げておく

休肝日ひと月全部でもどうぞ

久留米市 鶴久 百万両

連獅子のシテは誰にも譲らない

第九合唱 少女のようにときめいて

火の鳥と夢の隣にころげこむ

支持票を掴む内濠埋めておく

てんでんでん毯 魔女も優しい眸にかえる

札幌市 三浦強一

元の身は言わず新宿ホームレス

夢にまだふる里があるホームレス

母に似る顔はつとするホームレス

野良犬に餌を与えてホームレス

新都庁見上げてあくびホームレス

熊本県 高野宵草

国破れ銃は肩から捨てたのに

お茶好きと言えばガブガブ飲まされる

干柿のすだれで故郷に迎えられ

奴嵐威張っておれぬ糸が切れ

速効の薬ゆっくり副作用

熊本県 大川幸子

散るまいとすがる枯葉へ罪な風

指切りごっこ一寸たのしい夢をみる

一人二人と巣立って元の夫婦です

甘え上手 荷物は夫の手を借りる

鬼だつて手抜きしている面白さ

富山市 島 ひかる

曇天へ自己主張するエンド豆

人形のように生首おとされる

キイウィ・フルーツ リングに会えて熟れてゆく

水仙もおんなも枯れぬ方がいい

こっそりと出て行く人へ見ぬ情け

和歌山市 木村親路

好きやねん粘る男に負けました

厚化粧いつも素顔に負けている

着飾って見ても私は私です

鍵つきの箱はよけいに見たくなる

生きている実感に夜が明けてくる

和歌山市 吉村 さち子

耐えるのが美德と思ひ耐えてきた

することがたんとあるから請う命

捨てられぬ皿一枚にある未練

一命を生き延びた蚊の住み処

人間のエゴに一つの安楽死

返し忘れた本のほこりをよく払う  
うかうかと過した罰の十二月  
手の届く高さは母に残す柿  
暴かれた虚像が音もなく壊れ  
振袖が親の苦勞を競い合う

撰津市 木下道子

刺すような風にある日をさばかれる  
平成六年いろいろあったなと思う  
本音吐くペンがいつきに走り出す  
笑って言えるならサヨナラをしよう  
リュックサックいざという日に置いてある

藤井寺市 高田美代子

いさかきもあつたが遠く来た二人  
ばあちゃんも同罪孫と首すくめ  
ポタン鍋 今年は遠慮しておこう  
切実になって呆けたと笑えない  
ブティックで足は出口に向いたまま

茨木市 島元ふみ

見渡せば恥の文化が失われ  
美女はティファニーで私は立って朝を食べ  
早よ死んだ方が勝ちだと看護する  
嘘も方便お寺が所得隠しする  
修理した程度が解る手術跡

堺市 吉本菁風

排水口不満の音を詰まらせる

米子市 堀江美月

どんな時でも踏み台になる母の椅子  
結び目に白と黒とが絡み合い  
耳掃除したら第九が聞こえ出す

鳥取県 山本正光

妻の意を満足させぬままで古い  
終章のページで秘策練るつもり

ふところの鬼と一緒に女と逢う  
年の瀬に寄付の話でみな無口

宝塚市 嵯峨根保子

救世百済まぶたの奥のほとけさま  
効く効かぬ野菜スープで内輪もめ  
平成の空に女は限らない

円高のメリットよそにワンカップ  
豪邸を見上げて喘ぐ万歩計  
倒産の社の跡赤いバラが咲く  
毎日が本日限り店じまい  
無人駅の隅に気品の池の坊

富山県 高島五月

春夏秋冬 視野に居るのはあなただけ  
試着室鏡はお世辞ばかり言う  
さあやるぞしずかに今年動き出す  
陽を吸ったふとんいい夢見られそう

宿毛市 岡村千鳥

鳥取県 原 みさを

上げ底をつつむ言葉をつみ重ね  
家事育児できた夫で食い足りぬ  
木枯しの息の乱れを見てしまふ  
この町に選挙区と言う太い線

岡山県 大石 あすなろ

村祭りおわるともとの過疎になる  
どんぐりの歩幅でいつも走ってる  
四面楚歌 苦さも飲んでたじろがぬ  
身勝手な祈り聞いている百度石

大阪府 和田 和風

希望校無理コンピューターのご托宣  
偏差値に十五の春が揺れている  
町で会う子連れナースは母の顔  
鏡になるはずの子で採めている

鳴門市 八木 芳水

お見合の際に娘は値踏みされ  
人の世は戻れぬツアー大みそか  
補聴器を外してちよつと自由どき  
童謡も出ます老人会の旅

相生市 中塚 礎石

賞罰をさらす柩へ菊をそえ  
しなやかな手つきで月が出る踊り  
上菜ぬれば素焼きの愛が失せ  
寡婦の川石ごろごろと愛の渦

日立市 加藤 権悟

故郷の川には母の蜚すむ  
木枯しや引算ばかりする師走  
ムードには弱い男のコップ酒  
駆け足のように忘年会が来る

八尾市 村上 ミツ子

内緒ごと壁にきかれたどないしよう  
木犀の風に白杖足を止め  
闇の中点字打つ音ひびいてる  
投げつけた豆をゆっくり拾ってる

河内長野市 柏本 靖子

握手した手が温いから従ってきた  
保険証いつも一緒に旅をする  
わがままなすすきで風に従わぬ  
久し振り家族が揃うボーナス日

寝屋川市 後藤 黎之助

選挙民決して貝ではありません  
生命ある限り泳がす海遊館  
紅葉に沈む夕陽も燃えている  
ワンルーム借ろうか子等と暮そうか

河内長野市 水谷 笙子

うやむやに生きて六十路の冬の虹  
聞いてやる方が大きい悩み持ち  
建て替えのチャンス逃した隙間風  
定年になって外野も見えてくる

出雲市 荒木 恵美子

いい女演じきれない秋の宵  
やさしさも女らしさも枯れてゆく  
わだかまり秋風吹いて忘れ去る  
稲の穂の最敬礼に満ちた顔

尼崎市 松下 弘

大仏も立って見たから奈良の秋  
青空の飛行機雲に孫と乗る  
黄昏の夕陽あかあか生命燃ゆ  
うかうかと七十年も橋の上

河内長野市 橋本 弘美

ぐうたらに過し勤労感謝の日  
日本へ帰れた夜の甘い月  
水もれの音が気になる午前二時  
どたばたの喜劇見ながら泣いている

羽曳野市 酒井 一壺

無農薬虫がお先に味を見る  
狭い庭菊のかわりにネギを植え  
仏様私は自己を信じます  
土壇場で初めて拝む仏さま

旭川市 朝倉 大柏

逆らわぬ笑顔で少し物足りぬ  
写経してみても昨日と変らない  
ヒロインに自分になって泣いている  
置き去りにされた気持で聞く新語

西宮市 牧 潤 富喜子

真似をする小虫が視野に住み始め  
ひとまわり大きく咲いたこぼれ種  
こんな日もあるのか信号青ばかり  
教育は捨て身ぞ蔦が枯れている

寝屋川市 森 茜

四面楚歌なのに男の樂觀論  
影武者がうごめく午後のベル鳴らし  
冗談の一つわからず輪にとける  
いつの日も真剣だった力瘤

芦別市 斎藤 房子

雪のんのんベーターベンに逢いにゆく  
失敗を重ね太っていく命  
岩田帯母子の愛を結びます  
愚かさをやさしく包む牡丹雪

尼崎市 野瀬 昌子

テレビ見て泣くも笑うも老い一人  
同権を使い分けつつ嫁姑  
許されて島へ帰って来た二人  
一雨があって農家の休養日

尼崎市 山本 すみ

波柿の嘘を鴉は知っている  
ベストは尽した無駄だったとは思うまい  
檻に住むゴリラの悟り切った貌  
雨の日は読みかけの本出してくる

今治市 越智青園

正月がうれしいうちはまだ若い  
年賀状で今年も逢えてほっとする

浪人の僕に似ている休耕田  
仲良くて風邪も夫婦でうつし合い

唐津市 市丸晴子

茶の間でも窓際の椅子守る父  
めがねかけて寝たのに夢は隴色

全身を飾り戦に出る女

座右銘はお腹も口も八分目

松江市 松浦登志子

不自由と自由の狭間一人生き

寒い夜は甘い辛いをつつきあう

大阪弁ちよっとつこうてみとうなり

血走った国会議員を品定め

弘前市 相馬銀波

完敗のダブルスだった離婚劇

愛妻の胸を忘れぬブルーメン

ファックスが野火かも知れぬ散る噂

密約のあろうはずない赤い靴

羽曳野市 安芸田泰子

神様の掛け持ちをした初詣

日曜日隣の柿が届く筈

詮索が好きな鼠の覗き穴

一日の始まり犬に誘われる

唐津市 山門幸夫

行間に無限を語る敗戦記

語り部もあの浮雲も消えてゆく

ご法話にこっくり浄土の夢をこぎ

雪の日はママさんバレー洗濯日

唐津市 山門タミ

桃太郎カチカチ山で孫と寝る

遠縁の人にも出逢う通夜の席

七十でちゃんと呼び合う友がいる

アイウエオつづいて来ない歩が淋し

豊中市 石川勝

曲って打った釘は一年前のまま

二つ折れの葱よりむごい挫折感

よい夢を見たくて枕裏返す

卵割る意識ほのかな小さい罪

鳥取県 岩崎みさ江

なにごとくも無く一日の幕が降り

太陽に人の浅知恵わられる

ビル街に時雨をさける軒がない

小さくとも木の温もりの家に住む

鳥取県 山内芳江

テレビから地球の裏が良く見える

写経して荒む心を落ちつける

次の世へ渡す地球を汚すまい

焼き餅を焼くから余計自惚れる

寢屋川市 富山 ルイ子

母として子におもねらず子を叱り  
寝たきりになるかと思ひ身がすくむ  
生きるとは何か自分に問ひかける  
如月に何時もの顔の散歩道

広島市 流 奈美子

一年の計の一つに旅プラン  
重ね着の中 風が吹きぬける  
水面きらきら二ん月の透明度  
ツーカーの友で信書も百を越す

熊本市 宇野 照代

余力まだたっぷり残し定年日  
旧姓に戻るハンコを軽く押す  
人形も笑いたかろう泣きたかろ  
大袈裟な決心たかが禁煙に

枚方市 濱田 良知

雑踏に消えたピカソの絵を探す  
どっちもどっち何か欠けて仲が良い  
余命表鬼と仏が喧嘩する  
御老体と言われぬように生きたいな

新潟県 高野 不二

大臣のまだ似顔絵になる人氣  
花言葉知らずにくれた花らしい  
二キロやせた記録三日で元通り  
こう言えばよかつたぐちを妻に言う

十和田市 阿部 喜久江

遊んでるゆとりなどない塾通ひ  
親ばなれできぬ夫で妻泣かせ  
物溢れ人の心がやせ細り  
痛いところ突くから返り討ちに合ひ

和歌山市 山根 めぐみ

喜びをくれる仏に耳澄ます  
しつとりと心の隅に夫がいる  
騙されてみよう小さな好奇心  
軌道修正かわいひ母になりたくて

徳島県 安宅 美代子

りんごむく指はだまってついてゆく  
頂上へひとり登った顔をする  
子に渡す下絵の彩が褪せてくる  
久しぶりおしゃべりに酔う箸袋

香川県 辻上 よしみ

捨て切れぬ欲で長生きするつもり  
手を広げ迎えてくれる山がある  
掴みどり欲がつかえて手が抜けぬ  
すぐ分かる顔で悲しい嘘をつく

香川県 堤 くに子

夢ばかり追っている間に歳重ね  
冬空を悠々自適はぐれ鳥  
鈍感に見せて世間を丸く生き  
夢を買う列についでる歳の暮れ

香川県 田中ふみ  
木枯らしが化粧濃くする吊るし柿

おっぱこの顔が売れます句碑二つ(あきらさん・吟笑さん  
句碑建立)  
つきつきと夢を買うては使い捨て  
年金のおかげ笑顔で義理がすみ

大阪府 勢理客 トミ子  
とんぼ返り子は遠距離を苦しめない

回復期風にやさしく包まれる  
猪の歳よただ健康を祈るのみ  
暖冬で音色が冴えぬ焼芋屋

島根県 武島 ちよえ

車降り紅葉にしばし酔うており  
新しい畳に私がそぐわない

中天に三日月刺さり凍る夜  
負けん気が気弱になってゆく日々よ

羽曳野市 徳山 みつこ

久々の子へせめてもの五目飯  
よそさんの食卓のぞくレジの列  
カラコロコ銀杏を炒る冬弾む  
冬座敷深紅のバラがひとり燃え

藤井寺市 楠 昭子

私を探しつづける闇の中

怠けるようにも見えているロダン  
三分粥この世に未練まだあった

猫までも主を真似る朝帰り

八尾市 井上しのぶ  
同姓同名いらんことまで比べられ

車間距離忘れてしまうほど夢中  
長男の嫁が最初に試される

八尾市 平川 幸枝

走ることやめて夫の視野に入る  
松並木 寒々として世を眺め

たかが湯豆腐されど家風と言えるもの

米子市 木村 春枝

結び目も程よくゆるみ老いてくる

国際化老いも垣根を低くする

ハッピーで結ぶつもりの私小説

大阪府 原 美恵子

女ばかり飲みに行こかと十二月

渋滞の観光バスで酔うただけ

年金がシール被って届けられ

大阪府 川原 章久

人恋し熱燗恋し鍋恋し

重宝な舌三寸の裏表

招き猫と手の鳴る方へ宿浴衣

寝屋川市 北岡 波留吉

福耳とほめられ覗くコンパクト

心眼を開いて渡る丸木橋

肩を揉む指が伝える嫁の愛

等身大の影が行く手を指図する  
酒のせいだったか冬の灯の優し  
追憶の貴方へつづくオルゴール

尼崎市 長浜澄子

尼崎市 湊修水

くじつきの餌で現金掻き集め  
いつてらっしゃい車と銃に氣いつけて  
猪突猛進 右も左も風の中

東京都 清原悦子

老いのぐちなイスキャッチで今日も受け  
長電話やはり夫のメスが入り

アイラブユーそんな言葉が消えかから

名古屋市 藤井高子

笑うてや鱗ぼろぼろ散る喜劇  
ケープルを鼠が齧るワハハのハ

そここのところを曲けてと義理がからみつ

静岡市 永倉柳華

スカートと祝辞短いほうがよい

新築へ詫びて据え置く古箏

文箱の底にまだある軍事便

大阪市 中井正秀

会う度にあんたはお金持つてはる

タイの人食べてる米をなせ捨てる

殺されてばかりいるので基は嫌い

へソクリを覗いて風の残り旅  
近頃の妻の態度が寒うなる  
指切をいっばい溜めて孫が去ぬ

兵庫県 北川とみ子

八尾市 生嶋ますみ

塾通い雑魚には雑魚の夢がある  
逢うあした十本の爪丸くきる

子離れに出るため息はなんだろう

和歌山市 古久保和子

ややこしい話 留守電聞き流す  
不本意なとこに手が行く超ラッシュ

かけ算で噂話が回り出す

尼崎市 軸丸勝巳

ワープロの賀状 元気が見つからぬ  
美味いうまいと手作り野菜自賛する

松葉がに智頭急行が近寄せる

泉佐野市 内田倫子

骨惜しみ歳のせいだと逃げている

良すぎてもまた考える子の縁談

誰だろう夢で私を抱いたのは

堺市 以倉菜々

冷戦中 夫は自立しています

日曜大工 道具揃えてゴロ寝する

決心を鈍らせたのは通り雨

羽曳野市 西 村 りつえ

憂い秘め看護もさせず散り急ぎ(母急死)

騙すより騙されましよう福寿草

キヤッツフード猫に鼠を忘れさせ

佐賀市 古川 かずのり

健康法出来ることから万歩計

喜寿超えて無理はするなと言うカルテ

貧乏をすると思見が揃わない

豊中市 藤原 桂子

隣へも賑い運ぶ初の孫

子が眠りやつと二人のティータイム

残る日々ゆつくりズムで歩きたい

寝屋川市 宮崎 菜月

縁切りのお札も寺の自販機に

ぴいひやらと一年の罪払われる

弟に負ける私の親孝行

今治市 村上 久美子

政界も我が家もボスは裏に居る

身の程を越えて神さま仏さま

ほどほどと言うから余計むずかしい

尼崎市 吉永 伊三郎

女房は疾うに寝てます午前様

手の届くところ敵の罠がある

暖冬の鐘を聞いている去年今年

高槻市 庄野 澄子

恋わずらいなんて一度してみたい

海ゆかばふと口ずさむ世代なり

これが生き甲斐お札勘定しています

鳥取市 田賀 八千代

ハチの巣をつついたような朝の乱

稲妻が走って女捨てさせぬ

忘れちゃならぬ美談の影に妻がいる

砂川市 武田 正美

春近く能弁になるオウムたち

たどたどしい告白求婚だろう

無策の日 酒と楽しい話する

尼崎市 尾宮 弘治

度の合わぬ眼鏡で坂が下りられぬ

曲つてもしかと利いてる妻の釘

旅に来て寡婦と言う名がよくもてる

尼崎市 的場 十四郎

空回り慣れたものです凡夫婦

さわやかなあと味残し母帰る

知りすぎてその反面で迷うてはる

尼崎市 中澤 向西

そのうちにいい事あると慰める

枯れすすき動いたここが古戦場

呆けぬようゆつくり歩く風の道

欲望の渦に溺れる羅針盤

尼崎市 河津 正治

自分だけ不運のような通り雨

花屋にはない四季がある里の秋

尼崎市 田 辺 鹿 太

過去は過去 胃に一杯の朝の水

諫言の甘さへ蜂が来て止まる

反り返る指に女の過去がある

堺 市 宮 本 かりん

実家帰りお国訛りも持ち帰り

変哲のない一日のしまい風呂

しわの手で生まれた餅のつややかな

八尾市 村 上 剛 治

仁王の目あなたは直視できませんか

かずら橋あと五六歩をかけぬける

押し入れの暗い隅には鬼がいた

鳥取市 田 中 友 子

愛すれば骨身惜しまぬ世話もさせ

遺産分け計算外も顔を出し

着飾った服 旅先で邪魔になり

高知県 百 田 幸

チャンネルも思いのままよ夫は留守

似顔絵は少し手加減して欲しい

組板はいつもまっさら共稼ぎ

静岡市 三 浦 つ ね

貰い物重くはないと瘦せ我慢  
声だけが元気な老いの電話口  
疲れても貧乏性が許さない

大阪市 三 浦 千津子

偶然も奇蹟も神の思し召し

末席の反論 的をついて来る

日を置いて話すと丸く聞いてくれ

静岡市 片 平 静 代

雪かきで離婚をしたくなる娘

電話してゆっくり手紙書くつもり

金持ちは一人もいない息子達

島根県 今 川 三津江

いの一 朝はポットに湯を満たす

飽きもせずばた餅供える御命日

守らねばならぬ一人の小さい城

貝塚市 池 田 寿美子

粗大ゴミの叫び聞える収集日

いろいろな夢を見過ぎる自尊心

肩書が邪魔をしているおつきあい

摂津市 井 上 源 一

運命を動脈瘤に左右され

紅葉見て京弁当の迷い箸

正月の孫待ち詫びる縫いぐるみ

福岡市 井崎 ミサ子

ホケた振り決めて互いに笑い合い  
年のせい決して言わぬ意地を持つ  
そして又静かな妻となりました

大阪市 尾崎 黄紅

八分目の男でいつも病んでいる  
親切のつもり女に睨まれる  
呵々大笑の酒どことなく佗しそう

今治市 塩路 よしみ

見てくれる人があるから咲いてます  
陽が沈みごころうさんね影法師  
幸せが重なり合って酔いにけり

泉佐野市 大工 静子

関空が出来て国際都市に住む  
長生きのおかげ空港窓に見る  
おさまりの言葉も嬉し朝の顔

島根県 森 茂美

白寿まで走り続ける脚を揉む  
躓いた石にも一度つまずいて  
逝き場所のまだ見つからぬ冬の蠅

和歌山県 杉山 精子

綻びを縫ってあげたい赤い糸  
どの川も母なる海に辿り着く  
涙もろい女の涙すぐ乾く

米子市 鹿島 蘭

私の耳で輝くガラス玉  
楠がゆっさゆっさと身をゆする  
隣から吹く風だから気にさわる

大阪市 中橋 恵美子

米作の農家もパンを焼いている  
鼻の上だけたたいてるコンバクト  
庭掃除するから枯葉また落ちる

香川県 山崎 初恵

秋日和ネコもフトンも日向ぼこ  
ペンダント片割れハート捨てきれず  
三回忌 菊一色に亡母微笑う

島根県 岩田 三和

食べるだけ作れば遊ぶ文化村  
この思いいまに沸騰にこぼれる  
木の家で自然と仲のいい暮らし

泉佐野市 稲葉 洋

暖冬は何より老いにプレゼント  
医者通いだけ几帳面 霜の朝  
只今は老いの盛りの見せどころ

姫路市 服部 一典

おもにから一時逃れの縄のれん  
薬袋 飲んだ飲まんの老夫婦  
母の息もみじのような手を温め

伊丹市 榎谷郁子

小春日に包まれ柿の冬支度

落葉舞う朝 通勤の丸い背な

記念誌に会う幸思い筆運ぶ

大阪市 松永会美

賑やかで悟る間もない龍安寺

虹の橋どこのどなたが渡るのか

湯けむりの雲仙 今は遠い人

和歌山県 中後清史

生と死を悟る一字がまだ書けず

お荷物にならぬと言った父が呆け

戒名にまで段階があるあの世

大山市 田中太音

あちやこちやの葬儀屋からの年賀状

骨つばを飾る応接間の温み

カラス啼く順が迫ってくる感じ

神戸市 船津とみ子

絶筆となる妹の賀状読む

わたくしはとても元気で餅を焼く

年金というありがたいお金蔵

寝屋川市 瀧本八十八

竜宮を去る浦島は平和ほけ

取賄が非常口からはころびる

ほどの良い遠慮もときに見せ夫婦

愛媛県 久保良子

雨やどりなさい鴉よ濡れるから

風呂好きの夫こつこつ薪を割る

すれ違いばかりでしたね福の神

寝屋川市 籠島恵子

壺の中のにぎりこぶしが笑ってる

言い勝ったばかりに重い帰り道

プレゼントごっこに飽きたクリスマス

高槻市 江原秀夫

笑顔泣き顔どっちにしても大晦日

作り笑いを刻んだ皺が泣いている

おかしいぞ抓った頬が痛くない

兵庫県 円増純子

今までの苦勞ふつとぶ祝酒

泣けるだけ泣けば気がすむ母の膝

レール敷くまでの作業が難しい

羽曳野市 芦田絢子

忘れぬ人忘れろという他人

要るだけは要るのと妻の悪びれず

丁寧な言葉で指図するテープ

兵庫県 安達厚

一ぱいのビールも妻と分けてのむ

快い疲れに明日の夢をみる

気苦勞は忘れて生きて行く二人

鳥取市 山口 しげる

標的にされたか語尾に棘がある

舌戦の死角で息を整える

嫁ぐ娘の幼い顔が胸にある

大山市 早川 盛夫

鍋囲む人それぞれにある郷里

看護婦の何も言わない恐ろしさ

贈り物妻には妻の腹づもり

鳥取市 谷口 侑里

桐を植え大きく育ちとつがない

漫画本親は夢中で読んでいる

簡単な祝詞お客に喜ばれ

高槻市 乙倉 武史

親と子の歯車油切れかかる

逆算をして散髪の日を決める

嫌な世だ防弾チョッキ売れに売れ

静岡市 佐藤 次枝

介添えに凍てつくような手が触れる

今昔のなんたる違い週二日

押しよせる価格破壊の波を待つ

静岡市 沢田 きん

改札口自動切符が先に待ち

成り行きにまかせて動く雲に乗る

性格のいびつに気付く靴の底

静岡市 小木 久子

的はずれ批判が恐いペンの先

同じもの評価が違う目の高さ

動物の子育て学ぶものがあり

大阪市 中田 あい子

子の年忌つとめる京の寺に雪

おトイレに入れば人来る電話鳴る

信号がウインクしてはよわたろ

河内長野市 木太久 正一

娘のために美田は少し残しとく

早朝の電話で兄の計が届く

長生きをしては困ると言う国庫

大阪市 池田 一男

宇宙時間その一瞬を生きている

買わずともよいもの買って道を聞く

半白の髪に見栄ではない帽子

尼崎市 岩倉 キク子

厚化粧すればおしわがなお目立つ

どんどん脹らみだんだん萎む夢

ええのんかこれで終って悔いないの

島根県 菅田 かつ子

風邪に寝て仏壇の花枯れたまま

ほどほどに聞き流してる物干場

遠慮せず齢をいただくまたひとつ

出雲市 西尾和子

紅一点まんざら悪い気はしない  
父母の忌が重なり秋も暮れてゆく  
わがまをいっばい詰めた娘のお部屋

鳥取市 津村静枝

万葉仮名心静かに筆運ぶ  
着飾った娘を見送って親の顔  
年男 弱気な孫を煽てあげ

今治市 渡邊伊津志

謝っているから前へ進まれず  
魚河岸で男勝りの声が跳ね  
縄を解けば絆が切れる岸

倉吉市 山中康子

酔い痴れた夫のセリフを買ってやる  
自惚れが芽吹けば摘んでしまおうか  
休まない時計に老いの反比例

島根県 福岡博利

地球儀も辛から人間殺し合い  
買い替えた財布お金にきらわれる  
不思議にも酒のにおいに胃が治り

唐津市 野田旭恒

不惜身命 貴見習って孫も行け  
ドーピング矢張り大臣貴方もか  
豊作だ落穂拾いの鶏も肥え

鳥取市 杉本孝男

円高を仕組んだ鬼が笑ってる  
船酔いをしない薬と酒を呑む  
物騒な夜道一人は歩かせぬ

大阪府 澤田和重

万歩計 鈍足だなど知っている  
帰りかけてからの話が長くなる  
ほどほどの預金で夫婦しています

兵庫県 酒井靖子

松に惚れ松をいじっている鉄  
酒のつまみに今日のニュースを持って来る  
紳士と淑女 血相変えてジャンケンポン

寝屋川市 太田とし子

猪も脇見をすれば可愛かる  
厄介な年寄りにある選挙権  
初拌みモダンな年を下さいナ

静岡市 大村正雄

冬眠をしたいと思う齢になり  
団体で着いて聞いている非常口  
無欲説き午後から欲の寄附あつめ

唐津市 松本圭一

舞う落葉みな万札に見えてくる  
包丁を研いだやさきに指を切り  
借金をしたばっかりに頭さげ

宝塚市 飯西ミサヲ

ポストにも頭を下げる願ひ事  
美容院出ると何だか遠まわり

お月さまそんなに急ぎどちらまで

河内長野市 妹背 尽呂久

胃腸薬急に売れ出す年の暮れ  
窓際で開き直って根を下ろす

限り無くゼロに接近する水着

松江市 安食友子

射落とせる近道は先ず奥方だ

今夜なら心の色が明かされる

ジェラシーがお見事ですと言わせない

羽曳野市 麻野幽玄

そのうちに靡く柳と風を待つ

疑えば信ずる人が居なくなる

飲んでいる心算たまつて来る薬

箕面市 木村天弘

定年後妻は命令形となり

定年までずっと使うも社の我慢

ゆっくりと逗留願う福の神

泉佐野市 河原崎礼子

万物の天敵となり人は生き

初はしり若葉マークの初詣

旅立ちの子を見送った無口な夜

松江市 浦辺静江

マンシヨンの陰で耐えてる屋根瓦  
共通の痛み互いに元気づけ

気前よい嫁で父の日の日に

和歌山県 村中悦男

一つだけ余分のみやげ生かされる  
友が買うみやげと同じみやげ買う

先ずみやげ出して家内に旅話

八尾市 與田明

曲げまいと腰を伸ばせば曲がる膝

安売りに見せる数字の八と九

老夫婦喧嘩するのもボケ防止

和歌山県 藤井春子

まっとうに生きて頬張る握り飯

禁断の桃にそむいた赤い毬

躓いて時々借りる神の知恵

東京都 松本冬蛇

車椅子に乗せる重みが年毎に

おもしろを笑って妻に告げる年

練習も本番も駄目 駄目な人

兵庫県 玉田三重

その話一杯呑んで返事する

五十回忌派手になったか祝い膳

大安にお任せしてる祝い事

池田市 金崎峰子  
あの時にこの奥の手があつたのに  
いい旅で愚痴を一ぱい捨ててくる

熊本県 増田一乘

電気治療あなた任せの時を待ち  
孫のよな医師の問診たのもしい

兵庫県 西井つや子

来年の稲作おもう雨不足

何も彼も満足をして日が暮れる

西宮市 池田善守

順送りけむたがられる齢となり

父の字を真似て娘の荷目録

堺市 桜井莊次

みだれ髪似合う女の細い指

寂然としない男の言い逃れ

鳥取県 橋本孝原

宇宙人いたら地球を攻めるはず

柿の葉はお茶にして飲む老夫婦

尼崎市 森安夢之助

定年のその後は拗ねて暮している

真実を突かれて足がもつれだす

鳥根県 槻谷仲子

派手を着るもつともらしい同窓会

他人の目 気になり出したガラス拭き

鳥取県 高尾京  
幸せな野菜をきざむ台所  
気が晴れて髪のかざりも若返る

広島県 森川抜智

十二月けつまずいたりころんだり

冬好きと夏好き添うて五十年

高槻市 小林一閑

散歩には空き缶拾い兼ねてます

鍼灸をさばり古きずさわぎ出す

鳥取県 武田照女

巣にもどる道を教える土踏ます

退院の足に翼がはえている

静岡市 松下正枝

生きているうちに使えという頭

旅すれば不思議に軽くなる心

鳥取県 橋谷静江

亡き父の残した屋根に金がいり

一杯が吞めず手拍子だけの席

堺市 谷平まさこ

英語テープ子守歌より良い効果

一つ覚えて一つ忘れる英単語

松山市 丹下美津子

婿二人孫も飲むらしお元日

手ぶらで来ても母はうれしい皿の数

賀状書く冬の喜劇が始まりぬ  
田辺市 大 峠 可 動  
天上天下 天は課税の笛を吹き  
高槻市 執 行 稲 子

記念樹を揺する木枯しなせ怒る  
モーニング夢中ですますカブチーノ  
鳥取市 植 田 一 京

柿色の深さ絵筆を迷わせる  
良薬の苦さお叱り受けている  
岸和田市 井 齋 一 齋

通訳が飯場で稼ぐ国際化  
ボタン穴ずれて総てが狂い出す  
吹田市 西 岡 豊

一ランク下げて楽しさ倍にする  
どっこいしょこらしよで動く老いの骨  
犬山市 山 田 津 多 江

日毎増す百態の児とかくれんぼ  
口下手で別格の座に押しやられ  
羽曳野市 山 本 た け し

落葉舞う亡父の最後の日のように  
陽溜りを探して猫は屋根に寝る  
兵庫県 森 脇 和 子

裏話 鬼も泣かせる十二月  
ワープロへ読み書き飽きぬ父の午後

ノーと言えぬ私根つから日本人  
島根県 松 本 聖 子  
師走だよけんかしながら日が暮れる  
宇部市 中 村 三 良

ヒト科とてやがて減びる根なし草  
饒舌な風が命を弄ぶ  
仙台市 小 寺 九

小夜時雨ちよつと歩いてみたくなる  
寒夜ひとり煙草の数が増えてくる  
千葉県 大 川 晚 翠

せっかちに動く歩道を走り出す  
横堀はきれいに刈られお正月  
出雲市 加 藤 スズコ

時雨晴れやつぱり傘を置き忘れ  
もうちよつと背丈くやしい大掃除  
島根県 児 玉 幸 子

大根ののれんが出来て里は冬  
忙しいポケットベルが又さわぐ  
鳥取市 近 藤 秋 星

親に似て子も世渡りの下手な奴  
真実を初めて知った子の日記  
鳥取県 権 代 康 女

登山靴太陽いっぱいあびて干す  
脳味噌をほぐし呆けないようにする

引出しの奥にねむっている日記  
米子市 池尾保子

氏神の石垣 祖父の名が残り

熊本県 岩切康子

楽しさや加減して剪る庭の花

胸上げて見る青天の日本一

出雲市 川島和歌子

仕舞風呂 今日ドラマを振り返り

振り向けば影が寄り添いついて来る

藤井寺市 鴨谷瑠美子

輪を画いたとんび未熟なわたしかも

燃えつきてやがてこの身も曼珠沙華

和歌山県 上岡正直

蟻の列 旗の行方に脇見せず

自尊心 捨て黙々と従いてゆく

豊中市 岸田知香子

暗闇を明るく灯すたこ焼屋

暖冬の異変いつまで続くやら

和歌山市 楠見章子

ためらいをふつ切る赤い靴を買う

終了のゴング味方も敵もない

大和郡山市 榑原慧心

雑兵は言われたままの向きでいる

雑兵に沈黙だけが生きる道

緑内障 世間がかすみ見えかくれ  
泉南市 坂根流水

空をとぶ鳥も嵐のなかで生き

松江市 佐野木みえ

雪の中 健気に咲いた黄水仙

目を閉じて闇夜に香る沈丁花

米子市 服部朗子

培った平和大事にしています

ユニークな法話へ拍手なり響き

岡山市 山磨行子

竿一本器用につかう鈍な人

我れながら勘の鈍さに腹が立ち

大阪市 平井露芳

価格破壊すこし壊して儲けてる

ペットボトル眼がなれ猫が横を抜け

岡山県 土居ひでの

一一一三 過疎に響かず武蔵号

松三日孫が四人になるお洒落

唐津市 岩崎實

生き甲斐に多少の出費多くなり

眼をこすりこすり弁当一つ提げ

有田市 生馬芙美子

朝鏡ちよっとおどけて見るもよし

例えばの話が鈍く届かない

言いつの口の重さを信じよう  
重箱の隅をつついて墓穴掘る  
天理市 飯田昇

年末になると歯痛の悪い癖  
突然のマイク血圧大慌て  
寝屋川市 井上すみれ

女です泣く潮時を決めている  
あとかたもなく忘れてる耐えた日々  
米子市 小塩智加恵

峠越し春一番のふきのとう  
点滴が峠を越してくれました  
兵庫県 中野とよ子

甘く見たバブルの余波がまだ残る  
甘酒に雨宿りする差し向い  
寝屋川市 坂上高栄

井戸の中疲れた女が揺らいでる  
スナックに亡夫自筆のポトル見る  
米子市 永井三津子

禁煙の場所で煙草を売っている  
難聴になって女房いらつかせ  
岸和田市 亀井皎月

退院を待つ日めくりも古くなり  
歯に衣をさせない友に心晴れ  
静岡市 増田扶美

仏壇に完熟を待つ梨りんご  
柚子一つ里の陽だまりあたたかい  
神戸市 向井泰子

明日よりも若いと悟り力湧く  
定年後 小銭ばかりを弄ぶ  
大宮市 新井圭二

みずうみは三橋節子いろに昏れ  
リストラの嵐に狂う七転び  
高槻市 芦田静江

幼児のように銀杏の葉を拾う  
ある日だけ夫と恋人ごっこする  
河内長野市 印藤智子

あなたへの傾斜楔を打ち込まれ  
食卓に揃うどの子も非売品  
柏市 上鈴木春枝

人生暮色 日記に紅葉貼ってみる  
流し台伴せ色に米を磨ぐ  
岡山市 国米きくゑ

天と地の愛の重ね着雪とける  
ものもちのお寺無欲を説いている  
青森県 諏訪明雄

年の瀬に世代交替眼のあたり  
妥協して器に盛った嘘ひとつ  
岡山市 中嶋千恵子

静岡県 中西 雅

よちよちの子をおいかける老いの足  
お互いに孫を気づかう友になり

酒田市 永澤 裕子

南国の育ち吹雪が身を責める  
無住寺の賽銭凍る音をたて

檀原市 西本 保夫

セールスが不思議に出来ない札を張る  
行き止まりの路地が不思議となつかしい

尼崎市 向井 末貞一

あと味の悪い目覚めに雨しきり  
颯爽と一家揃うて踏むペダル

池田市 木村 一笛

義理だけの賀状せっせと書き下ろす  
札束の前で本音が引っかかる

島根県 安部 美恵女

大根を洗う十指はくらしの手  
あたたかい亡母の残した綿入着

米子市 足立 由美子

垣越えるまでは後押しするつもり  
気の和む椅子が窓辺においてある

大阪市 乾 哲静

屋根裏で寝ていたゴツホ苦笑い  
偏差値も知らずに孫をほめそやし

鳥取県 奥谷 彩子

姫鏡笑顔だんだん上手くなる  
囲炉裏から土着の絆温める

鳥取県 藤山 弘子

親友の形見と酒をくみかわし  
草花とやさしく話す散歩道

東大阪市 松山 隆

九紫火星 鶏頭の赤まだ燃える  
暮らし向き優雅にみえて飢えている

和歌山市 森口 美羽

おこらせて本音出るのを待っている  
正直に生きて水増しできずいる

交野市 山川 日出子

鬼笑う来年のこと指切りで  
アナウンサー恵みの雨といい言葉

和歌山市 和田 美寿子

幽霊の団体もある政治界  
婆ちゃんと言われて孫の服を買う

海南省 谷口 義男

差引いて聞く辻褃の合わぬ嘘  
百薬の長と言いつ飲んでいる

岡山県 福原 悦子

画帳持ちひとり充電旅に出る  
自慢する話に心冷えてくる

大阪府 藤森 小雅子  
パニックの後片付けは妻がする  
定年の抜け殻がある帽子掛け

福岡県 本田 忠男  
豆腐一丁 酒は二合のおつき合い  
妻の留守卵焼きから子に習う

岡山県 伏見 すみれ  
天才は要らぬ農継ぐ子が欲しい  
首振って何を憂える秋桜

明石市 小川 酔月  
親の見栄ちらりとみえた七五三  
万札もすぐに小銭に早変わり

鹿児島県 大山 舞鳥影  
筆不精 切手はがきの値を知らぬ  
時間にはうるさい人に待たされる

岡山県 富坂 志重  
生かされて生きて迎える御神幸  
たのしいたのしい出発までの旅支度

唐津市 山口 ふさ子  
今もなお亡母に聞きたき事ばかり  
一期一会 亡師の面影を刻み込む

唐津市 入江 喜久亭  
年の数ほどは食えない雑煮餅  
七草の粥に梅干一つ添え

唐津市 江川 青琴  
妹の生きる苦しみ聞くつらさ  
受話器を取る度「もしや」胸騒ぎ

唐津市 浜本 治幸  
霧囲気が言いたいことを言わせない  
人生の愚痴を聞かせるコップ酒

唐津市 福島 紀一  
枯れ蔓に命つなぐかからす瓜  
大輪の菊未練氣に切り落とす

富田林市 欄 智久  
火を使う人間だから嘘も言う  
病名に触れずに親と子の対話

羽曳野市 川田 晋  
やせねばと思うたらふく食ったあと  
陰口を気にせず派手を着る勇氣

高槻市 傍島 克治  
おなじみの顔顔の終電車  
懲りもせず夢追いつづく宝くじ

姫路市 福島 姫女  
煉瓦みち落葉からころ万歩計  
意気揚々 気になる孫は当り年

川柳大雄賞に風太郎氏 札幌川柳社は第1回の川柳大雄賞  
に柳都川柳社同人の大野風太郎氏を決定した。

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—1月号から

越智一水

一期一会 旅に赤子の手と触れて

藤井高子

旅にいて、他人の赤子の手に触れ、自分の孫のことを話している光景であろう。直弼の茶のことは、一期一会で、この句に堂々とした格調を持たせて、真情美の作品となっている。

お早うのひと声しこり消えてゆき

宮本かりん

そうです。日常生活に大切な「お早う」「お休み」「ありがと」は、簡単な言葉ですが、なかなか言えぬものです。そのひと言で心が温まり、しこりが消えるとは教訓的な句と言えよう。

単身赴任 呑めない父が強くなり

山原昭水

単身赴任も一、二年ならばこそ、五、六年もの単身赴任は、人間を人間として扱わず、

どん底生活に追いやる。大企業の仕組みは、父の人間を変えてしまふ。

働きに出た奥さんが派手になり

嵯峨根保子

夫の収入で不満足なのか、それとも子ばなれの奥さんなのか、とにかく主婦が働きに出だすと、とかく女は人目を引くようになるものです。

ストレスが溜まると鍋が光り出す

村上久美子

さりげない平明な表現で、この句は面白く詠んでいる。ストレスの発散を鍋の底に求める、女性特有の感情がよく出ており、川柳味たっぷり。

風に遊ぶの虫ほどの知恵がない

塩路よしみ

気持ちよさそうに風に遊ぶの虫の光景をとらえ、自分に、みの虫ほどの知恵がないと言いつつ謙遜さながら、この句の魅力、面白い。

ノーベル賞積んどく本がまたふえる

小林一閑

日本中をわかせた、ノーベル賞受賞の大江健三郎の小説の糧はすばらしい。その本を買って積んでおく、結構ではないですか、それで楽しければよいことです。

幸せが切れないように林檎むく

水谷笙子

愛する人をかたわらに、いじらしい女ころの青春賛歌です。幸せいっぱい素晴らしく美しい光景の句です。

年金改悪百まで生きる意地がある

和田和風

時事吟とも言える句。年金改悪は、これからの年金者にはお気の毒です。百まで生きて下さい。庶民の怒りと、叫びを、代表した抵抗の川柳です。

ビール飲む女性 社風を変えてゆく

後藤黎之助

世紀末の世の変わりにはテンポが早い、女性は社会も企業の変革者ですね。上五のビール飲むが、とても気持ちよく面白い句にしている。そろばんの達者な男嫌われる

八木芳水

そろばんの達者など言うのは、この句の場合、計算高い男のことを言うのでしょうか。こういう男性は特に女性から敬遠される。

靴下の穴に気付いたのは他人

古久保和子

会合の時、この句のような人に出くわす。金を貯めている人か、それとも暮らして追われている人なのか想像をたくましくする。

# 路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成六年九月号〜十二月号

路郎賞候補作品

河内天笑

ルス電にして天ぶらを揚げてます 舟渡杏花  
血圧の上がらぬように聞き流す 堀江芳子  
一步引くだけでも視野が広くなる 三宅保州  
神前で結び読経で送る国 寺田 甚一  
別々の歯医者へ通う妻と僕 岩津ようじ  
夫婦とは痒いところへ手が行かぬ 小野克枝  
教会の屋根満月が滑りそう 白石 春嶺  
立秋というのはジョークかも知れぬ 田中 正坊  
しあわせな今を冷凍しておこう 新 正子  
時々は逆立ちをして血を回す 樹本 蔭児  
四季の歌夏は突然終るもの 新家 完司  
油照り一日熱い茶で通す 垂井千寿子  
蛇口から出て来る水よありがと 山口美穂  
鼓笛隊のリズムで秋がやってくる 小島蘭幸  
服買った帽子買ったと他愛なし 奥田みつ子

板尾岳人

花言葉知ってるふりしておこう 西出楓楽  
森を抜く小さな影と連れになる 林 荒介  
少しだけ法を犯して山を越す 小野 克枝  
寂々と女人幻想 灯が揺れる 一戸 ツネ  
台本はあと一章の人生譜 小澤 幸泉  
無器用で火の粉を浴びる男傘 岡本 花匠  
夏バテが一番ひどい夏帽子 舟木与根一  
深くなる眉間の皺に火の匂 大橋 政良  
節高き皺を染めつつ紫蘇を揉み 天正 千梢  
秋桜 不定愁訴を取り除く 津守 柳伸  
木枯らしに私の影を整える 新 正子  
針箱の中に眠っている火種 川島颯云児  
雑兵の皿 枝豆はみんな殻 久保 正剣  
曼珠沙華いつしか母の輪を越え 小池しげお  
見えた日を箸語りだす栗ごはん 堀江 正朗

小池しげお

とべそうでとべない古希の水たまり  
僕が干した洗濯物が乾かない  
天正 千梢  
小島 蘭幸

わがことになれば話は別である 藤解 静風  
美人には真つ白がよいバスタオル 野村京子  
血圧に悪い話がおもしろい 玉置 重人  
消しゴムで消されてしまふのがつらい 池 森子

逢いに行く一番近い橋を行く 吉岡きみえ  
満月の夜までに恋文を書こう 牛尾 緑良  
他人だと思つたことのない切手 林 荒介  
百姓を捨てた子供に送る米 小林 妻子  
使ひ残しのいのちに酒を注いでやる 江原とみお

群れ薄 亡母を隠していませんか 福井桂香  
まだ喧嘩するから夫婦かも知れぬ 竹治ちかし  
自分史を飾る写真がまだ撮れぬ 尼 れいじ  
栗ごはんすべて忘れることにする 神夏磯典子

吉岡美房

押まれて困る何でもない善意 小林 妻子  
権力の中で下絵は出来ている 松下たつみ  
誘惑にころぶ林檎の木の下で 木本 朱夏  
のひらで迷う安定剤一つ 西村 早苗  
ひとひらの呪文となつて蝶は舞う 山本玉恵  
澄んだ空どこにも嘘が隠せない 石谷美恵子  
神様へ届く太鼓をうつつている 江原とみお  
散る花も未だ舞ういのち抱えている 園山多賀子  
忍耐を教えて父の樹が枯れる 小野 克枝

群れ薄 亡母を隠していませんか 福井桂香  
 母という演技続けた背が丸い 石垣 花子  
 見守ってくれてるような丸い月 川崎ひかり  
 友情の証のようにジヨッキ干す 春木圭一郎  
 手の中に記憶を握りしめて秋 安藤寿美子  
 泣きに來た海に夕陽が奇麗すぎ 稲本 凡子

小島 蘭 幸

郵便ポストがある僕だけの岬 林 荒介  
 五年満期生きられたからまた五年

道草をしてると友によく出逢う 丸山よし津  
 煙吐かぬ煙突よつらからう 青戸 田鶴  
 塀を取り払うと覗かなくなった 江原とみお  
 深き瞳の人と聖堂までの坂 新家 完司  
 ゆつくりブランコ 母のおなかにいるような 田中 薫  
 奥田みつ子

猛暑礼賛冷えたビールを飲むときは 春城武庫坊  
 縄電車降りぬ大人がふえてくる 西出 楓楽  
 どんな謠よりも母から聞いたこと 小池しげお  
 あなただけ知ってる笑いもつている 西村 早苗

もしかして一番強いのは鳩か 都倉 求芽  
 散骨の視野いちめんの曼珠沙華 木本 朱夏  
 誰がどう言おうと煙草 日に五本 時広 一路  
 ビオーネよ君も真珠と変りなし 森田 文

川柳塔賞候補作品

宮口 笛生

トータルをすると妻には歯が立たぬ  
 周遊魚のごとく特売場を巡る 田辺 鹿太  
 満ち足りて夫婦の鈴がひびき合ふ 永田 暁風

やる気などないと結構やっている 塩路よしみ  
 一生は後悔ばかり数珠を繰る 野瀬昌子  
 指太になって熟女の仲間入り 八木 芳水  
 窓際で切れなくなっているナイフ 流 奈美子  
 されい好きうち嫁さん捨て上手 大川幸子  
 岡村千鳥  
 老母さんに安らぎがあるお灯明 高野 宵草  
 使い途まだあるらしい呼びに来る 前たもつ  
 森 茜  
 素直とも無知とも女ついでくる 宇野照代  
 わる者になっておくよと言う笑顔 斎藤 房子  
 生き下手でいつも転んではかりいる 朝倉 大柏

悪人でないけど頼りにはならず 富山ルイ子  
 だまされてみよつか女ふと揺れる

川島 颯云児

風は饞舌照る日曇る日多彩なり 流 奈美子  
 てにをはの一字が足らぬ倦怠期 塩路よしみ  
 娘の自立待つ楽しみと待つ不安 井崎ミサ子

一晴一雨二つ合せて夫婦かな 大峠 可動  
 窓際で切れなくなっているナイフ 大川幸子  
 使い途まだあるらしい呼びに来る 前たもつ  
 甘い台詞で風はおんなの火を煽る 岡村千鳥  
 旅は楽し私に帰る家がある 長浜 澄子  
 諸行無常明日の約束などしない 渡辺 南奉  
 愛情が冷めると価値のない指輪 遠山 夏生  
 返り討ちに会うかも知れぬ爪を研ぐ 芦田 絢子  
 高島 五月  
 熟年の匂袋がよくしゃべる 牧洲富貴子  
 巻き戻す風は忘れの頃にくる ジョークだろうが私には痛い刺 森安夢之助  
 泣く涙あるうち釘を打っておく 朝倉 大柏

榎本 吐来

故郷の荷の紐のかたさは老父元氣 高野宵草  
 お若いと誉められたのは夏帽子 勢理客トミ子  
 この辺で泣けば私の勝ちになる 長浜 澄子  
 無料奉仕が人間くさくなっていく 鶴久百万両  
 商魂の視線をうけているモデル 上鈴木春枝  
 片言の孫にペロリと丸められ 飯田 昇  
 眉は母 目は父に似る気の配り 木下 道子  
 人並に帰りを急ぎ独り住む 佐野木みえ  
 生意気な奴だ頼りになる奴だ 朝倉 大柏  
 善人の句 子犬がついてくる 水谷 箆子  
 寺の寄付 法話の中で匂わせる 増田 扶美  
 インターンの教材となる検診日 傍島 克治

まだ飲める一人暮しのバロメーター

娘も二十歳 叱る言葉に綾がつく 榊原慧心  
石に問ひ石に問われる童安寺 大河未佐子

### 福本英子

晴れた日もどしゃ降りもある倦怠期

堀 くに子

何遍も別れ話をした煙草

妹背尽呂久

米粒をひろって姑の独り言

西井つや子

笑わない一人が怖くなってくる

朝倉 大柏

岸の向うの妻に見せたい目玉焼

永田 暁風

愚痴縦に聞き流しての俄雨

永澤 裕子

丁寧な夫の小言かみ砕く

杉山 精子

臆病なおんな目刺を食べている

島 ひかる

又の日は無いかも知れぬ障子張り

飯西ミサヲ

都合よく曲げたニュースは内地向け

川原 章久

病窓の夜景遠くへ来たもんだ

塩路よしみ

いい顔をするから後がややこしい

藤井高子

それぞれが内緒で捨てたゴミの山

山内芳江

一日の終りプランコいである

高橋 たみ

来た時からかえるかえると忙しない

村上ミツ子

### 小林 由多香

肩書が消えると猫も寄りつかぬ

森安夢之助

ちぎり絵に心の鬱を張りつける

奥谷 彩子

どの土地に住んでも嫌な人が居る 永澤裕子  
会社でも家でも尻を叩かれる 田辺 鹿太  
少年の瞳が許さない不公平 上鈴木春枝  
竹馬で遊んだ頃は塾がない 山原 昭水  
どこにでもある幸せをつかめない 市丸晴子  
大根の白さよ平和続いている 流 奈美子  
又かいた母が笑って工面する 尾宮 弘治  
花はそう思っていない花言葉 尾崎 黄紅  
人並に帰りを急ぎ独り住む 佐野木みえ  
職場での堪忍袋家で開け 高野 宵草  
簡単に明日の約束してしまふ 渡辺 南奉  
羊羹を厚目に切るも愛だらう 石川 勝  
病院に行く時だけの外出着 高尾 京

## 岡山三光川柳会創立 25周年記念川柳大会

とき 3月12日(日)午前10時開場

ところ 西川アイプラザ(岡山市幸町)

兼題と選者(各題2句・11時半締切)

三 西川けんじ 草 小松原爽介

額 石部 明 広い 藤本静港子

未来 岸下 吉秋 女 森中恵美子

多 児玉 怡子 部屋 八木 千代

会費 2000円(軽食・参加賞)

呈賞 各題特選、準特選句

懇親会 会費5000円(午後5時)

連絡先 〒701-13 岡山市吉備津1016

西川 けんじ

## 川柳展望20周年大会

### 第8回火の木賞発表

とき 4月30日(日)午後1時受付

ところ 新神戸オリエンタルホテル10F

(神戸市中央区北野1丁目)

参加費 15,000円(正餐費含む)

◎申込制、事前に「参加」申込を

新子賞・火の木賞発表

選句発表(各2句・事前投句制)

顔 安西まさる 雑詠 天根 夢草

男 森崎 大青 雑詠 情野 千里

母 檜崎 進弘 雑詠 八坂 俊生

立つ 新家 完司 雑詠 時実 新子

◎秀吟呈賞 欠席投句拝辞

パネルディスカッション

(テーマ/いい川柳とは)

基調講演 浅野良雄・近藤ゆかり

パネラー 矢島玖美子・石部 明

北川弘子・井上由紀子

コメンテーター 時実新子

パーティー(午後6時~8時予定)

主催 川柳展望社

# 沙湖抄

## 小出智子選

すっかりとルビ振っておく現在地  
頼りなくころがっている夜のみかん  
人間の芯を濡らしに時雨くる

和歌山市 木本 朱夏

居酒屋でしぐれの濡れを干している  
街を背にすればみごとな夕映えよ

鳥取県 江原とみお

真夜中の月は酸素を吐いている  
公民館の時計合うてた事がない

鳥取県 新家 完司

一枚の紙に還って死んだ鶴  
追い風が助けてくれた坂だった

松原市 小池しげお

うらやむな俺は週休七日制  
きつちりと部屋かたづけて風邪をひく

宝塚市 永田 暁風

腰かけてほっこりとする古い椅子  
狂わねば地獄狂えばなお地獄

米子市 林 荒介

波底で気合いを一つかけ直す  
ゆびきりげんまん曲があったことが大嫌い

横浜市 菱田 満秋

ふっさきればのひらの雪過去の雪  
虚構の海を渡る ポケットの小銭鳴らして

寝屋川市 江口 度

お喋りな手帳は連れて歩かれぬ  
師走もなかなばあぶない街を抜けて来る

米子市 澤田 千春

鳥取県 土橋はるお

鳥取県 土橋はるお

尻崎市 春城 年代

尻崎市 春城 年代

あの頃の豆腐はおいしかったよね  
憧憬の人目札を下さった  
つかまえてなければふっと消える幸  
私の中にも春を待つつぼみ

和歌山市 榎原 公子  
寝屋川市 森 西

ついて来た仔犬が消えた雪の街  
子を持ってみれば分かる母の文  
どうなるかわからぬ頃の子が楽し  
白足袋の白よ此の世は生き難し

和泉市 中川 楓  
羽曳野市 芦田 絢子  
青森県 田中 叶

飾らない言葉で挽いでくれた柿  
かけ足にも忍び足にも合うた靴  
でこぼこの道を忘れていない靴  
旅がしたくて黄門さまの弟子になる

河内長野市 植村 喜代  
羽曳野市 吉川 寿美  
和歌山市 古久保和子

水鏡老いの深さが浮いている  
縄文に生きていたよな説ふんぶん  
ものもらい暮れに出るからややこしい  
幸せになる正月の餅食って

堺市 宮本かりん  
姫路市 大原 葉香  
鳥取県 林 露枝  
青森市 漆戸凡々子

楽な方へよっていきたい落葉たち  
この辺でそろそろ面をはずさねば  
結納のあと留守がちのかぐや姫  
バス停の朝は目札まで進み

鳥取県 土橋 螢  
米子市 青戸 田鶴  
西宮市 西口いわゑ  
堺市 近藤 豊子

休耕田の田圃は悪夢見たようだ  
土壇場の母は百鬼と斬り結ぶ  
新しい手帳へ移す住所録  
病窓にすっぽり入る城の月

米子市 林 瑞枝  
綾部市 藤田 芳郎  
鳥取県 西原 艶子  
和歌山県 杉山 精子

いろはから出直すペンを立てている  
無事解決わたしが折れただけのこと

高槻市 川島 云児

裸婦の絵にまだ抵抗をする私  
 また亡母の轍にはまる土踏まず  
 雷鳥に乗ると心が落ちつくね  
 仲人を百組したよ天高し  
 煩惱を払う睡眠剤をのむ  
 神さまにいたわられてるぬくい冬  
 晩秋を満喫いもが焼けている  
 ルワンダの子等は地獄を見に生まれ  
 赤ちゃんのお尻の青がまぶしくて  
 水郷の槽音が憂さを忘れさせ  
 人間の勝手は鬼も可笑しから  
 車座の本音を聞いた古畳  
 コーヒーも紅茶も飽きた春よ来い  
 輪の中で東京弁が邪魔になる  
 仕込まれた掟が嫁に伝わらぬ  
 女房に投げてはならぬストライク  
 あれもこれも風が奪っていく余生  
 真実は劇薬そつとしておこ  
 お世辞がとでも上手な弥次郎兵衛  
 しあわせの形に干してある布団  
 母ゆずりの笑顔持たせて嫁がせる  
 再会の子感ジリジリ秋刀魚焼く  
 歳月や逢う度母に似て姉妹  
 なんでも効く薬なんにも効かぬとか  
 翔んでゆくひとの踏み台だったらし  
 惜しみなく晩秋の日々刻むなり

米子市 木村富美子  
 名古屋市 藤井 高子  
 大阪市 榎本 露見  
 今治市 越智 一水  
 青森市 工藤 甲吉  
 豊中市 安藤寿美子  
 兵庫県 遠山 可住  
 今治市 村上久美子  
 京都市 松川 杜的  
 阪南市 深日白光子  
 大阪市 町田 達子  
 福岡市 森 志げる  
 米子市 小西 雄々  
 鳥取市 武田 帆雀  
 寝屋川市 岸野あやめ  
 鳥取市 近藤 秋星  
 尼崎市 春城武庫坊  
 和歌山市 桜井 千秀  
 大阪市 藤森小雅子  
 海南市 三宅 保州  
 米子市 田中 亜弥  
 東京都 山口 新子  
 和歌山市 宮口 克子  
 大阪市 西出 楓楽  
 大阪市 渡部さと美  
 八尾市 高橋 夕花

イエスノー言わぬが花の京ことば  
 少しずつ結び目ずれてゆく曆  
 穏やかに相槌を打つ他所の火事  
 冬の絵にまつ赤なバラを描き足そう  
 椅子低くして老人を遊ばせる  
 気遣いをうるさがられている尺度  
 子よ孫よそのうち世話になりますよ  
 メダカと知恵くらべしている保育園  
 地吹雪も肥やしにしてるりんごっ子  
 父母の歳それぞれ超えて姉弟  
 非常口確かめ宿の茶を吸る  
 借りてきた知恵で継ぎ目がずれてくる  
 冬曙 どっこい俺は生きている  
 嫁姑仲良くしても嫁姑  
 境杭無縁のトンボ来て止まり  
 年末を無事のりきってお目出とう  
 つかみそこねてからは転んでばかりいる  
 方便の嘘も奇麗につきなはれ  
 猛進はあかんと悟る年女  
 この世にも極楽じつと湯に浸る  
 定年で妻の本音を聞かされる  
 行き詰まり昔の知恵を借りに行く  
 早わざで痒いところに手が届く  
 仏達時々夢に出てくれる  
 胸底の音符つなげば子守唄  
 たおやかにしたたかに生き十二月

藤井寺市 中島 志洋  
 米子市 光井 玲子  
 米子市 新 正子  
 香川県 川崎ひかり  
 米子市 政岡日枝子  
 堺市 小西 小雪  
 八尾市 宮崎シマ子  
 島根県 岩田 三和  
 弘前市 中山 雅城  
 豊中市 田中 正坊  
 宝塚市 丸山よし津  
 倉吉市 野中 御前  
 守口市 森川まさお  
 姫路市 小林 保水  
 岡山県 荻野鮫虎狼  
 鳥取県 鈴木 公弘  
 吹田市 山本希久子  
 大阪市 川原 章久  
 大阪市 板東 倫子  
 和歌山市 山田 高夫  
 羽曳野市 酒井 一壺  
 鳥取県 山内 芳江  
 米子市 服部 朗子  
 米子市 石垣 花子  
 和歌山 野々 圭子  
 西宮市 山本 義子

ストレスが思考回路をショートさせず  
 絵ごころへ蕈茸屋根のつるし柿  
 世をすねた俺によく似た崖の松  
 このままで黄泉へゆきたいいい湯舟  
 筋通す方が分らず屋にされる  
 鶯の子を鷹にさせたい塾えらび  
 逃げ足の早い幸せ抱いている  
 据え膳の味を覚えた妻の旅  
 只の男になるとこの世がよく見える  
 わたくしも此処にいますと叫ばねば  
 幸せな音だけ聞いていたい耳  
 嫁にゆく娘が盗む隠し味  
 聞く度に脚色されている話  
 波柿の食べ頃雪が来て知らせ  
 嫁して十年故郷の訛りも消えました  
 引き算の答が溜まる十二月  
 太陽と結んで笑顔たやさない  
 故里はわたしの座る場所がない  
 冬の鹿遠く見つめるものは何  
 山茶花に慰められる冬の庭  
 締めるところは締めて収支合わして  
 口のかたい方へ相談持つてゆく  
 もくせいの残り香未だ三回忌  
 見上げれば空いっぱい青い海  
 流されつつただで終るまじ  
 秋深む燃え尽きぬま黄昏て

和歌山市 山口三千子  
 大阪市 津守 柳伸  
 鳥取県 橋本 孝原  
 出雲市 板垣 夢酔  
 箕面市 岩津ようじ  
 鹿児島県 大山舞鳥影  
 鳥取市 小谷美ツ千  
 鳥取県 上田 俊路  
 八尾市 片上 英一  
 藤井寺市 高田美代子  
 東大阪市 今岡 真人  
 黒石市 相馬 一花  
 静岡市 小木 久子  
 鳥取市 杉本 孝男  
 倉吉市 野口 節子  
 岡山県 矢内寿恵子  
 米子市 足立由美子  
 大阪市 稲本 凡子  
 弘前市 村田 善保  
 岸和田市 三輪 通彦  
 大阪市 日阪 秋子  
 今治市 塩路よしみ  
 堺市 山本 半銭  
 香川県 田中なみ子  
 大阪市 神夏磯典子  
 大阪市 本間満津子

悪友が先に死ぬとは許されぬ  
 カレンダーあと一枚のスケジュール  
 故里の山が癒してくれた傷  
 平常心とり戻しては風の街  
 その日から輝いている薬指  
 日に三度大事にしてるティータム  
 外人墓地ふる里に向け建つクルス  
 期待したあつちの水も苦かった  
 沈黙が熱燭一本つけて解け  
 いのちの電話いっしょになって泣いている  
 葎の花思い出ばかりかぞえます  
 老いてな食欲の一字が付き纏い  
 無視されて身を持て余すアドバルーン  
 泥水をあびて大人になっていく  
 長靴を履いて舞台のなかにいる  
 じっと見る手の裏表亡母に似る  
 栗饅頭みるとジャンケンしたくなる  
 河内長野市 橋本 弘美  
 出雲市 竹治ちかし  
 東大阪市 松山 隆  
 香川県 山地マツエ  
 和歌山県 福井 桂香  
 鳥取県 西川 和子  
 松江市 松浦登志子  
 札幌市 三浦 強一  
 鳥取県 石谷美恵子  
 唐津市 山門 幸夫  
 和歌山市 岩本美智子  
 岡山県 清水悠貴女  
 和歌山県 中後 清史  
 和歌山市 玉置 当代  
 鳥取市 森口 美羽  
 鳥取県 西浦 小鹿  
 神戸市 向井 泰子

朱夏さんの句、自分の存在を自身に言い聞かせながら歩いている。そして冬の夜を独り生きる事もまた現実。「夜のみかん」が印象的な作者の姿である。とみおさんの句、寂しいと言わず寂寥感を表現されて、味わいのあるものにされた。この作者でなくてはの句と思う。完司さんの句、「街を背にすれば」にこの句への思い入れがある。人の生きざまなどは見ずにということである。しげおさんの句、公民館に集まるにはなかなか時間厳守とはいかない。だから時計は正確でなくても誰も直す人もいない。穿ち利いた一句、曉風さんの句、折紙の句はよく見掛けるがこの作品はそれとは違う。この句を読んで人もまたとの思いが深い。

# 川柳とメルヘン

川柳二ぼれ話

田中正坊

田口麦彦著『川柳技法入門』の中で比喩の技法の一つに「諷諭（アレゴリー）」を挙げて次のように解説している。「寓喩ともいいます。現代の複雑にからみ合った社会現象を伝達するために、他の事物や歴史上の事件、物語などにたとえて表現する方法です」。

この中の「物語」ということに私は注目した。物語の中には当然、童話・寓話も含まれる訳で、次の句が例示されている。

グム出来て桃が流れて来ない川 清 芳  
人脈の端で黍団子を貰う まごし

二句とも偶然、日本童話のヒーローである桃太郎をなぞらえている。麦彦氏の句にも、

弱い鬼はかりみつけて鬼退治

があり、何冊かの句集から拾っただけでも、

幻想や桃の実 河をさかのぼる 俊 平

五十九歳 これから川へ洗濯に 智 子

桃太郎 鬼の涙を見て帰り 可 香

など、次々と出てくる。

さて、日本の古典的童話（昔話）と言うとこの桃太郎を筆頭に、浦島太郎・さるかに合戦・一寸法師・舌切雀・花咲爺・竹取物語・羽衣天女・夕鶴・檜山（葉老伝説）あたりがベスト10に入るのではないだろうか。ついでに外国の童話ではイソップ、グリムが有名だが、児童文学者の脇明子さんが子どもたちが「印象に残っているもの」としてアンケータをとったところ、マツチ売りの少女・人魚姫・シンデレラ・小公女・幸福の王子・フランダースの犬が多かったという。

戦後生れの世代の童話についての意識は、子や孫たちの生活から推し測るしかないが、彼らは彼らなりに絵本やアニメをとおしてメルヘンの世界を愛しているよつである。しかし、それは耳から目から童話漬けで育った私たちの世代の比ではない。だからその世代がつくる川柳はとりたてて「諷諭」を意識せずとも、内外の童話にからむ表現がボンボンと出てくるのだと思う。作者には無断で、アトランダムに諸家の作品を紹介しよう。

雪おんな死ぬ約束に梅が咲き 大 雄  
上ばかり見てつかまらぬ青い鳥 東洋樹  
草臥れて浦島太郎の夢をみる 智 子  
豆の木が伸びて空転する童話 良 子

パンドラの箱一つずつ持つ師走 竹路  
狸にも誤算があった泥の舟 由多香  
ラブホテル童宮よりも美しく 三 窓  
檜山へ行つてしまった万歩計 沢 心  
猿蟹の仲まとめたたいべんを探る 翠 公  
羽衣を脱いであなたの虜です たす子  
例によってまとまらぬ一編となつたが、童話の効用を適確に説いた一文（出典不明）を引用してワザビに代えたい。「童話とは、子どもが一人立ちしていくためにたどる困難に満ちた心の旅を描いたものであり、童話ほど人間の内的な問題について教え、社会の形態とは関係なしに困難な立場から抜け出る解決法を示してくれるものはない」。実は私も大の童話ファンで、メルヘン川柳をたくさん作っており、その中から十句を自選してみた。

略奪のルートツたれば桃太郎  
今年こそ亀に負けたくない兎  
実直な猿が植えてる柿の種  
乙姫の未練を秘めた玉手箱  
主義のない雀で踊つてばかりいる  
夏の夜の夢で天女とたわむれる  
笑話だと思ふ竹取物語  
アラジンの国からやってきた刺客  
一日はいちにち蟻とキリギリス  
苦勞した話はしないシンデレラ

## 尚香のむ

## 西出楓楽選

進化するきざしか男性化粧品

すこし風通しの悪いしあわせだ

くたびれた鬼がのど鉛探してる

雪乱舞 女の吐息 猫の耳

生きやすいようにソロバン弾く指

叱られた言葉に縛りたい思い

弱虫も畳一帖使っている

初対面つつしみ深く飲んで

晩景に描き足しておく赤いスカーフ

走っても走らなくても持ち時間

福寿草 端役で終ることはない

花言葉響く花束やってくる

風の音聞いてひとりりを持って余す

オカリナの音色のように過せたら

子が抜けた心と花が通じ合う

心急ぐ師走の空はあつげらん

真剣に生きているかと土踏まず

水をのむかたちで敵をあざむけり

座らせて大きくなった子を叱る

米子市 新 正子

堺市 横田マリ子

寝屋川市 岸野あやめ

弘前市 佐治千加子

和歌山市 堀畑 靖子

寝屋川市 太田とし子

米子市 政岡日枝子

西宮市 西口いわゑ

倉吉市 淡路ゆり子

熊本市 永田 俊子

出雲市 石倉美佐子

鳥取市 西原 艶子

和歌山市 玉置 当代

大阪市 町田 達子

大阪市 三浦千津子

青森県 福士 トキ

寝屋川市 籠島 恵子

岡山県 山本 玉恵

東大阪市 指宿千枝子

散りぎわの花の笑顔に気をゆるす

約束のその日が過ぎる音たてて

裏口を開いてくれていた情け

それぞれの短所へ母のサジ加減

又聞きの前じ薬を火に掛ける

陰口がきこえて風邪も快復に

目の中に入れんばかりの犬を抱き

あの窓に今日も灯がともるよう

老境と気付いた葦のひとりごと

嬉しい日花屋へ足がふと止まり

わたしの中の踏切がしきり鳴る

カスミ草と薔薇を比べることはない

忘却や川の流れば早すぎる

追い風の強さは叱咤激励か

細々と明日へ渡る縄をなう

止めどなく山茶花が散る風邪三日

どの彩を足しても秋の絵がさむい

告知聞く過去と未来が入り乱れ

お互いのおもいを入れて違い棚

橋の向うに母の思いを置いてくる

目隠しの柵で守るか小さい俵

腰痛に不気味な冬のきざしして

冬枯れの山といっしょに耐えている

明日になったらさっさといい知恵出るだろう

なつかしく心の線路走り出す

米子市 野坂 なみ

富田林市 片岡智恵子

米子市 石垣 花子

鳥取県 石谷美恵子

和歌山市 古久保和子

守口市 結城 君子

唐津市 浜本 ちよ

西宮市 秋元 てる

名古屋 藤井 高子

鳥取県 小西五十鈴

八尾市 高橋 夕花

藤井寺市 高田美代子

東京都 山口 新子

和歌山市 宮口 克子

西宮市 奥田みつ子

西宮市 牧瀬富喜子

和歌山市 木本 朱夏

吹田市 井上 照子

米子市 白根 ふみ

和歌山市 岩本美智子

米子市 林 瑞枝

尼崎市 春城 年代

鳥根県 松本 文子

羽曳野市 芦田 絢子

寝屋川市 宮崎 菜月

冬ばらの泣き聞いたテイータイム

太らない通帳ひとつ抱いて冬

淋しい耳に子守歌など聴かせよう

ときどきは赤いドレスで火をくぐる

辛抱で摺んだ藁のあたたかさ

雪が舞うおつうが戻るかもしれぬ

逆回りしない時計にたよりすぎた

あやとりの紐ではころぶ花いちもんめ

そろそろと身辺整理など思う

ハードルの向こうに見える青い芝

結ぶためきれいな糸を編んでいる

厄年の賽銭気前よく入れる

流れ矢が垣根やぶつて飛んでくる

平然と億の言葉に聞きなれる

肩書きが家の中まで入り込み

舌もつれとても二枚の舌持てぬ

あきらめてあつけらかんとひとりぼち

こだわった分だけ世間せまくなる

壺いっぱいの花を仏さんと二人

この秋は香水変えただけのこと

疎まれていびつになった煙草の輪

攻める手が無口な人に見つからず  
陽の当たる場所へと椅子を持ち歩く  
空気冷えてピリピリ予感当たりそう  
木枯しや心の隅の冬支度

松江市 佐野木みえ

大阪市 日阪 秋子

和歌山市 田中 輝子

八尾市 宮西 弥生

倉敷市 小野 克枝

茨木市 堀 良江

米子市 中井 ゆき

米子市 光井 玲子

和歌山市 田中 みね

鳥取県 羽津川公乃

米子市 茂理 高代

芦屋市 黒田 能子

米子市 堀江 美月

豊中市 辻川 慶子

東京都 清原 悦子

出雲市 園山多賀子

大阪市 津守 柳伸

香川県 川崎ひかり

豊中市 安藤寿美子

弘前市 肥後和香子

和歌山市 山根めぐみ

大阪市 神夏磯典子  
米子市 足立由美子  
大阪市 渡部さと美  
貝塚市 池田寿美子

鏡台の椅子を退屈させている

大空に描きつづけます私の絵

美容院 心バサバサ切ってくれ

イニシャルが心の布に綴じてある

未来図を占う花はまだ白い

縁なしの眼鏡がくもる自己主張

派手に着て心のすき間埋めておく

与えられた場所で利口に生きている

肩書きが賞味期限を連れて行き

朝市の長靴に太い力がある

掃り道もうたよらぬと決めました

悪知恵をくれる他人を信じ過ぎ

腕白のおとなしいのはおねだりか

陣痛の一息毎に母になる

棚にある箱書きの字に母が居る

米子市 寺沢みどり

米子市 鹿島 蘭

堺市 谷平まさこ

松江市 安食 友子

倉吉市 野中 御前

鳥取県 土橋 睦子

米子市 青戸 田鶴

宝塚市 丸山よし津

愛媛県 久保 良子

和歌山県 小倉 アサ

鳥取県 さえきやえ

河内長野市 植村 喜代

大阪市 松尾柳右子

寝屋川市 坂上 高栄

米子市 服部 朗子

一句目——とかく女性は、物の見方が狭いとのもそしりを受けがちな  
である。男性化粧品への痛烈な皮肉を、このようにうまくラッピン  
グした言い回しは見事。二句目——作家の曾野綾子さんが「それ  
が壊れる時を思うと、幸せであるとか不安で仕方がない」と言っ  
ていた。すこし風通しの悪い「幸せ、とは絶妙な表現である。三  
句目——この句にはチャップリンの喜劇と相通じるペーソスが感じ  
られる。大笑いしていたら、いつの間にか悲しくなっている。  
「のど飴」はうまい見つけ。四句目——一見、支離滅裂なのに、不  
思議な迫力で読む者に迫ってくる。作者の鋭い感性のなせるわざ、  
としか言いようがない。

鈍  
い

島崎富士子選



鈍い奴いわれてほんとかと思う  
鈍行の旅の土産は温い風  
ツーカーといかぬ一人に皆いらち  
朝を踏む夫婦の鈍い万歩計  
気疲れをしない鈍さでうまが合う  
あまりにも鈍くて打てぬ冬の蠅  
対応が鈍くて後手になる役所  
鈍刀も錆びないように研いでます  
対応の鈍さにふえているいじめ  
コヒーへ鈍い男の顔が浮く  
鈍な日のグルマ転んだままでいる  
鈍行でアドリブだらけの旅をする  
鈍い音やっぱり玉子割れている  
鈍い男と見るタイヤの首飾り  
あの時が初恋だったと今気付き  
好きだからすねているのに気がつかぬ  
鈍いのもいるので丸い和が出来る  
六感の鈍い男がついてくる  
輪の中で少し鈍い母で居る  
権力の中で鈍っていく誠意  
鈍いのがデートのそばを離れない  
鈍いなあ彼女あんたを好きだった

忠雄  
ミツ子  
洋  
久仁村  
隆  
佳雲  
通彦  
黎之助  
狸村  
よしみ  
美代子  
みさを  
智加恵  
時弘  
大柏  
圭一郎  
南奉  
蝋  
シマ子  
あすき  
良子  
まさこ

若者が笑うしばらくして笑う  
こんなにも鈍い刀で誰を切る  
鈍そうにみえた男の切り返し  
リハビリの鈍い動きにある希望  
涙顔 俺の闘志を鈍らせる  
謎かけてかけてあなたを待ってます  
反応は鈍いがぼちぼちには燃える  
履歴書に鈍さの事は書いてない  
釣り書きは打たれ強いと書いておく  
父の樹は鈍い日差しも受けて立つ  
反応の鈍さ気遣う注射針  
鈍いのもよかった今も生きている  
鈍い子のひらめきを待つ母ごろ  
欲いくつ捨てて歩みが鈍くなる  
反応は鈍いが彼は休火山  
佳  
安らかな妻の寝息も震度三  
父母いない故郷の噂に鈍くなる  
良心の鈍い痛みは何だろう  
花ことは鈍には無駄なことでした  
鉛筆の鈍さと午後の雨を聴く  
人  
言い勝って鈍い痛みを抱いて寝る  
地  
鈍い振りしておく好かん人だから  
天  
愚鈍だと言われる父の手が温い  
軸  
鈍そうな顔が水面下で動く

可代  
高代  
晋  
剛治  
克治  
ただし  
隆風  
玉恵  
芳郎  
富喜子  
白光子  
哲静  
サワ子  
めぐみ  
正子  
あすま  
京子  
倫子  
明水  
たす子  
彩子  
保州  
青枝鉄治

若い日のテープを妻に握られる  
どん尻もテープ切らせている配慮  
テープ巻き戻しかえらぬ愛思う  
テープ切るアンカーという果報者  
決勝のテープを切った若かった  
見習いの指に食いつくセロテープ  
極秘テープ夫が隠していたボルノ  
弁護士が四十九日に出すテープ  
偉い人のテープカットで揃わない  
紙テープ愛をつなぐに脆すぎる  
留守電のテープの母に無沙汰わび  
セロテープほどの恋なら片思い  
巻き戻し出来ぬテープに人生語  
お勤めはテープお住職さんハワイとか  
エンドレステープで習う英会話  
テープとは違う本場の英会話  
苦しみをとこめておくテープ貼る  
愛蔵のビデオに生きているひばり  
片言の子のおしゃべり待つテープ  
団地雀の口に貼りたいガムテープ  
ユージンのテープ流して乳しぼり  
擦り切れたテープに恩師の声がある

旋風  
正雄  
希久子  
勝巳  
明水  
サワ子  
虹汀  
満秋  
日枝子  
圭一  
夢酔  
寿恵子  
あやめ  
通彦  
艶子  
源一  
春枝  
良子  
杜的

テープ  
藤解静風選



隙間風 防いでくれたセロテープ

やさいものテープ流れるビルの午後

琴の音のテープ流れて野点席

ご詠歌をテープでならう遍路バス

乱れ飛ぶテープを掃除する係り

テープ切る夢は捨てない車椅子

土下座さすテープひそかに携える

正座して証拠のテープ聞かされる

テープカット主役はいつも隅に居る

嘘と本音 両面テープ利用する

宴会のビデオ消したいところがある

明日帰る旅大げさにテープ切る

テープカット悲願村長さんが切る

テープまだ遠し馬齢を重ねつつ

ビデオ撮り意識しながら切るテープ

住

セロテープでとじるくらの嘘は持つ

テープ切る乳房に覇者の息づかい

遺言のテープ乾いた耳で聞く

出漁のテープはどこか物悲し

完走のテープは妻の手に託す

人

ひたすらに生きてテープのないゴール

セロテープ秘すべきことは秘しておく

地

咳払いばかり入っているテープ 小池しげお

天

玉音のテープに哭いた終戦忌

晋

新造

よし津

佳雲

南奉

京子

宵明

芳郎

たもつ

とし子

典洋

権悟

可住

一花

たず子

正剣

俊路

次男

正子

てれる

江原とみお選



肩書がついててれくさがる名刺

てれ隠し怒鳴ってばかりいる親爺

てれるからお酒に染めているのです

照れ隠し派手に転んですましている

まだ先を自指す王者のてれ笑い

てれながら君を大事にすると言っ

照れ隠し思わずピエロになっている

お世辞にもてれて正直者らしい

てれながらちよっぴり心揺れている

ふと我にかえっててれることばかり

まだ照れる妻で鮮度が少しある

照れ隠し細い眉毛を太くする

顔出して少しててれる茗荷の子

酒の気が抜けるとてれる太郎冠者

瞳と目が合うとこっちの方がてれる

住

若さっていいなと月もてれている

てれたのかグラスのピッチ速くなる

てれる度男がすこしずつ錆びる

てれているのは向日葵の絵の方だ

照れるなあきんきらさんの霊柩車

人

正論を言う善人が照れている

木枯らしや照れている暇などはない

地

てれくさい顔の羅漢も一人居る 松川杜の

天

天に恥じぬことをしててれている

晋

愛論

夕子

剛治

典子

さち子

ミツ子

満秋

めぐみ

美代子

南奉

雅城

伊津志

寿恵子

螢

芳郎

舞鳥影

雄々

日枝子

保州

ちかし

公弘

ちかし

公弘

公弘

公弘

公弘

公弘

# 初歩教室

題一喜ぶ

吉岡美房

喜ぶ(喜び)という感情を表わすよつな題の場合、喜ぶという文字を入れなくても、喜びを表現する句にすることは、割合しやすいよつです。今回の投句の中でも、他の題に比較してかなり多く見られました。題を入れた句と題を入れない句と、どちらがよいかは断定しかねますが、題を入れないで、題をびつたり捉えた句が出来たときは、また一つの大きなよろこびです。これに挑戦されるのも、作句上のいい勉強になるのではないかと思ひます。

それでは添削句から発表します。

喜びが数多あれよと初詣

(喜びが一杯ほしい初詣)

喜びが続いて財布愚痴が出る

(喜びが続いて財布息が切れ)

喜びの何一つない一人者

(きつと来る喜び待つて独り耐え)

りつえ

三重

美寿子

喜びをじまんのようにつ話かけ

(喜びがいつか自慢となる話)

喜びを体で犬がお出迎え

(全身でよろこぶ犬に迎えられ)

沸沸と過去の喜びアルバムに

(よろこびの過去アルバムに詰つてる)

喜んだ賞与明日は羽が生え

(喜んだ賞与に羽根が生えていた)

つづがなく昏れる喜び酒の味

(今日も無事よろこぶ酒を噛みしめる)

喜びならいくつも入る壺を持つ

(喜びを詰めとく壺を持つている)

第九歌つて歡喜する車椅子

(第九合唱歡喜の中の車椅子)

喜ぶ顔を見たくて今日もボランティア

(喜んでもらえる今日もボランティア)

そばに居るだけで病む父喜々とする

(そばに居るだけで喜び父看とる)

受けとめる母は喜び倍に聞き

(喜びの電話は母が受けとめる)

喜んだ亡母の笑顔がまぼろしに

(まぼろしの亡母によるこび告げて嫁き)

最高の喜び半分はベソをかき

(喜んでくれている母は泣いている)

豊作の喜び届く宅急便

(豊作の喜び届く母の愛)

ますみ

高栄

ツネ

志華子

隆

鐘造

強一

子

方子

友子

八重子

志重

トミエ

慰めの言葉喜ぶ親心

(一言でこんな喜ぶ母となり)

喜ばすこと生きがいの母でいる

(生き甲斐は人よろこばす母である)

亡き父母を喜ばせすに悔残る

(喜ばすほどの事なく亡母送る)

健やかにやや惚けたる母在す

(よろこびは元気な母の在すこと)

土産買つ孫へ喜び品を選ぶ

(おみやげは孫の喜び物ばかり)

クリスマス喜ぶ孫の遠い顔

(クリスマス孫よろこばす策を練る)

お年玉喜ぶ孫が九人居る

(お年玉よろこぶ孫に囲まれる)

早や師走孫は喜び暦見る

(十一月孫よろこびの日を数え)

年金で孫の喜び顔を見に

(年金で孫喜ばすおもちゃ選る)

学習塾親が喜ぶから通つ

(熱心に親よろこばす塾通ひ)

あちこちに喜び撒いて子の歩む

(喜びをよちよち歩き撒き散らす)

巨体でも喜び妻はあどけない

(巨体だが喜び妻のあどけなき)

全身で生きる喜びのみじの手

(全身で生きる喜び呱呱の声)

義男

美羽

ふゆ子

圃幸子

孝男

姫女

タミ

郁子

品子

まさ子

旭

三津子

君枝

喜んで派手に掃除機かけまくる  
 (喜ぶと派手に掃除機かける妻)  
 義子  
 優しさを喜ぶ日々のあるやこれ  
 (喜びの日々を優しい子に貰う)  
 彩子  
 喜びを倍にしあえる夫といふ  
 (分ち合い喜び倍になる夫婦)  
 美恵子  
 子等もどりにわかに歡喜満ちる家  
 (孫つれて帰省の子等に湧く歡喜)  
 君江  
 豊作を喜ぶ雀罪はない  
 (豊作で一番喜んだのは雀)  
 克治  
 懐妊の喜び不安もチョッピリと  
 (母となる歡喜の中にある不安)  
 三重子  
 はにかんで喜ぶ顔は清し  
 (はにかみと喜び包むマタニティ)  
 弘子  
 はく離から見える喜び教えられ  
 (手術して見える喜び頂きぬ)  
 ふさ子  
 一寸待て喜ぶ裏にある墓穴  
 (内定で喜び過ぎた落し穴)  
 一壺  
 孫からの内定通知弾む声  
 (就職の孫よろこびの渦の中)  
 正子  
 就職の知らせ電話に菊薫る  
 (就職を知らせる電話菊薫る)  
 瑠美子  
 合格を喜ぶ声は抑えてる  
 (合格を喜ぶ電話泣いてる)  
 一乗  
 喜びが自慢に見える子の出世  
 (喜びがつい喋らせる子の出世)

喜びの盃受ける孫の婚  
 (孫嫁ぐ溢れる程に酌いでくれ)  
 岡静子  
 嫁ぐ娘に悲喜交々の父の胸  
 (嫁ぐ娘をよろこぶ父の泣き笑い)  
 ミツオ  
 過疎の村青い眼の嫁き喜ぶぞ  
 (外人の嫁村中で喜ばれ)  
 孝原  
 長生きも手ばなしで喜べず  
 (喜んでおれぬ長寿へ高齢化)  
 しのぶ  
 喜びを素直に出せぬ歳となり  
 (履歴書の喜ぶような職がない)  
 一閑  
 履歴書の喜ぶ職が見付からず  
 (うたかたの喜びだったドーピング)  
 慶三  
 巡り合い泣いて喜ぶ五十年  
 (孤児帰る泣いて喜ぶ五十年)  
 行子  
 糠喜びとらぬ狸の皮算用  
 (公約の糠喜びは許さない)  
 俊一  
 住みにくい喜ぶふりもテクニク  
 (住みにくい世だが喜びあきらめず)  
 勝巳  
 喜んで鉄砲担いだ時もある  
 (日本中開戦狂喜した歴史)  
 淳子  
 海行かば死ぬ喜びを強いられて  
 (喜んで死ぬと特攻隊の遺書)  
 幸未夫  
 鎮守の森日本が残る七五三  
 (日本が残るよろこび七五三)

着想・表現ともに立派な句  
 ライバルを抜いた喜び噛みしめる まさ子  
 出稼ぎの帰る喜び薄化粧 三重  
 喜ばず嘘も見舞いの中に入れ 絢子  
 柳壇に自句を見付けて跳び上がる ミツ子  
 胃カメラで何でもないといい結果 春枝  
 喜びがはち切れ毬がよく弾む 彩子  
 退院の足が喜び踏みしめる 芳水  
 麻酔醒め生きた喜びこみあげる 文子  
 喜びを素直な色で画いてみる 忠男  
 喜んでいるなエプロン弾んでる しのぶ  
 喜びの涙言葉が見付からず さち子  
 豊作を即よろこべぬ米事情 侑里  
 顔見せるだけで喜ぶ父の老い よしみ  
 初雛を喜ぶ窓を開け放つ 幸枝  
 喜びが逃げる 涙は拭かないで めぐみ  
 掌に乗るよろこびで丁度いい 柳章子  
 喜びを掴む確かな汗流す キヨエ  
 有頂天心の鍵は開いたまま 碧  
 私句  
 孫達の名を確かめて初春の膳  
 喜びにきらめく朝が怖くなる  
 題「太い」 2月15日締切り(4月号発表)  
 宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4  
 吉岡美房

# 各地新聞

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

## 八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

夫婦の溝にキリトリ線がついている  
 大物はすぐに尻尾を切りたがる  
 思い切りたい愛をもしやが引き留める  
 息つめて最後の線を切り終える  
 口火切る憎まれ役を買って出る  
 くされ縁切つてさっぱり家裁出る  
 すきやきが煮つまつている父の酒  
 あつと言う間にスキ鍋の肉が消え  
 すき鍋の底だけつづく母の箸  
 すき焼の肉に男は油断する  
 雑草はいつも多勢でしたたか  
 雑学にたけて長屋を出たがらず  
 妻師走してます雑巾ぬれてます  
 雑種でも吠えて尾も振る犬を飼う  
 それなりに雑魚も意見を持っている  
 ポケットのプランは最後まで出さぬ  
 老後のプラン何時か一人の時のこと  
 極寒をものともしない鶴の恋  
 ゆきくれた場末で寒い酒といる

隆 隆  
 たもつ 頂留子  
 和子 三男  
 信博 信博  
 柳宏子 柳宏子  
 年人 年人  
 泰 泰  
 夕花 夕花  
 柳伸 柳伸  
 シマ子 シマ子  
 祥一 祥一  
 春子 春子  
 一風 一風  
 宏子 宏子  
 欣之 欣之  
 祥文 祥文

夜汽車打つ雪に追われて北を発つ  
 寒い夜は鍋にかきると北の宿  
 切符買う手も寒さむと淀帰  
 川柳岩出 小倉 アサ報

美幸 美幸  
 弘直 弘直  
 美津留 美津留

従順な妻のふりして生きている  
 静寂を求めた宿が滝の前  
 伝説の中に私を解き放つ  
 従順の陰で装う母の知恵  
 旅なかば夫婦の味も濃く薄く  
 律義にも母のレールに染まる嫁  
 おだやかな人に従う安堵心  
 湯けむりに旅の衣を脱ぎ捨てる  
 老いて子に従う事が多くなる  
 伝説は遠い昔を偲ばせる  
 伝説を綴り合わせた古事記伝  
 花嫁の酒豪伝説ひた隠し  
 子と妻の意志に従い喜寿気楽  
 伝説を聞かせば孫の目に涙  
 従いてきたうっかり妻を見失う  
 強くなる妻に従う肩叩き  
 それぞれの涙知つてる旅枕

幸子 幸子  
 良一 良一  
 精子 精子  
 愛子 愛子  
 和子 和子  
 智恵子 智恵子  
 悦男 悦男  
 ふみえ ふみえ  
 保子 保子  
 英子 英子  
 千直 千直  
 千鶴子 千鶴子  
 重徳 重徳  
 正義 正義  
 春子 春子  
 忠雄 忠雄  
 与呂志 与呂志

## 城北川柳会

## 吐田 公一報

単調な百舌の高音も秋の彩  
 花見ればおのずと心美しく  
 決断はずつとだまつていた部長  
 落ち椿ひとり憂き世に背を向け  
 たのもしゅうおました昔の男はん

春蘭 春蘭  
 久留美 久留美  
 史風 史風  
 比文 比文  
 とし子 とし子

こんなにも部下を思っていた無口  
 亡母すきなおいらん草がやつと咲く  
 待った花何を置いても水をやる  
 逆縁へ父の無口が深くなる  
 本当の敵は自分の邪心かも  
 人生はピエロ哲学持てぬまま  
 天高く米多い目に研いでいる  
 こも今日晴れてあろうか風景画  
 町名が変わり昔がまた消える  
 断ち切つて見上げた空の青いこと  
 割り切ろう昔は昔今は今  
 求愛の鯨の声に酔う平和  
 五十年結ばれたままもつかれます  
 さんま焼く路地に結んだ新世帯  
 鐘撞いてどこまで続く曼珠沙華  
 百花爛漫 花屋の花は苦を知らず  
 思考力求め歩く遊歩道  
 燻りは友の温みで消えてゆき  
 饒舌さ無口な背ながたしなめる  
 無口だが温もりがある友の背

高栄 高栄  
 あい子 あい子  
 トヨ子 トヨ子  
 一枝 一枝  
 白峰 白峰  
 ただし ただし  
 登美子 登美子

## 京都塔の会

## 松川 杜的報

古い家園こぼれ残る京の街  
 鍾馗さん今も裏通りの京守る  
 古都京の辻々にある地藏様  
 あずま屋の野点をしのぶ擁翠園  
 一筋の煙よさようならあなた  
 落葉焼く煙美学を心得る  
 落葉焚く煙走らず冬の風

圭坊 圭坊  
 美穂 美穂  
 江美 江美  
 武庫坊 武庫坊  
 庸佑 庸佑

ボイ捨ての煙を犬が消している  
 箒目を入れて仕上がる京の庭  
 土俵掃く背にのど飴のコマーシャル  
 隅々まできれいに掃いて娘の見合い  
 引越しへ後は濁さぬ部屋を掃く  
 小春日を楽しんでいる竹箒  
 融通の呼名を変えてりサイクル  
 融通はきかぬが威厳あつた亡父  
 融通が上手で丸く生きている  
 融通をつけたる話に金がいら  
 修羅の道通きかぬ奴がいる  
 融通はついたが利子が追いかける  
 教科書も心も墨で塗つた日よ  
 あの世への旅費はたっぷり貯めてある  
 河川敷に親子の秋が弾け飛ぶ  
 効かぬ釘打って自嘲の力留  
 老いふたり思いもよらぬ寝坊する  
 逆境の絵筆の色をこゆくする  
 尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

杜的 正坊 芳子 波留吉 飛鳥 求芽 萬的 榮 英一 真柳 百合子 てる 笑女 達子 ただし 年代 水客 伊三郎 正治 求芽 薰 白漢子 義芳 杜的 紫香

今年こそ今年こそはと今年暮れ  
 六法の裏で今年も飯を食う  
 ヒビ割れた皿が今年を物語る  
 強がりのベン尖らせてきた今年  
 自作ドラマの冬飾る彩探している  
 自作ドラマの冬飾る彩探している  
 托鉢の僧 身じろぎもせず冬に  
 冬が来る多喜二をつれて来るように  
 我に無縁 冬のポストが立っている  
 根の深い所にあつた分岐点  
 願つてみよう私を見ているあの星に  
 愚痴捨てた海がだんだん荒れてくる  
 諍いに冴えて無明のコップ酒  
 制服を着ればその気になる不思議  
 ままごとで料理されてた庭の花  
 怒鳴られて口惜し泣きして強くなり  
 ふいに頭上でからすが人を馬鹿にする  
 擁翠園 葉のうらに書くハガキの木  
 罪の意識うすれる多額保釈金  
 夕暮れは五分とたたず影がきえ  
 心地よい音で切られる新キヤベツ  
 高槻川柳サークル卯の花 川島颯云児報

福一 鹿太 芳子 まさお 武庫坊 正坊 水磔 澄子 夢之助 正一 吉太郎 ミサ子 石舟 年代 正子 天弘 千恵 ハツエ とおる ひでお 静江 波留吉 節子 栄

この人の視野の広さに脱帽す  
 巣を張って蜘蛛偶然をひそと待つ  
 巣立つ日の親はやさしく背を押す  
 新しい表札愛の巣の証  
 パトロンが時々ぞく私の巣  
 独身の巣に目り本屋混んでいる  
 巣へ帰る鳥目で追う日の孤独  
 巣作りが下手でひとりの飯を盛る  
 コーヒーがうまい巣で待つ鬼である  
 秋の陽が寒いころを慰める  
 三寒四温旅行が悪い日に当たる  
 とされがち夫婦に寒い隙間風  
 寒い日は溜り場になる暮の会所  
 吐く息の白さが並ぶランドセル  
 度 泰子 英一 信治 冬葉 鹿太 螢 半蔵門 澄子 佐代子 白漢子 萬的 大茂津 艶子 庸佑 瀧小 紫香 武庫坊

佳句地十選 (1月号から)

江口

種袋振れば命の音がする  
 さまざまに揺れ反省の樹は育つ  
 善人の汗 山門が近くなる  
 めつきりと涼しくなつて編み急ぐ  
 限りあるいのちを想う蝶の舞  
 愛を積むことを教える菊の花  
 先頭が好きで転んでばかりいる  
 栄養士茶づけ一番好きと言う  
 外国で拾つた恋を連れてくる  
 当然のように枕を二つ置く  
 度 泰子 英一 信治 冬葉 鹿太 螢 半蔵門 澄子 佐代子 白漢子 萬的 大茂津 艶子 庸佑 瀧小 紫香 武庫坊

あつさりと殺し文句に負けました  
この笑顔祭壇用に撮って置く  
足し算の装い嬉し紅葉色

カマキリ老いて冬の窓辺に身を寄せる  
大正が張りついている乗車証  
秋風に指のすき間は冷えやすし

画布の余白に凝縮されている空気が  
言ひ訳の傘の雫が乾かない  
愛は豆腐に似て柔らかく頼りない  
惚け少し来たなと思う物忘れ

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

馴染んでもなぜか染まらぬ彩がある  
雲行をゆつくり見ているヤジロペー  
紙吹雪秋空に舞う芽出度い日  
姿見にふとした仕草亡母に似る  
娘に送る春を拾っているカメラ  
公約に盛り沢山な名文句  
文句だけ言うて結論出しもせず  
湯の花を入れてノンビリ草津の湯  
胸すかす後はないかと言う文句  
本当に好きな人には手は出せぬ  
産声が廊下の流れ祖父となる  
生きろ生きろ瓜がやたらに伸びてくる  
カアさんの命縮める山男  
新党も並んだ顔は古ばかり  
老いの事故余生波立つ孤独の日  
新聞も三面記事と広告と  
悪い癖ホコロビ直すようにはいかぬ

かおり  
あきら  
稲子  
よ志子  
百合子  
薫  
惠美子  
英一  
磯  
諷云児  
ひかり  
マツエ  
よしみ  
初恵  
くに子  
かおり  
文仙  
治延  
マサエ  
放任  
いさむ  
あきら  
吟笑  
正雪  
ふみ  
迷貫  
チカエ

文句だけ言う事言つて後はポイ  
中なみ子

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

あぶないことを知らずに育った青リンゴ  
いま少しあぶないこともさせておき  
連名の孫の便りを抱きしめる  
秋を行く芒においてと誘われる  
ごもつともされど鶴呑みはしませんよ  
握手してそれでいいのよちぎれ雲  
折り折りの出会いに運命あやつられ  
貢献もしました歳もとりました  
子に孫にこんな痛みはさせられぬ  
太陽の貢献などは気がつかず  
貢献をしたとは言わぬ棚のくつ  
すり減った貢献言わぬ筆の芯  
指切りの痛さわからぬ議員たち  
難民へひたひたひたと冬せまる

川柳後楽吟社

從野 健一報

はるみ  
惠美子  
英子  
歳栄  
芳枝  
民子  
鈴江  
かつ子  
聖子  
好栄  
ちよえ  
博利  
清泉  
白汀  
草風  
拓治  
美智子  
たけ志  
哲郎  
青銅  
柳五郎  
正秀  
健一  
博友

ドジばかりする人間臭い鬼  
向う岸の紅い花に恋をする  
せつかな母にゆつたり粗大ゴミ  
強正美、心の舟に積んで漕ぎ  
現実を逃してくれない蟻の列  
新築へ秋刀魚焼くのを躊躇する  
なんとなく視線が合った未知の人  
よく笑う野良着へ柿の表年  
許すことに慣れて決断鈍くなる  
へそくりがだんだん出てゆく老い多忙

台本にないドラマがあるから素敵  
果し状書くのはよそういわし雲  
菊の頃会いたい人の菊日和

悪運の強さ今でも塀の外  
病院の窓に祭りの音が来る  
座禪組む無念無想とまでいかず  
鋭い目闘う男に惚れました  
傷口をなめてとらとら昼下がりに  
ころがし一家が和む夜の卓  
ストレスを受けとめ大きく脱皮する  
鉄棒ができた嬉しい日の日記  
危ないが雪山に咲く恋がある  
祭寿司母の出番とタスキかけ

東大阪川柳会

森下 愛論報

一点へ到達駅を乗り継いで  
花の咲く終着駅を夢に見る  
妻に逢うために駅まで汗をかく  
雑巾となったタオルの過去の汗  
出稼ぎの首のタオルは勲章だ  
ポストには入れぬ恋文書いている  
母いまだ候文の墨を磨る  
地球儀の紛争地帯にある微熱  
揺れ動く女心へ秋の風  
庭下駄へ素足の冷えも秋となり  
赤トンボ或る日の姉を思い出す  
札束に心が揺れる弱き者  
銀杏揺れ冬の決断せかされる  
揺れる日もあつて夫婦の小さい船

桃風  
道水  
玉水  
吉則  
金吾  
佐加恵  
邦季  
幸子  
吟平  
洋一  
秋月  
鮫虎狼  
照路  
森子  
美人  
岳幸  
恭昌  
寿子  
茶の子  
大八  
春堂  
逸郎  
元紀  
文秋  
愛論  
湖風

或る日から娘女の顔になる  
百舌が鳴いたかきも掘りを始めよう  
石焼きの笛が踊りの輪を崩す  
いも飯で鉄砲作った負け戦

### 川柳若葉の会

### 宮崎シマ子報

章久 度 晋 吾 太 一

貧乏神を逃げ出し来た荒い息  
息かかる位置に小さき耳があり  
大きな息がしたくなる朝の散歩  
ひと息入れよう結論引き伸ばす  
孫が寝てテレビも息をひそめてる  
再会の電話に母は小躍りし  
医者よりも頼りにしてる妻の声  
甘い話にうかれて地獄見た夕べ  
他人様の不幸は甘い蜜の味  
言い訳をしては自分を甘やかす  
美人には弱い男で頼りなし  
旅の夜酒が多弁にさせて更け

### 三幸川柳教室

### 三宅

### 保州報

二枚舌使い続けて綱渡り  
棟続きの義母へお芋の煮転がし  
少年のままで続ける好奇心  
艱難を熟し続けた絵巻物  
約束が続いて小指疼いてる  
下積みが続いて渋い味を出す  
人間不信続いた朝の花畑  
エビで鯛釣る画策をして贈る

由梨 みね 正雄 信子 公子 圭子 義男

ます親へあの手この手の贈り物  
コスモスと撫でる風詰め贈ります  
描いた人来るので額を入れ替える  
そのうちに空気を贈る時が来る  
駆け落ちの約束をした森がない  
暗い過去持つとは見えぬ涼しい日  
モノクロに光る私の青春がある  
ふり出しに戻る勇気がまだ持てぬ  
夏の夜をもう幻にする男  
万華鏡過去がきれいいに見え過ぎる  
故郷の駅一気に過去へ押し戻す  
不揃いの器に姑の過去がある  
佗助にひかれてひとり抹茶飲む  
秋桜を楚々とながめて飲む抹茶  
新世帯味噌汁だけが得意の娘  
時々は田舎の水を飲みに行く  
地球儀を回せば水を恋う子供  
六甲の水より旨いうちの水  
先頭につづいて受けるそばつちり  
贈られたレコード時を巻き戻す  
灰色もバラ色もある日記帳  
夫婦別姓おなじブラック飲みながら

### 南大阪川柳会

### 金井

### 文秋報

嘉寿子 茜 章子 秀男 美智子 鉄治 町子 百合子 親路 三千子 高夫 めぐみ 初子 久子 美子 当代 さち子 武春 千秀 朱夏 保州 桂香

苦しいが故郷を捨てた意地がある  
随分と遊んだらしい渋いのど  
待つときは随分ながい五分間  
出稼ぎの父が気遣う雪おろし  
単身赴任随分遠く来たもんだ  
病名を伏せて苦しい嘘をつく  
病む母へ積もる思いが字にならぬ  
検診の疑い晴れた日の安堵  
疑いを持たない老母の太い指  
磯笛は海女の苦しさ知っている  
うっ憤が積もる爆発も近い  
洗面器をそっしりのばす糠袋  
随分昔の広告がある無人駅  
疑いが不眠の枕濡らしてる  
雪吊りが絵になる松に積る雪  
糠床は母子相伝の味で生き  
積もる話一気にはずむご対面  
疑いをあらわに税吏眼鏡越し  
苦しんで掴んだ知恵は身に馴染む  
敗北の苦しさ枕裏返す  
大声を出してセンスを疑われ  
亡き戦友の水水水が残る耳  
苦勞して手にした椅子が冷たすぎ  
疑えば靴の泥まで胸騒ぐ

### 久世川柳クラブ

### 二宗

文秋 信博 柳宏子 重人 直子 秋子 凡子 志華子 千里 庸佑 東雲 萬郎 悟郎 勝美 真砂 頂留子 柳伸 三男 トミ子 公一 久峰 久子 シメ子

### 吟平報

文化祭みんなの熱意盛り上がる  
参観日母の美人を待つ子供  
掌を合わす如来美人に在します  
楓楽 宗悟 淳子 信治 寿美

のぶ子 千代女 亜矢

いい嫁でいつもここに健康美

夜明け待ち月下美人に会いたくて

氣位が高く美人嫁きおくれ

美人から声かけられてほのぼのと

ドラマとは知っててすぐに涙出る

ドラマとはおもつて見ても出る涙

ハッピーに終つてほしいこのドラマ

修羅阿修羅ドラマの中へ吸い込まれ

人生を重ねかさねて見るドラマ

さまざまドラマくぐりて日向ほこ

老いの背を詩で包んだこのドラマ

人生の残るドラマにかけてみる

メロドラマ女の夢をかきたてる

花束のかけに隠していたドラマ

お化粧で化けて化かして夜の蝶

はびきの市民川柳会 櫻本 吐来報

包装紙に魂胆しつかり包み込む

喜寿の友 吸殻入れを探す仲

痩せなさい無理言う医者も太り氣味

一打差の一メートルにプロしびれ

雲行きが悪くてジョーク言いそびれ

一身上の都合で今夜も酔つてます

嵯峨野路に幸せこぼす人力車

虫の声かれて淋しく落葉散る

顔ぶれは古いが党名新進党

改憲の狼煙 軍靴の音を聞く

そろばんを忘れて老いを生きている

ああ熟年従兄弟はこの訃報来る

甫正

秀香

つた子

光水

久子

伊久栄

すみれ

美恵子

志重

富士野

山人

ただし

旭泉

メ女

吟平

吐来報

泰子

晋

俊男

かつみ

さとみ

辰子

一貫

シマ子

利武

ダン吉

与呂志

敏

避けられぬこと知つてる煙草の輪

福耳が不穩な事件ばかり聞く

鏡も役に立つとき邪魔な時

かすがいの錆びてる家に笑みがない

鏡が或る日はずれた親のエゴ

大器晩成私は枯れる年でない

淡々と枯れた講話を聞く夜長

枯れ葉かさこそ森は暫く冬ごもり

ジャンプして手折つた柿の凄しいシブ

少年のジャンプ朝日に負けてない

ジャンプしたとこに大きな芽があつた

割り勘の端数氣にする律義者

律義とも言われ馬鹿だとも言われ

副作用氣にして飲んでいる律義

まだ続く律義な人の御中元

明治男どこを切つても出る律義

面白くない男だが律義です

なる程と思つときある律義者

川柳塔唐津支部

久保 正劍報

シャコバサボしだれ花火のように咲き

六人の孫十二の瞳でおめでとつ

冬支度愛犬の分孫並みに

物忘れやっぱり齢を意識する

鉢植の松も今年は五十年

ゆとりある生活の講話心急ぐ

内気故赤面善行賞を受

猪鍋を囲む煙の見える阿蘇

漱石も千円分は神である

吐来

志洋

一壺

金太

聡

悦子

昇

美代子

扶美代

六点

重人

和風

絢子

たけし

りつえ

みつこ

夏秋

厚子

久保 正劍報

ふさ子

紀一

青琴

治幸

喜久亭

ちよ

朴竜

虹汀

四郎

謎々の結党ごつこ永田町

元氣でねサツと彼岸に移りたい

筆塚と書かれし石碑城内に

枯木まで呼ばれて走る運動会

投票日の一番へ座り込み

雨恋し木の葉も空を向いている

詰みそつて詰まぬ仕掛の賭け将棋

鉛筆は削れぬけれど塾通い

走つたら怠慢になるチンドン屋

川柳塔まつえ吟社

恒松

歳月を映画のように語り出す

歳月の流れメダカも住み難い

聞こえますかな歳月が逃げる音

歳月を氣にしなくなり太り出し

歳月がまわりの景色変えている

振りかえるとき歳月は浄化する

七珍の味をもとめる湖の宿

くさや焼く煙珠味に苦情来る

漁師町珠味に賭ける活性化

珠味あり酒がうまくて友がいる

蜂の子がこんなにうまい山の宿

糠味噌も近頃珍味になりました

言い勝つて寂しさ走る夜のお茶

年下の男に走る恋ごころ

立ち入り禁止の中を走ると風斜め

力走を続けた道に悔いはない

今病んで走つた頃を思い出す

乳房ゆらゆら目の前を小走りに

幸夫

夕ミ

實

はる子

久仁於

圭一

高明

旭恒

正劍

町紅報

知恵子

多賀子

螢

静江

邦代

文子

房子

清志

昌枝

登志子

たつみ

長三

佳江

米子

雄々

きみえ

登美子

早苗

本閉じて余韻静かに胸に抱く  
ゆるす気でいるゆつくりと目を閉じる  
開閉が効かなくなった親子トア  
美しい秘密は胸に閉じておく  
柿少し近所へ分けて秋を閉じ  
由緒ある家風を閉じる民主主義  
我が物を買った赤字は苦にならぬ  
赤字には慣れた陽気に米を研ぐ  
覚悟した赤字意外に小さかった  
少々の赤字平気で年を越す  
晩酌の目盛り縮めておく赤字  
赤字赤字と年金をせびられる

みえ 章峰  
静恵 太泡  
義良 友子  
桂子 鶴丸  
長吉 与根一  
叮紅

岩美川柳会

羽津川公乃報

臍かじる子が裏切って痛む臍  
雨は紫痛む心も落けて行く  
反省の心に痛む古い疵  
気まぐれと痛みを笑う母である  
芳いの言葉に痛み吹き飛んだ  
老い二人痛むと絆合つてくる  
包帯を巻いて痛みを告げにゆく  
痛み止め飲んで怒りを静めよう  
足痛むほどのお経はありがたい  
石橋が痛いと言った事がない  
痛いとも言わずに足をソツと引く  
嫌い抜いた血が痛いほど温かった  
痛い目に遭って大樹の枝が張り  
背かれた痛みを母は口にせぬ  
転落の椅子から人の痛みを知る

嘉津江 きみ子  
単車 陸子  
芳江 孝原  
正恵 公乃  
大漁 はるお  
喜与志 美恵子  
照女 孝男  
忠良

痛くても父の拳骨なら耐える  
岸和田川柳会 田中 文時報

新学期顔と名札が重ならず  
徘徊の老母に持たせた木の名札  
残留の孤児の名札が泣いている  
煮えつまる話にレール敷いてある  
カマトトぶって煮ても焼いても食えぬ奴  
濡れ衣は晴れたが晴れぬ蟻り  
濡れ衣に貝を望んだ兵悲し  
濡れ衣へ無意識汗津を抱く  
熱演がアンコール呼ぶ演奏会  
学芸会子の熱演に母も燃え  
熱演の余韻に浸る帰り道  
熱演を終え母さんの終い風呂  
熱演の主役生傷絶え間ない  
引退披露その熱演に鳴る拍手  
信用を腕で守っている暖簾  
家訓読み暖簾の重み感じてる  
信用の暖簾パブルに強かった  
縄暖簾料亭にない深い味  
スパーに暖簾が揺れてくる老舗  
旅籠ぐぐってさあ極楽のあまり風  
三代目過保護暖簾に見抜かれる  
夫婦善哉昔の暖簾生き続け

川柳ささやま

酒井

靖子報

百姓の長い歴史に春が来ぬ  
鹿太郎 甚一  
ダン吉 二南  
萬的 朝一  
昭二 一齋  
呂方 通彦  
東雲 浪速子  
白光子

行き先も知らず流れについてゆく  
ふる里に川が流れている平和  
話し下手だから疲れがほぐされる  
振り向けばまだ手を振つて里の母  
灯を消して今日の疲れがどつと出る  
お互いに振り向いてみる古希の花  
野良猫が一瞬爪を研いでいる  
ふき飛ばす疲れ屋台の一气呑み  
結論を急ぎ疲れを溜めている  
一休みしたらと貧乏神が言う  
恋をしていきます爪先まで光る  
爪染めて明日の決意へもう泣かぬ

純子 恵美  
とみ子 素水  
つや子 八重子  
和子 市三  
芳郎 可住  
靖子

川柳たけはら

時広 一路報

大木のようにどっしりマイペース  
秋よりも深く染まった海の色  
ゆつくりがいいぞとテランコが揺れる  
蹴振ればゆつくり答え出るだろう  
リハビリに歩幅合わせて萩の道  
ゆつくりとさせてはくれぬ孫の声  
すすきの穂人恋しくて恋しくて  
焼けあとに若竹の青すつくと立つ  
節水へ身をよつて知る水の恩  
水溜れのニュース蛇口を細く開け  
邪魔だった水がめ手桶が助け舟  
菜園に米のとき汁日課です  
これこそが天然水よ手ですくう  
鳩時計今夜は機嫌良いらしい  
空の青仏に祈ること多し

中史子 中千枝  
蘭幸 静佳  
節夫 汎美  
麻代 栄恵  
臣子 喜久恵  
ヤスエ 寿枝  
笑子

上人も私も仏地に還る  
 曲り角温い仏と会いました  
 弱い男へ一喝したくなる仏  
 一本の木から仏像の魂よ  
 鐘の音に無事の一日感謝する  
 一年の煩惱なだめ鐘ひびく  
 警鐘を鳴らして鬼の角を折る  
 一介の凡夫に戻す鐘の音  
 一日に二回回れば済む短針

川柳クラブわたの花

片上 英一報

漬物石の重さよ妻のねばり勝ち  
 柴漬がほしくて妻と京巡り  
 顔見世の帰りに京のかぶら漬  
 究極のグルメ茶漬に香の物  
 奈良漬は伊勢海老と言うが如しか  
 ごちそうはナスのぬか漬母の味  
 お茶うけの奈良漬少し頬を染め  
 秋茄子も色よく漬少しすむ箸  
 ツンとくる嫁の土産のからし漬  
 漬物が好きで塩分気にもせず  
 かぶら漬京千年の朝の膳  
 漬物の音かりかりと歯に感謝  
 漬物は好きだが食べぬ絵入歯  
 茶漬してレレビグルメでつばを呑み  
 走っても歩いても先皆同じ  
 年金の灯やさしい父母の部屋  
 追伸を読んで心に灯がともる  
 方円の器に合わず父の愛

夏喜 一喜 静風 比呂子 清水 喜美子 房居 菁居 一路  
 シマ子 一風 弘直 剛治 英一 暁子 春子 初子 君江 幸枝 トシエ 明子 実希子 朝子 龍 ますみ しのぶ 隆

縄文の器に遠きロマン盛る  
 途中下車つるはして買うキムチ漬  
 川柳若葉の会 宮崎シマ子報  
 ずる休みじや無し一息してただけ  
 東尋坊雪は波間に乱れ舞う  
 菊人形済んで裏方齢をとる  
 納まるとこへ納まりました夫婦仲  
 結納のダイヤがたどる人生譜  
 納税はとられたとしか思えない  
 心ない言葉納めて腹ふくる  
 枯葉一枚秋の日の舞い納め  
 胸中に納めて自己を整理する  
 譲り合うて元に納まることすすめ  
 人の世は納まらぬのに除夜の鐘  
 川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報  
 来春の新芽へ枝を矯めておく  
 ラッキーな夕陽と出会う和歌の浦  
 滝壺を越えて気楽な水になる  
 来春の夢かして気楽な冬木立  
 来春へ汚れを祓う夫婦岩  
 喜寿過ぎて来春へ描く小さな絵  
 ラッキーを待つほかはなし蜘蛛の糸  
 ラッキーと言おう平和な日がつづく  
 ラッキーとVサインする受験生  
 終電車スゴイ美人と差し向かい  
 ラッキーの愛のカードは放さない  
 ラッキーゾーン妻の笑顔がおいてある

美津留 鬼遊 千枝子 清芳 留吉 弘直 シマ子 田実子 香住 能子 欣史子 光子 あずき 英里子 美房 正博 豊太 萬的 射月芳 高夫 吞天 淳太郎 美羽 輝子

幸せをつかんでくれた今のひと  
 楽をしたとこだけ厚くする鍍金  
 楽そうに見えるだけの檻の中  
 邦楽の聞こえる方が隠居部屋  
 楽な日々知らずにはずむ母の毬  
 挨拶もせずにはずむ自動ドア  
 偶然の出合い楽しむ古本屋  
 窓際で楽な仕事をしていきます  
 楽だから軽いつづらを貫つとく  
 居酒屋で楽打ち上げるとき回り  
 逢いに行く楽しさ歩幅伸びてくる  
 道楽をしたなと思ふ隠し芸  
 極楽を信じ切つてる遍路笠  
 お互いに楽をします嫁姑  
 楽焼の顔はいつでも亡父に似る  
 来春へ描く私の好きな色  
 楽しみは虹の向こうで待っている  
 すぐ楽にしてあげますという注射  
 ほんたうの川柳同好会 井上 直次報  
 シナリオが狂いコーヒー飲み損ね  
 ここまではシナリオ通りだったのに  
 シナリオの通りにいかぬエキストラ  
 シナリオの無い一日が暮れて行く  
 シナリオを書き直させた大スター  
 母親はシナリオ通り行く夢を  
 人生の午後のシナリオ 海がある  
 老婆のシナリオおれを当てにせず  
 名優のシナリオ超えた芸に酔う

誠子 紀久子 千寿子 寿子 好笑 信子 紫香 めぐみ 武春 鉄治 白光子 三男 稚代 佐代子 とし子 保州 眞郎 螢柳 福一 明光 博史 吉太郎 直次 方郎 竹二

シナリオはとつくにすんだ出来レース  
シナリオの最後は妻よありがとう  
シナリオの先が知りたい七十歳  
終幕のシナリオだけがまだ書けぬ  
シナリオに自分らしさも少し入れ  
花筏別れのシナリオ胸に抱いて  
アマゾンに財布の皮が泳いでる  
欲の皮あらわに見せる蛇財布  
虎の子の財布の鈴が鳴りやまぬ  
カードより重い財布の方が好き  
財布には孫の写真と診察券  
子雀は親を探して敷の中  
愛用の湯呑ようやくいい艶に  
ようやくに掃いたそばからまた落葉

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

畳にも内緒話をきかされた  
木づくりの漆器匠の腕になる  
占いの明日を信じた紙人形  
おみくじを信じて吉の運待とう  
占いの紙を丸めて飲みこんだ  
占いの言葉耳底でゆかぬ  
大吉を引いたその日に骨折し  
第六感が占う君の愛その後  
雨降りて山また山の木々笑う  
占いにこつて判子がふえてゆく  
奥さんの機嫌占うドアの音  
占いで結ばれた僕子沢山  
大吉にひそかに駒を進めてる

清史 英子 敬子 保子 桂子 紫水 祥司 馬洗 龍小 昭子 しずえ 一笛 純次 正安

夕焼けに下駄をとばした日の遠く  
朝刊の古い読んで靴をはく  
占うより悟るほうが先決だ  
古いへすがる女の長い雨期  
クローバーの四つ葉占う青春譜  
占いに懲りてねぐらが建てられぬ  
てっぺんの風を占う少年期  
冬と出る占いだけど生きてみる  
風を聞き明日を占う馬の耳  
占って身代わり鈴を母の手に  
古い師でないが靈感よく当たる

サークル檸檬(12月)

小林 一夫報

今は只一途に母の粥を炊く  
水の無い川を見ている怖くなる  
大根の白さにいつも負けている  
完璧をめざすと水が溢れだす  
にんげんの首垂れて 秋の電車  
人の世に疲れ芒のやわらかさ  
街の鐘孤独の胸に共鳴し  
電子レンジ温めるだけの倦怠期  
絵の中の小舟にのって遠出する  
湯豆腐の角が必死にふるえてる  
秋の墓に一升瓶を下げてくる  
大波小波 心揺らして酒と居る  
一日の疲れビールの泡が消し  
酒蔵で下戸が迷子になっている  
李白にも杜甫にもなれずふつか酔い  
爛漫と討死にをする剣菱に

春枝 寿々子 夕子 花子 保子 恵子 日枝子 荒介 のり子 瑞枝 智子 千代 たか子 正坊 薫 あずき 雅子 智恵子 いわゑ 喜美子 一夫 みつ子 希久子 房子 楓 薫風

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

一杯の素うどん冬を温める  
ぐい呑みに替えた頃から目が座る  
杯をさされば本音が出てしまふ  
一杯の水に自分を取戻す  
感激を湛へ明日へ無二無三  
借金を妻のバイトでみない払う  
猫にまで文句を言つて追い払う  
達磨に目入れて得意の咳払い  
足払い見事にきまる技の冴え  
年内に払うと啖阿切つて来た  
肩抱けばヒューズが飛んだ足払い

富柳会 池 森子報

正論が喜劇に見えてからの冬  
故郷の夕焼け思い出すある日  
野次馬のような味方ならいらぬ  
葬列の長さは味方だけでない  
死ぬ時はみんな味方と思いたい  
味方だと握手その手が冷え過ぎる  
講釈をしながら地酒酌む上司  
明暗を分けたある日の時計の狂い  
後で酒出そうな方に味方する  
ばらある日自衛のとげを払います  
地酒一升君ともみじに溶けこまん  
味方にはさとうを少しずつへらす  
生国が同じでうまが合う地酒  
ある日ふと女の尻に落ちてみる

夢之助 定人 向西 鹿太 十四郎 紫香 三サ子 弘治 末貞一 尚利 勇次郎 和樹 昭水 智久 透太 トシエ 登子 文次 維久子 天笑 月子 シマ子 一風

泣くよりも笑う演技のむつかしさ  
 火の如きある日の愛が水になる  
 久しぶり握手はしたが名は忘れ  
 生きてゆく握手に今日も灯をともし  
 あこのころのピエロがいまの夫です  
 針のない餌を探している喜劇  
 味方には濡れたタオルは渡さない  
 バターナイフもある日殺意を实らせる  
 久闊を叙する丁寧に叙する  
 踏切の地蔵がためている情け  
 神のてのひらで演じている喜劇  
 ノックアウト味方の野次が背に棘さる  
 たった一人を愛して虹になるある日  
 女人高野に喜劇がひとつ落ちていて  
 そしてある日寂しくなつて蓋をする  
 遮断機が母のかたちで降りている

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

泣くよりも笑う演技のむつかしさ  
 火の如きある日の愛が水になる  
 久しぶり握手はしたが名は忘れ  
 生きてゆく握手に今日も灯をともし  
 あこのころのピエロがいまの夫です  
 針のない餌を探している喜劇  
 味方には濡れたタオルは渡さない  
 バターナイフもある日殺意を实らせる  
 久闊を叙する丁寧に叙する  
 踏切の地蔵がためている情け  
 神のてのひらで演じている喜劇  
 ノックアウト味方の野次が背に棘さる  
 たった一人を愛して虹になるある日  
 女人高野に喜劇がひとつ落ちていて  
 そしてある日寂しくなつて蓋をする  
 遮断機が母のかたちで降りている

上役が消えてすっきりのみ直す  
 すっきりと単細胞も芽えてくる  
 十円で敬う神に無理願う  
 敬われる事も無いのに敬老日  
 親離れ出来るか敬語混じり出す  
 一日だけ喜ばせる敬老日  
 プロの技簡単そうだが真似てみる  
 敬つてみても論吉は長居せず  
 おんなに金に敬遠されている  
 すっきりと割つて見せたい腹の内  
 最後には金がすっきりしてくれる  
 何かある時だけ敬語つかう嫁

川柳塔鹿野みか月

土橋

人間がぼたんとなつて僕を食う  
 肩やすめ亥の子の荒れに礼を言う  
 仲のよい亥二匹ついてくる  
 乙亥も嬉しくはない鞍が増え  
 亥の刻にむかしは嫁に来たもんだ  
 とぞい東西いのしし嫁の始まりだ  
 良い干支を選んで母は産んでくれ  
 人生の大舞台にて唱和する  
 あばさんと呼んで駆けるひげの背な  
 焼き魚の香りに冬は小走りに  
 娘の選つた服着せられる齡になり  
 よく動く嫁でおかめも憎めない  
 とまどつては心が動きにくくなる  
 父さんが焼いていたのはラブレター  
 やきもちを焼かれたくなる美しさ

丸焼きの鶏で充分 クリスマス  
 ドラマにならぬお好み焼きを裏返す  
 どこへ行つても戻る道から招かれる  
 罪深い私 白紙に戻れない  
 ゆうパック戻り母さん眠れない  
 ごめんね振り出しに戻り出直すわ  
 後戻りする母の位置で話  
 乾杯で一年間が消えてゆく  
 悪性でなかった瘤に乾杯だ  
 乾杯は飲みみせ扉開かれる  
 乾杯して貴方が好きと言われても  
 神妙に聞かす話に乗ってみる  
 思い切り見えないとこで泣いておく  
 彼と逢う手帳にうれしい二重丸  
 鼻の下長い短所が少しある  
 年老いて心の鬼を吞みくだく  
 波荒れる沖を見つめている男  
 鶯が啼いたと手紙書いてる

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

弱虫が好んで被る黒い面  
 も一人の私と歩く黒い帽子  
 目の中の黒い小虫を飼ひならす  
 履替書は黒い部分を喋らない  
 背かれてからは黒の手袋離さない  
 新婚に黒いピアノがおいてある  
 危なげな吊橋渡る棒グラフ  
 心電図のグラフ見つめる研修医  
 寿命の長さみたくに見える棒グラフ

バブル以後とんと芽が出ぬ棒グラフ  
思い詰めた眼に山茶花の白まぶし  
問い詰めるとわが身にかえる波しぶき  
愚痴詰めた袋は開けぬことにする

鉄アレイ詰めて流した世は非情  
ジャンジャン横丁窓から覗く詰め将棋

思い詰めマリアの像に縋りつく  
もつそろそろ神の返事が来る頃だ

そろそろと立たねば海が荒れてくる  
老母浮かぶそろそろ氷雨降る頃だ

千羽目の鶴もそろそろ折り上がる  
そろそろと歩いてるのに蹴つますく

許す気になってそろそろ爪を切る  
皺寄せの結果そろそろ出る頃だ

時雨して山は男の貌になる  
今日の傷は今日流しとこ熱い風呂

アルバイトのサンタと握手した笑顔  
かたまつて校門入る時雨傘

北口で「すみれの花」が丁度鳴る  
妻とした約束だからすぐ忘れ

他愛ない話に弾む夫婦箸

川柳藤井寺

高田美代子報

初孫がそろそろ欲しいらしい姑

遺言書そろそろ書いてもよい余生

機嫌よく酔ってそろそろ吐く本音

急ぐのにそろそろと往く太郎冠者

そろそろと地金を見せる五合瓶

二代目が作る野菜に匂がない

石舟 義子 文 トミエ 杜的 修水 武庫坊 透太 はつ絵 たす子 能子 風云児 房子 鹿太 てる 佐江子 涼子 江美 芳子

悦子

ハウス栽培旬の野菜を狂わせる  
旬のものは松茸だけは手が出せぬ  
秋深し隣もさんま焼いている  
バナナさんあなたの旬は暑いとき  
魚だけは人の作れぬ旬のもの  
歳時記を無視して旬の味が消え  
百円で福をください鈴を振る  
振り向いたばかりに波長狂わせる  
振り向いたばかりに困る人違い  
栄光の過去振り返る背に夕陽  
イヤリング聞かぬ振りして揺れている  
これきりへ胸の振り子を止めて逢う  
舞台からりえが私に手を振った  
首縦に振らぬ意地あり日が暮れる  
初孫が私の余生振り回す  
誰にでも尾を振る犬で頼りない  
土の道歩けば風は秋の音  
少し汗をください無職のこの父に  
サツマ芋好きでこっそり食べてます  
待たされて内科眼科で日が暮れる  
薬より強い病が殖えて来た  
初孫と握手人差し指を出す  
おやすみなさい おやすみ美しい影絵

川柳大阪

川端

一步報

真直ぐに生きて佗しい暮れの鐘

奥入瀬の樹海へ滝が見え隠れ

化粧品夢もいっしょに買ってます

神頼み届いて良かった受験生

智久 キミ子 利武 三郎 みよこ 美房 昭水 登子 たかし 絹子 トミ子 治子 正一 昭子 扶美代 志洋 恒雄 公輔 ケイ子 敦子 みのる 六点 美代子

推高

父母の汗届いた米をかみしめる  
忘れてた土のおいも届けられ  
言い分は喉で溶かして幹部職  
胃腸がカバンの中にある幹部  
真ん中の痩せて小さいのが幹部  
内証した分だけ悩んでいて女  
内証です心の隅の小さな火  
内証と有るから仲の良い夫婦  
内証ながら墓の中まで持っていこ  
千羽鶴一つ一つに祈りこめ  
真心で退院させた千羽鶴  
鶴飛来シベリア情報胸に秘め  
大臣が羽はたく鶴に待ったかけ  
ノーマア広島叫び続ける千羽鶴  
鶴飛来里はゆっくり冬支度  
鶴の来る頃に出稼ぎバスに乗る  
七分粥峠を越えた千羽鶴  
この苦勞何時か笑える日に耐える  
倅せは笑いを分かつ妻がいる  
空港は人類科学のニューメディア  
鶴が来て町に名所が一つ増え  
空港は夢の飛びかう交差点  
コンコルド拝観料をもらいます  
鶴を折る手許見つめる幼い目  
ジャンボ機が影を投げつつ着地する  
もうひとつの九月四日は向田忌

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

郵便箱開けに行つたら日曜日

司 柳昌 比呂志 川童 笑風 与呂志 青道 金太 まつお 河南子 我勝 和子 醉照 柳弘 希久志 重人 雅醉 洛元 鉄心 良花 たもつ 美花 末坊 一步 杜的

特定局 局長さんが拭き掃除  
励ましの言葉が並ぶ母の文

みちのくのままに別れた橋へ来る  
足腰に無理を言います年勝てず

足早やに帰る男の影法師  
素足から土の温もり聞く安堵

足代をそつと渡した白封筒  
足枷がとれてもとび方を忘れ

お百度の一步一步にある願ひ  
一電車遅らせ用を聞いてあげ

空港を見に行く電車よく喋る  
泣き虫は乗せてくれない縄電車

縄電車幸せごっこしています  
砂の私語聞いてうなずく土踏ます

転動を拒み万年ヒラ通す  
父親の主張 家族に拒まれる

寺の子もサンタクローズ待っている  
菊炭の灰をおぼつて霜の朝

忘年会すつたもんだて会費取る  
としよりの意地は孤独の冬木立

成人式 過剰包装街に行く

倉吉川柳会

谷口

次男報

猪を食つて世界の夜が明ける  
いのししよ振り落とさずに連れてゆけ  
いのししが一番乗りの初詣  
山荒れて猪里に餌を探す

落児  
きく子  
薫

福一  
吉太郎

柳宏子

つこ子

瀧小

一笛  
寿美子

メ女  
紫香

重人

風云児

芳子

ただし

知香子

悟郎

博史

登代子

明光

武庫坊

正坊

ゆり子

小康子

よしえ  
独歩

伊勢暦買つて亥年の策を練る  
私は亥右に左にゆれません  
手負い猪勇気をふるい突進す  
猪も酒と女に弱かった

猪も食うか食われるかの夜明け  
猪もつまの情けにほだされる

猪突猛進本当は遁走の姿  
好感度一〇〇です彼が猪の年で

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

日進月歩意外に公害落し穴  
歳のくれゆっくり歩く臍曲がり

盆暮れと小さな義理に胸痛め  
暮れなすむ鴉七つの子へ急ぐ

年末の罪が版画の中で揺れ  
一流でないが律気な蛙の子

爺ちゃんの包丁研ぎは一流だ  
一流の師匠に匂うサロンプラス

一流も二流も同じ余命表  
お茶目な見意外なき余命表

味増加減ぐつぐつ煮えるぼたん鍋  
ハンカチで包める偽証なら許す

妥協せず涙を置いて娘が帰る  
着ぶくれた友と語らう冬の旅

岬川柳会

八十田洞庵報

山門に尼僧の姿紅葉晴れ  
どう見ても着晴れのしないわが姿

年毎に姿声まで亡母に似て

御前  
サカエ

次男

和枝

寿朗

仙康子

苦句

喜美子

向西

修水

正治

すみ

十四郎

昌子

夢之助

弘治

勇次郎

末貞一

六浦

澄子

まさ

鹿太

悦子

春江  
淑子

お転婆もきまようはしとやか舞い姿  
孫の姿悪い癖まで親に似る  
神棚にくじを供えた真顔見る  
宝くじ当てたら寄付をするという

吉日に買つたくじです当たりそつ  
大吉をお守りにして持ち歩く

宝くじ夢と欲との二人連れ  
当たり籤だつたと思つ夫といる

関空がひらいて地図が様変わり  
地図を広げ世界旅行をしたつもり

地図を片手に方向音痴まだ迷い  
古地図で日本領土をなつかしむ

地図にない島が穴場と誘われる  
わたくしの地図になつた今の道

駅の地図他社の線にはそつけない

翠洋会

渡部さと美報

地球が回る狂つた人もたんととせ  
まだ六十狂える人に出逢いたい

二十五時ペンも私も狂い出す  
株市場冷や冷やとして年の暮れ

木枯しにそば屋の暖簾つくぐり  
冷たいとかんにん袋もつぎだらけ

いじめ見て知らぬ振りする冷たさよ  
冷たさを忘れて山の星といふ

嫁姑器用同士でうまが合い  
器用貧乏うだつ上がらぬ父の靴

花百科器用な祖母の庭いじり  
器用だとはめられ料理手が抜けず

正美  
庄六

末吉

慶之

年子

文雄

晶子

良平

よし子

みつ子

安孝

八重

いと

洞庵

千梢

絹子

佳秋

叔子

光子

たま子

東雲

宏子

綾子

久峰  
真砂

器用さが貧乏神もつれてくる  
 器用な腕もてあますペンキ塗り  
 無器用な口ポットだから愛される  
 小器用に生き貧相な土踏ます  
 器用だと思ふ哀しいなどおもつ  
 独りに慣れて男器用に柿をむく  
 器用な足をかばって器用な手  
 ぶきつちよに時の流れが速すぎる  
 編隊に溶けこみ自分見失う  
 編隊で来る孫を待つお年玉  
 不器用な尻尾を犬に噛みつかれ

堺川柳会

河内 月子報

一美 蛙  
 正坊 楓 楽  
 英一 希久子  
 宣司 恭昌  
 さと美 鬼遊

関空へ大波小波なびき出す  
 原風景は夜空をそめた焼夷弾  
 近いからまだ関空は行ってない  
 夕やけに染まり全身洗われる  
 親しくはないが訃報にむわられぬ  
 陽のあたる歩道老婆が一人ゆく  
 親しくて喧嘩ばかりしています  
 暫くはこの風景に溶けこもつ  
 親しげに貧乏神が寄ってくる  
 関空を見にみんだけのバスツアー  
 宙さんに似てみんだから親しまれ  
 親しさは隣の庭と続いている  
 泉州の訛を乗せて飛ぶジェット  
 一方的に親友にされている

川柳塔とつとり

武田

帆雀報

小雪山 半銭 かりん 楓 都 春香 夏子 星子 菜々 一二三 東雲 天文 天笑

同じ趣味もつ敬老の輪に和む  
 手作りの杖敬老の日に届け  
 空港で別れを惜しむ影法師  
 空港は俺の棲処と鳥は言う  
 空港で待ってる恋はつら過ぎる  
 空港は喜怒哀楽の別れ道  
 逢引は空港だよと電話する  
 空港に降りる前にはただ折る  
 お帰りと故郷の空港あたたかい  
 空港へ錦のスーツ着て降りる

サークル檸檬(1月)

小林 一夫報

明美 孝男 山人 粗粒 孝原 崇 友夫 侑里 日枝子 帆雀  
 みつ子 薫 雅子 智恵子 いわゑ あすき 喜美子 たか子 智子 希久子 房子 一夫 正坊 楓 薫 千代

日本より関空見たく来た外人  
 親しんだかたちに輪ゴムのびている  
 目の位置を下げて親しくものを見る  
 夫婦とやさほど親しい仲でない  
 関空へ用がないから誘われる  
 石女に何と眩しい七五三  
 風景を目に焼きつけて里を出る  
 SLがまだ走ってる夢の中  
 親しさは田空仏の微笑う部屋  
 欲が勝れ親しき仲にない礼儀  
 たそがれの車窓から見る冬の墓地  
 漁を捨て新空港でガードマン  
 格安のツアー 関空から初春に  
 ラビートとはるか真剣勝負する  
 きどらないジョークに才女親しまれ  
 借景も一緒に売って街に住む

春蘭 美代子 昭子 鬼遊 千歩 美子 途子 照 好啓 みつこ 勝晴 文時 元紀 外吉 頂留子 桂子

土作りから豪華な菊の夢を見る  
 どう見ても菊作りする顔でない  
 絢爛と菊人形の花の乱  
 大輪の菊愛で柳友と酒をくむ  
 床の間で菊がもてなす愛の使者  
 風の野に耐えて野菊の立ち姿  
 喜びも悲しい時も菊の花  
 老眼をみがき美人を振り返る  
 敬老会ピカピカの老春もある  
 九月十五日母の元気がありがたい  
 老いらくの恋を見つけた敬老会  
 教え子の講演を聴く敬老会  
 敬老のころ老母へ手糸編む

喬水 一枝 螢 圭一郎 黙光 静生 輪多朗 享 俊路 しげる 楊芝 舎人 一京

平和かな青年の掌やわらかい  
 キーワードは哀 魂揺れてすれ違  
 鍵のない暮ししたくてたくって  
 母には見える鍵のかかった子供部屋  
 ガラスに写るすこし疲れた人間が  
 待っていてくれてた月とまた歩く  
 会って来た余情ぼろんとキーに触れ  
 祈るものは持たすひたすら鶴を折る  
 奥さまはお出掛けキーも眠くなる  
 スペアキー 余生楽しみものど知り  
 琴線に触れずに落ちた青リソゴ  
 手術の妻へ気づけば我に信仰もなし  
 言うなればお前はただの老ピエロ  
 雑巾が乾いて低温やけどする  
 野良でいておつとりとした見事な目  
 二番星くらいで輝いていたい

# 本社 一月句会

一月七日(土)午後五時半  
メンスフアツションセンター

平成七年初の本社句会は、出席者九十八名、新年とあつて和服姿の女性もちらほら、邦楽のテープが流れる中をそこで年賀のあいさつを交わすさわめきの中で開会された。

はじめは各賞授賞のセレモニー。銀河系賞の藤田芳郎氏欠席のため、トップは茴香の花賞の西田楓葉さんに主幹の橘高薫風氏から賞状・賞杯の授与と関係句会からの花束贈呈、次いで各地柳壇賞の野瀬昌子さん、受賞のために遠路、福岡県から来阪した本田忠男さんに一路賞が授賞された。

さらに月間賞杯永久保持者に決定した木本朱夏さんにカップが授与され、本社句会全出席者三十八名の氏名が呼び上げられ、薫風主幹の色紙が賞品として贈呈された。

初出席者は本田忠男(久留米市)野々圭子(和歌山市)谷平照(堺市)長谷川毅正(大坂市)の四氏、月間賞は高須賀金太氏に授与された。

(司会—いわゑ) (記名—ゲン吉・月子)  
(清記—楓葉)(受付—金太・寿美・英子)

## 席題「払う」 遠山可住選

旅はつづいて静かに身の垢を払う  
銃社会を払う祈禱もしておこう  
払う氣のない借金を母にする  
借金を払う序に飲んでくる  
借金を返すつもりは宝くじ  
年替る涙は払わねばならぬ  
出世払いでよいと自分で決めてる  
ふぐのコースを編の財布で払ってる  
一年の厄を払いに旅に出る  
むつかしい顔して夫払うてくれ  
酒カップ抱いて天下の塵払う  
割勘で払うきれいなお付き合い  
金払い悪いが憎めない男  
厄払う男と歩く太鼓橋  
死ぬまでに払う約束だけはする  
ローンやつと済んで終点近くなる  
戦争のつけをとことん払わされ  
塵払う役は女がしめくくる  
月謝ようけ払うて粹にならはず  
ふり払う思いに遠い雪の景  
大声で笑いとばして厄払う  
追い払う嫌な私の影法師  
お払い箱の中に私がデンといる  
払う氣はないのに部長値段きく  
厄払いした事ないがまだ達者

弥生 幹斉 (和)子 房子 柳宏子 寿美子 文秋 しのぶ 弘香 紫香 弘治 かすみ 庸佑 岳人 寿子 風云児 美房 忠男 朱夏 たず子 射月芳 千秀 (彌)美代子 度 文秋

払うもの払うと空が広くなり  
足払いぐらいびくともしれない妻  
人払いして深刻になる会話  
払い下げ何か汚濁の匂する  
押し売りを追っ払ったのは惚けた老母  
お金払うことを忘れて食べている  
出世払いにしてくれてるでんこ盛り

佳 日だまりへこころの垣根とり払う  
追い払うたびに思い出深くなる  
月末に払った顔で飲んでる  
年金で払う二人のコーヒー代  
医者代を払いゆっくり話する  
人 ひとり  
ふり払ったつむりの影が先に行く (彌)美代子  
地 払うのがおそくていつもおごられる 度  
天 母ちゃんが払ってくれてるらしい 月子  
軸 青春のツケを古希まで温める 可住  
兼題「スタート」 小池しげお選  
スタートは横一列のはずだった 清史  
スタートへ酸素しっかり補給する 艶子  
スタートは話したくないトップアスター 君子  
スタートはしがゴルが分らない 文子  
スタートの時は自分を信じてた 寿美子  
一年のスタートにます水を汲む 昌子

新しい下着でスタートに並ぶ  
薫

スタートで読むライバルの息遣い  
千秀

ポケットの中の拳がスタートだ  
たず子

スタートは屋台ひいたを忘れない  
庸佑

一浪をスタートにして今がある  
元紀

快調なスタートにメンバーが揃う  
輝子

スタートはがむしやらやった大旦那  
頂留子

スタートもおっちょこちよいはおっちょこちよい  
笛生

スタートの罎雲から乱を見た  
元紀

スタートの朝ゆっくりと風呂の中  
月子

スタートラインここから修羅の道つづく  
房子

しし年のスタートだけで慌てない  
圭子

スタートは相思相愛だったはず  
柳弘

更生のスタートに賭けるとろろ汁  
栗

楢山へ行くスタートが近くなる  
諷云児

スタートでライバルの顔確かめる  
落児

スタートでいつもつますくお父さん  
正坊

スタートは双子今では百二歳  
利武

スタートは君と僕との仲だった  
稚代

振り向くなスタートはもう切ったのだ  
文秋

達磨の目入れたスタート思い出せ  
隆

スタートに熱燭一本つけてくれ  
朱夏

スタートからボチボチ歩く亀だった  
ルイ子

スタートで躓くことがないように  
備美代子

スタートでは後悔しないはずだった  
文秋

スタートは手探りだった青春記  
正雄

スタートの空はきれいに晴れていた  
薫

六畳一間のスタートだった辛かった  
磔

佳

スタートは満月だった風の旅  
森子

スタートの遅い分だけ頑張りよう  
向西

スタートラインに落ちていたのは柿の種  
朱夏

スタートの躓きバネにしたカップ  
美房

スタートはあした理髪屋へゆこう  
幹斉

スタートに母を泣かせた赤トンボ  
しげお

兼題「しみじみ」  
吉岡美房選

定退の机しみじみ整理する  
天笑

単身赴任しみじみ妻の有り難さ  
柳弘

しみじみと猫の顔みる三カ日  
朱夏

しみじみと話す姑さんのやさしすぎ  
栗

酒好きをしみじみ語る通夜の席  
白漢子

ふり返ると喜劇喜劇の道だった  
可住

神さまがしみじみ金の世と思つ  
磔

しみじみと鏡の中の幾山河  
輝子

しみじみと話そう冬の酒だもの  
ゲン吉

しみじみと鏡ながめて絶句する  
欣史子

しみじみと亡母を偲ぶ雑煮箸  
稚代

しみじみと聞くナツメロの海ゆかば  
哲子

しみじみと見れば笑くほがふたつあり  
昭子

しみじみと父の声聞く佐渡おけさ  
花梢

母と娘のはなしのしじみ雪もよい  
備美智子

しみじみとあの頃のしじみ古日記  
笛生

森繁の船頭小唄なら聴こう  
保州

しみじみと墓前に詫がる親不孝  
庸佑

死角からしみじみ敵の運を視る  
寿子

辛不幸しみじみ思ふ木守柿  
向西

早春賦しみじみ雲と語らんか  
みつ子

半世紀の平和しみじみ振りかえる  
絹子

しみじみと鬼が身の上話する  
昭子

しみじみと独りの訳を聞かされる  
三男

しみじみと見ればブルドックも可愛い  
備美代子

男しみじみ骨格模型みつめてる  
落児

しみじみと衰えを知る二日酔い  
艶知

しみじみと見れば不思議な絵曼陀羅  
艷子

自分の顔はしみじみ見ない方がよい  
楓楽

みかん剥くしみじみ夫婦してる夜  
照

しみじみと妻の寝顔の静かなり  
かすみ

佳  
しみじみと冬の深さよ重たさよ  
森子

札束にしみじみ脆いわたしです  
幹斉

人の計のしみじみ哀し波の音  
澄子

エリート孤独しみじみ噛みしめる  
源一

しみじみと影絵を抱いて流される  
寿子

人  
限りあるいのちしみじみ歯を磨く  
雅文

地  
冬の夜はしみじみ独りだと思つ  
智子

天  
しみじみと話す胸の窓が開く  
武庫坊

軸  
来し方をしみじみ思ふ春の雪  
美房

兼題「おいしい」  
板尾岳人選

なつかしい亡母のおいしい祭すし  
めぐみ

おいしさに飽きて目刺しを焼いている  
 おいしいという食通の重い箸  
 言い負けるすべ心得てうまい酒  
 横町に安くてうまい天井屋  
 森林のおいしい空気浴びてくる  
 豪快に浜で兜煮皿が待つ  
 おいしいと料理をほめている地酒  
 傾いた軒で頑固に守る味  
 おいしいと言えば再々買ってくる  
 芯のある飯がおいしい新世帯  
 おいしいと言わせる母のかくし味  
 お茶漬けがおいしいおます京に住む  
 勝って飲む水が五臓を駆け巡る  
 民宿へおいしい魚食へに行き  
 大阪で食べたおいしいくないうどん  
 あとで来ておいしい話持つてゆく  
 春の馬車おいしい話載せてくる  
 聞くだけはおいしい話聴いてやり  
 ふぐちりを食べた食べた自慢され  
 好きなもの何かとおでん長い箸  
 おいしいと片っ端から食べてくれ  
 ラーメンがなんとおいしい梯子酒  
 非売品 妻のおいしいちらし寿し  
 宝くじおもしろい夢が風に舞う  
 風下はおもしろい話聞いただけ  
 おそろしい何を食べてもおいしくて  
 おいしいとプロに言わしめたことがある  
 夫婦して七草粥を食べてます

住

英千子 花梢 一風 正坊 隆 雅文 洋 鹿太 艶子 弘治 蝻 可住 弘治 笛生 三男 しげお みつ子 金太 洞庵 ルイ子 柳弘 度 英子 天笑 楓 月子

おいしい話ばかりを乗せて花電車  
 おいしい料理を夫が作ってくれます  
 おいしい話聴きたがつてるロボの耳  
 母さんは何を食べてもおいしそう  
 おいしいとこしっかり掴む蟻の列  
 人  
 青林橋熟れておいしい恋になる  
 地  
 おいしい話はさくららの樹の下で  
 天  
 朱の橋でおいしい斬手に掬う  
 軸  
 野沢漬たっぶり食べに冬の旅  
 兼題「旗」 小出智子選  
 日の丸の旗から探す万国旗  
 今日も無事 高くはためく安全旗  
 赤十字の旗はやさしい風を呼ぶ  
 旗色は玉虫色にして踊る  
 マラソンのピリへも惜しまない小旗  
 丁寧なたたみ白旗しまい込む  
 湯の宿の旗でほっこり迎えられ  
 旗の下 勇気を出して歩かんか  
 横のもの縦にもせずに旗を振る  
 分譲の旗 色褪せたまま残り  
 水色のハンカチわたくしの旗だ  
 出稼ぎを無事に帰した安全旗  
 白旗を曳きずりながら生きている  
 いつでも振れる白旗一本持っている  
 森子 礫 楓 楽 ダン吉 義子 森子 冬葉 寿子 岳人 紫香 洋 朱夏 朱夏 白浜子 雅文 澄子 月子 岳人 柳宏子 文子 しげお 楓美代子 諷云児

保安帽 時々旗を振り違い  
 初参賀 外国人も振る小旗  
 ひきだしの国旗が過去を喋り出す  
 旗出して父っくりに朝の風呂  
 旗上げと旗巻くときのタイミング  
 白旗をいつでも持っている味方  
 日の丸のどがわるいとおじいちゃん  
 胸張って打ち振る旗がみつからぬ  
 旗振って最後の一人待っている  
 白旗を上げて母さん笑っている  
 日の丸をやかく言うて悲しいな  
 愛はとこしえ胸にたたんだ旗がある  
 父の振る旗ならついて悔いはなし  
 白旗を自分に振って宵寝する  
 汗しみた野良着は僕の旗印  
 思い切り旗を振ったら従いてくる  
 決めつけて福祉の旗を振りかざす  
 定年の旗を無色に染めなおす  
 こだわって旗日に旗を掲げる妻  
 中立の旗が左右に揺れている  
 冷蔵庫の中にも嫁の旗がある  
 男には見えない女いろの旗  
 旗色が悪くてトイレ出られない  
 日の丸のしみ洗ってもこすっても  
 海外で見る日の丸は論のほか  
 秀  
 元旦の旗へんこつにされている  
 軸  
 こはお役所日の丸の旗出している  
 久峰 栗 すみ 月子 満津子 可住 射月芳 寿美子 紫香 射月芳 紫香 関吉 関吉 たず子 武庫坊 楓 楽 稚代 欣史子 諷云児 天笑 保州 幹 齊 みつ子 (和)子 楓 楽 義子 吐来 智子

兼題「笑う」

橋高薫風選

初鏡先ずは笑顔をしてみたり

英千子

寅さんに笑うほのほの初春の午後

清史

内心は穏やかでない高笑い

久峰

破顔一笑 弱気な部下をたしなめる

哲子

あたためて来た反論を笑われる

弘直

笑わせるコツをおぼえた孫娘

智子

オホホにもピンク紫あつて春

隆

寝たきりへ東西寄席の初笑い

智子

笑われたあの日をバネにきたと言う

紫香

少しエッチですぐにみんなを笑わせる

洋

笑ひ癖がついた真夜中の冷蔵庫

和子

お互いに笑ってケリをつけておく

英千子

今にして思えば耐えてきた笑顔

良知

磯野家と同じ笑いがある我が家

美房

子福者の笑顔は戎さんに似る

弘治

晴れ着の娘一人が笑い皆笑う

稚代

福笑い何でわたしと見くらべる

月子

私宛書留笑みがこぼれ出る

艶子

あきらめが上手な妻でよく笑う

智子

母さんが笑ってケンカにはならず

美代子

九十の母が笑うとうれしくなる

房子

テレホンカードの残りで笑い話など

吐来

ご馳走があるからみんなよく笑う

寿美

笑われているとは知らぬから笑う

勇太

企みを秘めてるらしい高笑い

豪快に笑い飛ばして無一文

やるだけはやった男のいい笑顔

怪しいと思ふ議員の高笑い

野仏は雪の中から笑み給う

水仙に笑いを貰う夫婦旅

もう少し笑えば梅がほころびる

子規八雲 良い横顔で笑わない

仁王さん夜中にきつと笑うだら

なんとなく笑い話の哀しけれ

人形が笑うと母の顔になる

笑ってるうちは貧乏とは言えぬ

酔いどれがうつろに笑う終電車

微笑みのかたちシュークリームが焼ける

志ん生の同じところでまた笑う

病人を笑わせながらむくりンゴ

主流から外れて笑い取り戻す

爆笑の中で一人になっている

父だけは口を開けずに笑うなり

軸

正坊

すみ

度

金太

鹿太

路児

女

朱夏

楓楽

しげお

花梢

薫風

金太

花梢

薫風

高橋千万里子追悼句会

とき 3月3日(金)午後1時から  
ところ 堺総合福祉会館  
課 類 「高」 河内天笑選  
「橋」 中田たつお選

会費 1000円  
「千」 河内月子選  
「絵」 梶川雄次郎選  
「皿」 橋高薫風選

気高町制施行40周年 記念誌上川柳大会

課題と選者(各題2句)

氣 橋高 薫風 湯 小林由多香  
高い 天根 夢草 白い 林 荒介  
郷 柏原幻四郎 風 江原とみお

萌える 小出 智子 光 土橋 螢  
遙か 神平 狂虎 翔ぶ 小谷美ツ千

投句料 1500円(記念品・入選作品集呈)

締切 4月20日(木)

表彰 7月 当地で町長賞ほか贈呈

投句法 総合上位10位まで呈賞

投句先 四百字詰原稿用紙に住所・氏名

所属柳社名を明記

〒689-03 鳥取県気高郡気高町飯坂

84-4 鈴木 公弘方

「誌上川柳大会」事務局

主催 気高町文化協会

主管 くらぼこ川柳会

# 柳界展望

会館で開かれ、同人の宮尾みのり・白石春嶺の両氏が入賞した。

★第30回川柳塔きやらぼく忘年会は12月4日、169名が出席して米子国際ホテルで開かれた。最優秀賞と各題特選句次のとおり。

〈最優秀賞〉  
 仏さんが手帳を持つとおそろしい 小島 蘭幸

〈特選句〉  
 過労死の椅子は野積みになつて江原とみお  
 本棚の本が眠って重くなる 大塚 恵子

★川柳塔おっぱこ吟社主幹木村あきらさんの句碑が香川県白鳥町立中央公園に建立され、11月20日、除幕式と句碑建立記念句会が開かれた。句はかつて四国新聞社賞に入選したもので、「自画像に少し笑顔を書き足そう」と白字で刻まれている。



★平成6年度愛媛県民文化祭川柳大会が11月23日、320名が参加して県民文化

★芦屋番傘誕生記念句会が12月18日、155名が参加して開かれ、川柳塔社同人2氏が各題秀句(最終句)に選ばれた。

全山紅葉 神のタクトの鮮やかな 奥田みつ子  
 もう二度と訪うことはない 始発駅 奥山美智子

★京都塔の会は平成6年度の年間賞を決定、年末句会で表彰した。最優秀賞は上田真柳氏、得点賞は①山本礫②都倉求芽③松川杜的④松川芳子⑤田中正坊各氏

★川柳サークル卯の花は、平成6年度の年間得点賞を次のとおり決定した。①河瀬芳子②川島風云③山本礫④丸谷昭太郎⑤田中薫

★西宮北口川柳会は平成6年度の年間賞を決定した。最優秀賞は門谷たず子さん

得点賞は①西口いわる②門谷たず子③香川水声④春城

武庫坊⑤山本礫・川島風云

八木 千代

児の6氏。

★第16回川柳せめんだる誌上大会は306名が参加、入選作品が「川柳せめんだる」11月号に発表された。各題特選句次のとおり。

意識白濁 今話さねば赦さねば 梶原サナエ  
 豊かなんだねみん意見を持つている 井上良子

争点に火をつけ林檎刺している 平田 香子  
 惚けたかな 過去が点減しています 久部 信子

ともだちを偲ぶ小さな火を炊いて 長谷川博子  
 甘くはなかつた川向こうの花火 斉木 敏子

▽同人消息△  
 ■小野克枝さん(倉敷市)12月5日付「山陽新聞」・山陽柳壇(寺尾俊平選)の第1席に次の句が入選した

茶碗むしたつた二つになりました

■同人の森川まさお・栗谷

▽訂正△  
 ■1月号P26(川柳塔)下段5行目「子に残す…」

春子・結城君子、誌友の森川抜智・森本節子各氏を中心とするファミリー誌「たなばた」28号が旧冬、刊行された。「思い出」や「消息」「ミニ・ニュース」や「せんりゆう」頁もあり、楽しい内容が盛り込まれている

▽出版△  
 ■「川柳燦燦」(川柳読本) ②・岩井三窓著・創元社刊 A5判364頁・定価2800円) ①作品②川柳への招待③なんとなくエッセイ

④「川柳燦燦」に寄せて⑤またもやエッセイ

■「日ぐれ坂」(前田美巳代)の第2句集・A5判214頁)昭和58年から平成5年の10年間にわたる作品集

秋が好き淋しさが好きな 送る

下段5行目「子に残す…」

「子に遺す…」

「子に遺す…」

「子に遺す…」

## 2 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	2日(木)午後1時から 便乗・二番・破る・差	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西側西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	3日(金)午後1時から 人形・逆・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
京 都 塔 の 会	10日(金)午後1時から 粥・汲む・絵馬	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 良心・逃げる・隅・雪	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 ま つ え	11日(土)午後1時半から 立つ・正面・高齢	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後1時から 忘れる・ベテラン・窓	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から コピー・解ける・しきり・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後1時から 開・白・メンバー	豊中市立釜池公民館 阪急釜池駅西へ150米 〒560 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(木)午後1時から 急ぐ・調子・生きる・自由吟	高槻市立城内公民館 阪急高槻駅徒歩10分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島満云児
南 大 阪 川 柳 会	17日(金)午後6時から 返答・面子・絵葉書・冷淡	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸 和 田 川 柳 会	18日(土)午後1時半から 引く・笛・平均・報告	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19日(日) 正午から 期待・舌・えくぼ・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 底・便り・うっかり・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富 柳 会	25日(土)午後1時から 川・読む・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
東大阪 市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から 寒い・テスト・気兼ね・傷	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 民 会	26日(日)午後1時から 聞く・医者・コンビ・知る	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、田中正坊(06-336-3395)へご連絡ください。

# 編集後記

★国語学者の金田一春彦氏は、文章について次のように書いている。一般に文章というとき、まず、「主題」について考える。これはもとより大切だが、同氏は、「主題」に対して「従題」という言葉を使う。主題が「幹」なら従題は「枝」でこれを五つに分けている。

★①自分がしたこと②自分が見聞したこと③自分が感じたこと④物事の一般的説明⑤そのことについての今の感想。話にせよ、文章にせよ、具体性を持つのは、①②③がある場合で、これなしに④の一般的説明や⑤の感想を述べてみて、ほとんど説得力を持たない。傾聴すべき意見だと思ふ。★新聞記者出身の辰濃相和氏も、文章の書き方について述べている。①まず現場を踏むこと②先入観を持たないこと③わかりやすく、さらにわかりやすくを心がけること④均衡的感覚を大切にすること⑤具体的事実を大切にすること⑥正確であること⑦常套句を排すること⑧流れがよく、主題がはっきりしていること。これを単語にして、現場・無心・平明・均衡・具体性・正確・新鮮・流れ―として

いる。金田一氏の説と相通ずるものがある。エッセイとポエジーとは同じではないが、作句にあたって、参考になるのではないか。★一月号から「川柳塔」はじめ四つの投句欄の選者がすべて交替した。投句者も増え、かなりの厳選となっているが、爽やかな新風が吹き込まれたのは確かだ。しかし、何もかもがすすきりした訳ではない。(正)

☆この欄を担当して四年の月日が流れた。平成三年一月号から読み返してみても、全く冷や汗ものである。平成三年九月号に、私が少女時代、短距離の記録を十分の一秒縮めるために燃やした情熱を、川柳というコーラスに、じつくりと傾けてゆきたいと書いていた。

☆競走はタイムレース以外ゴールの着順が問題になる。記録や、フォームが悪くて

も、初めにテープを切れば一位である。走るフォームが美しいからと順位を繰り上げてはもらえない。

☆川柳のコースに着順はない。フォームの美しい人もあれば、馬力の優っている人もいる。多作の人も、ごく限られた句会にしか出ない人もいる。スタイルも考え方もいろいろあるが、それらを認め合い、磨き合いたい。身近な話し合いから、きつと素晴らしい川柳が生まれるのでは。(み)

## ひとこと

「漢俳」と「漢柳」

全日本川柳協会理事長の山田良行さんが珍しい句集を出版した。題して『漢柳 山田良行句集』。

良行さんの川柳をハルピン医大の同級生で詩人でもある王文浩さんが中国語訳したものである。

すでに短歌・俳句の英語訳・中国語訳があり、特に俳句については古くから中国語訳が行われるとともに、林氏らによって新しい

中国詩としての「漢俳」が創作されており、本誌でも紹介された。しかし、川柳の中国語訳はおそらく初の試みであり、「漢俳」に対していみじくも「漢柳」と名付られ、しかも五・五の漢字十字による定型詩となっており、労作として注目される。その一例―

赤ちゃんの両手幸せつかむよう  
赤ちゃんの両手幸せつかむよう  
(緊握嬰兒手 幸福湧心頭)

三条 三吉

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（4月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確にお書きください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

4月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (8句) 橋 高 薫 風 選  
 水煙抄 (8句) 高 杉 鬼 遊 選  
 渺湖抄 (3句) 小 出 智 子 選  
 茴香の花 (3句) 西 出 楓 楽 選  
 吟詠 (3句) 「番(はん)」 千 葉 風 樹 選  
 「映(えい)」 古 野 ひ で 選  
 「たつぷり」 安 平 次 弘 道 選  
 初歩教室「太(たい)」(3句) 吉 岡 美 房 担 当

川柳塔欄への投句は同人、渺湖抄欄は誌友(誌代半年前納者)茴香の花欄は女性に限ります。

5月号 初歩教室「花」  
 課題吟「馬」「とどろく」「女々しい」

## 本社2月句会

とき 2月6日(月) 午後5時半  
 ところ メンズファッションセンター3F  
 中央区内本町1-1 電話06・941・1918  
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角  
 おはなし 河 内 天 笑  
 兼題 「越える」 新 家 完 司 選  
 「詳しい」 桜 井 千 秀 選  
 「紹介」 川 島 諷 云 児 選  
 「こまごま」 高 杉 鬼 遊 選  
 「差」 橋 高 薫 風 選  
 席題 1 題 当日発表 各題2句以内  
 会費 500円  
 投句料 400円(80円切手5枚)同封のこと

## 本社3月句会 7日(火)

兼題 「呼ぶ」「僅か」「経緯」「ずばり」「家族」

## 夜市川柳募集

第9回「的」 田頭 良子 選  
 ハガキに3句 2月末締切  
 投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺 川 柳 会

3月の常任理事会は3月1日水

## NHK川柳作品募集

課題「軽い」 森中恵美子 選  
 ハガキに3句 2月10日締切  
 投句先  
 〒540-01 NHK大阪放送局  
 「文芸部」川柳係  
 発表 2月25日(土) 午前11時5分から  
 ラジオ第1放送

## 西日本文字放送作品募集

課題「占う」 森中恵美子 選  
 ハガキに3句 2月15日締切  
 投句先  
 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20  
 大手前ウサミビル3階  
 西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成七年二月一日発行

編集兼 橋 高 薫 風

発行人 藤 原 童 心 社

印刷所 藤 原 童 心 社

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六  
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社

電話(06)261-1691 四番

振替 〇〇九八〇一五 一三三三六八番

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 郷土史

各種 **本** (製作専門)

- 少数の本も取り扱っています。
- ご相談ください。

ミヤケ プランニング  
**MIYAKE**  
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 **06-659-5514**(代)

FAX **06-652-2928**

**ジェイ出版**

電話 **06-658-8741**(代)



泣いて笑って……  
夜を通り過ぎたら  
また陽がのぼっていた  
男のロマン



オーエスケーの  
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7  
(06) 941-8018